各流傳書ニ傳ヘラレタ
當身ノ個處ト名稱

南蛮殺倒流拳法宗家三世
忍術甲賀流第十四世
藤田西湖著

拳法極意

當身殺活法明解

日本武術研究所

拳法
極意

當身殺活法明解

目次

はしがき

凡例

はしがき

本書は、武術拳法に伝へる名流各派の極意殺活法を、人体生理解剖学上に基き永年実験研究を重ねたる結果、その最も適確有効と認むる急所の正位置を、一々解剖図上に明示しその打撃の要領と、仮死即倒の原因を、医学的見地より解明したもので、本書により、その箇所と打撃の要領を熟得練磨せば、一撃よく人を倒し、人を活す、殺活自在の妙を得ること確実なりと信ず。

日本武術研究所長　藤　田　西　湖

凡　例

一、本書は才一に、各流各派が伝へる当身急所の部位と名称を参考として示した。

一、才二に人体各部より見た急所の正位置を示した。

一、才三に人体各部解剖図上に急所の正位僵を示し、その刺激により仮死即倒に至る原因を医学的に解説をした。

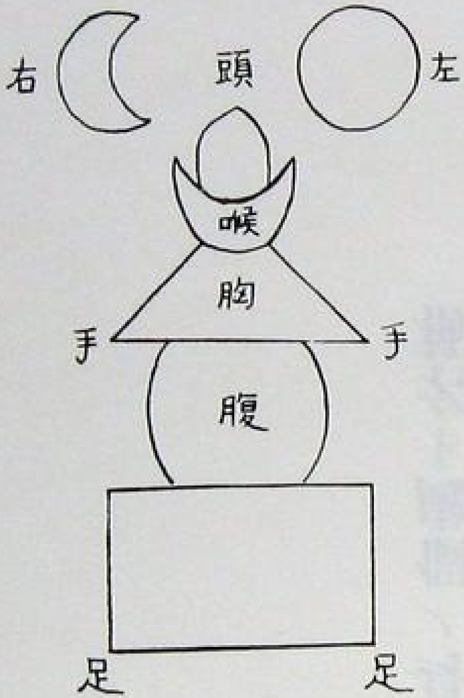
一、才四に当身に使用する人体の部位を示した。

一、才五に当身の要領、手法を示した。

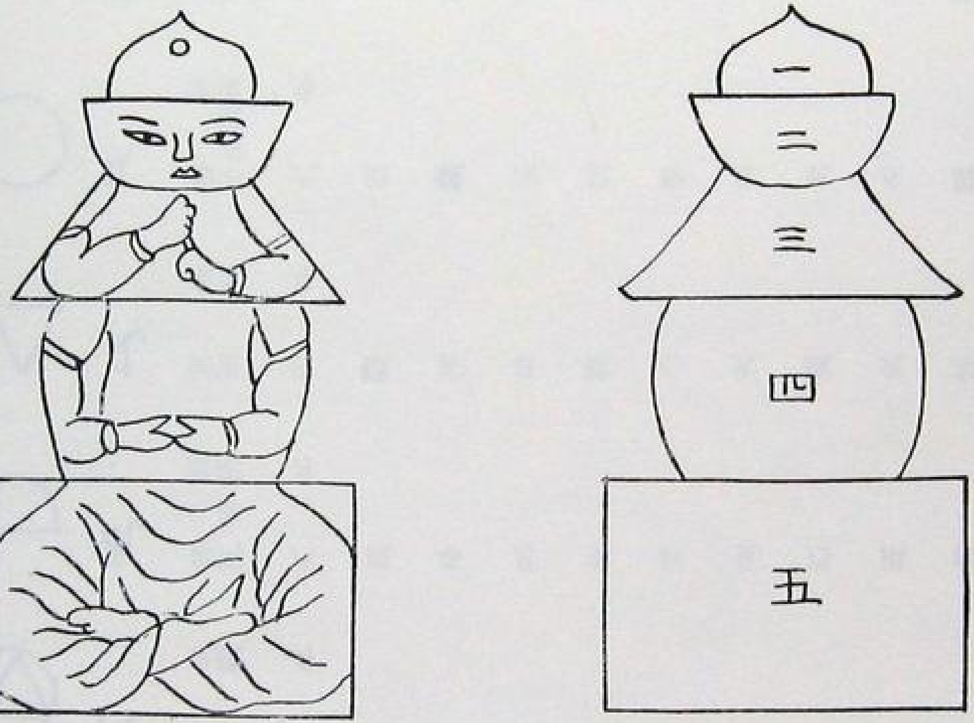
一、才六に活法を施す上に必要な参考智識として脊髄中枢神経分布図並脊推測定法を示した。

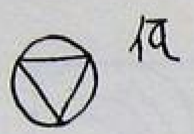
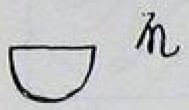
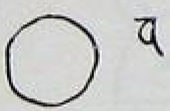
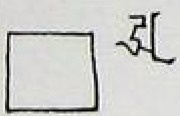
一、才七と八に活法と一般医家も応用する人工呼吸術を示した。

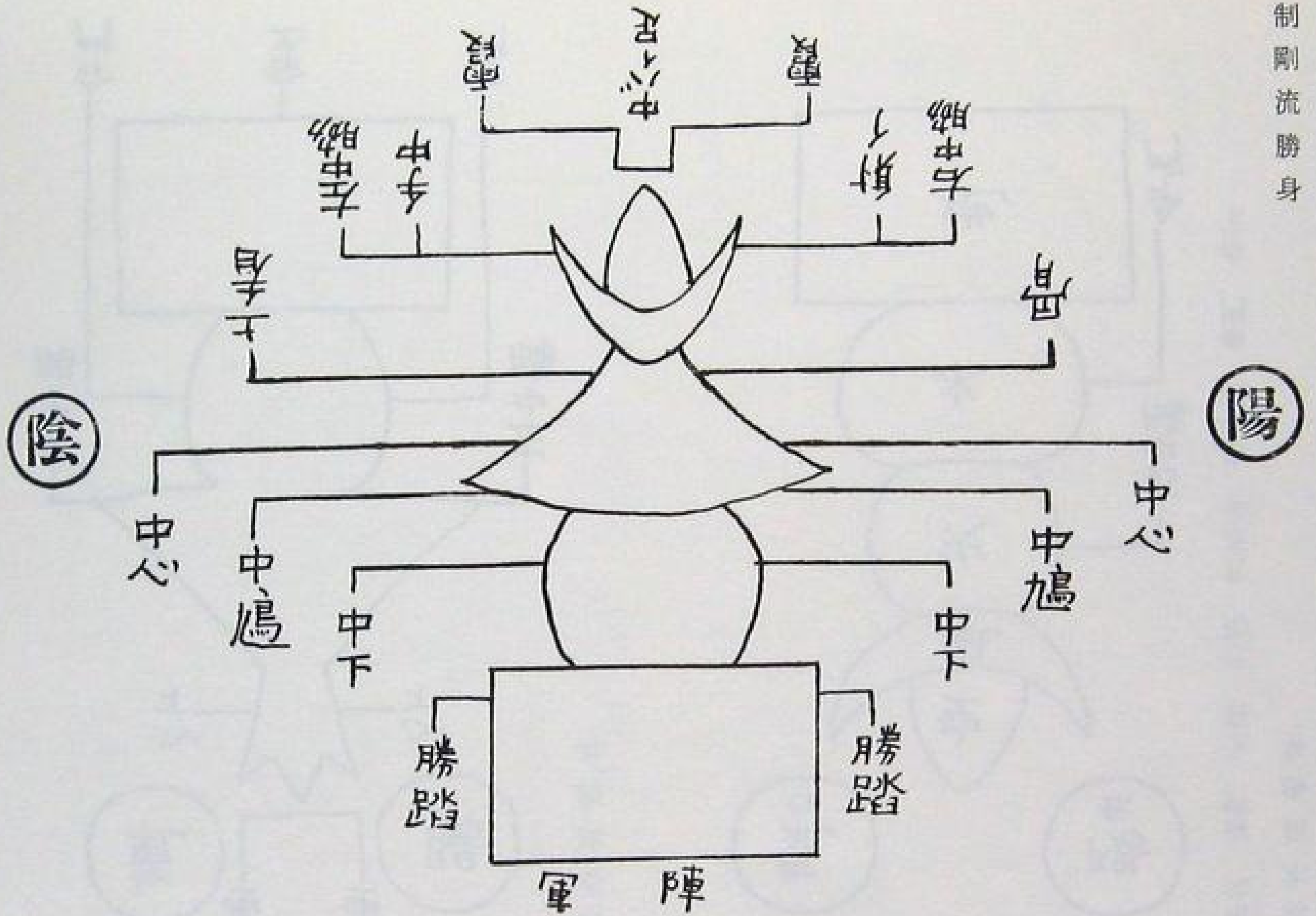
古い伝書には、直接人体を繪がかず、五輪の塔を以て五体に擬へ、日月陰陽を以て左右を示し、頭部、咽喉、胸、手、腹、足に相当する部分〳〵に只大体の名称を付して急所の位置を示し口伝を以て伝受する方式をとつてゐた。



五体を象る五輪塔

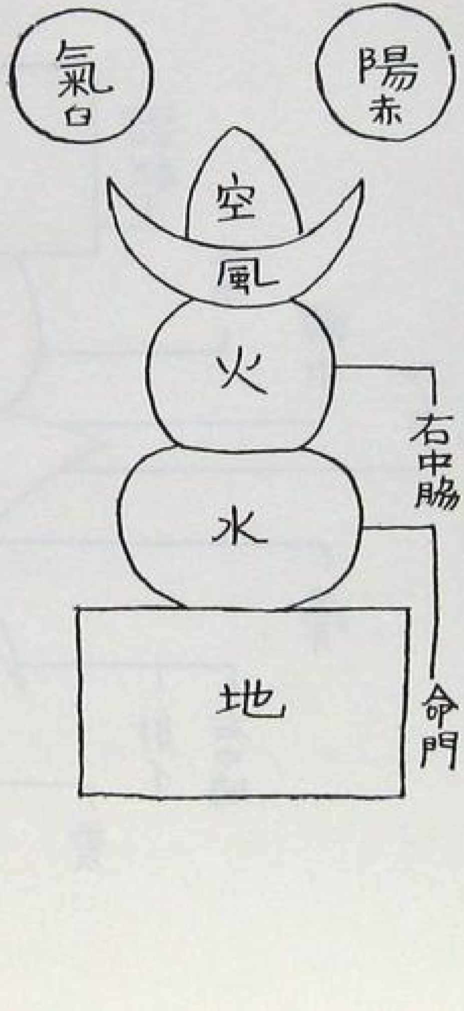


一	頂(頭)	青	空	東	木	肺	震	雷	酸	角	四月	阿閦如来	
二	面(額)	白	風	西	金	肝	兌	月	辛	商	八月	阿弥陀如来	
三	胸	赤	火	南	火	心	離	日	苦	徵	三月	宝生如来	
四	腹	黒	水	北	水	腎	坎	雨	鹹	羽	六月	不空成就如来	
五	膝	黄	地	中央	土	脾	艮	雲	甘	宮	土用	大日如来	

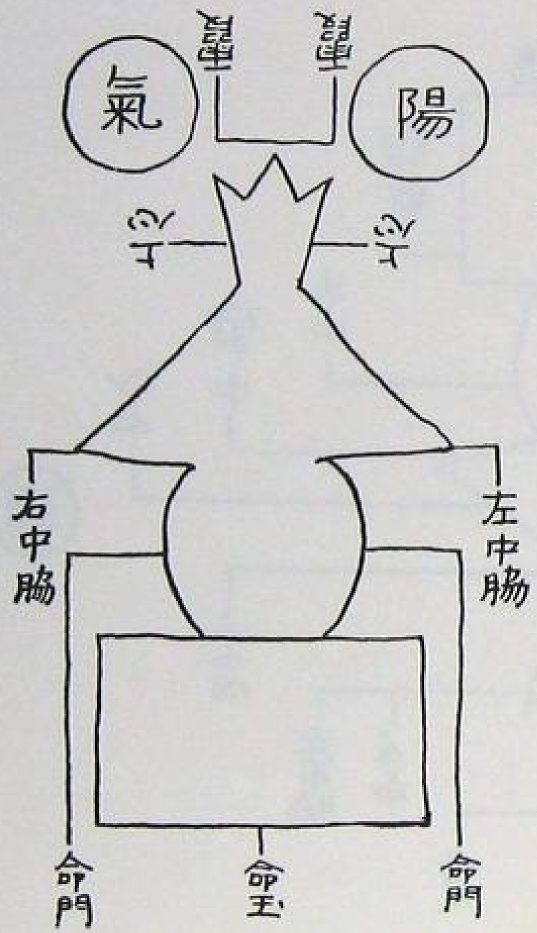

陰
陽
中心
中鳩
中下
勝踏
中心
中鳩
中下
勝踏
軍陣

荒木流勝身

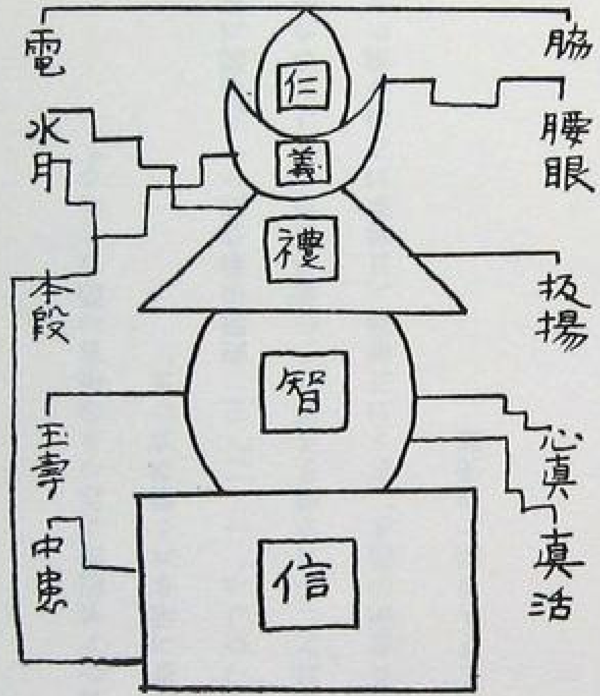
霞　電光　鐘声　上宮　肝納　左右脇　右中脇　命門　命玉



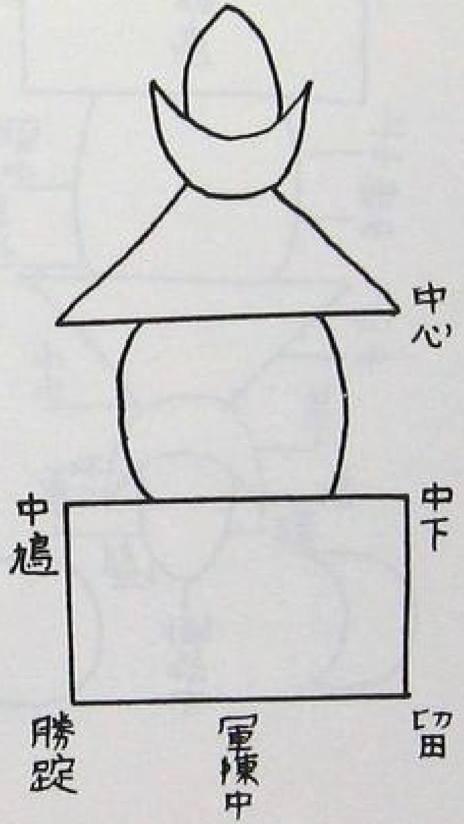
清心流勝身



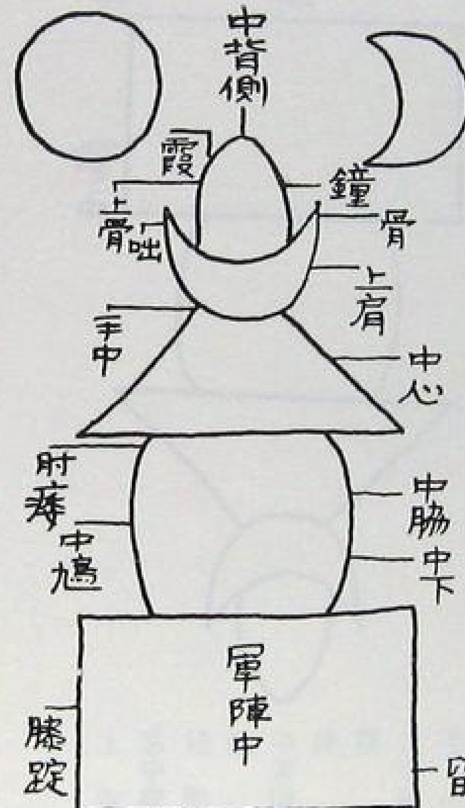
竹内流五行当



伊賀流勝身



制剛流　梶原流　仏体流

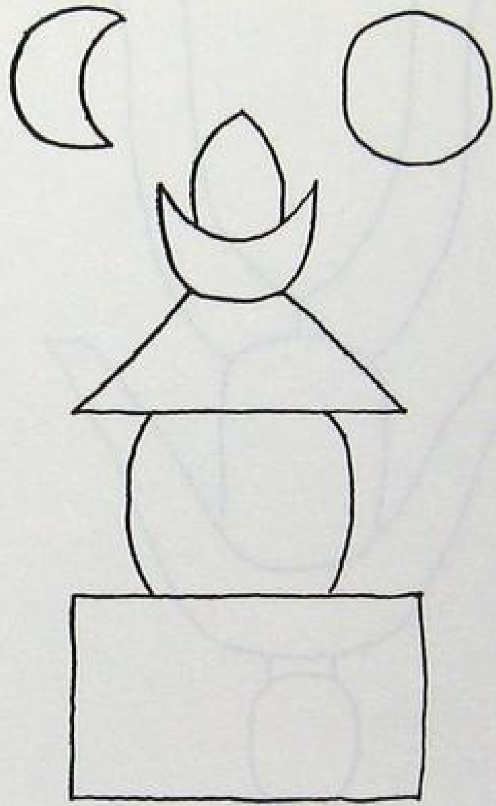


五輪塔より人体図への変遷

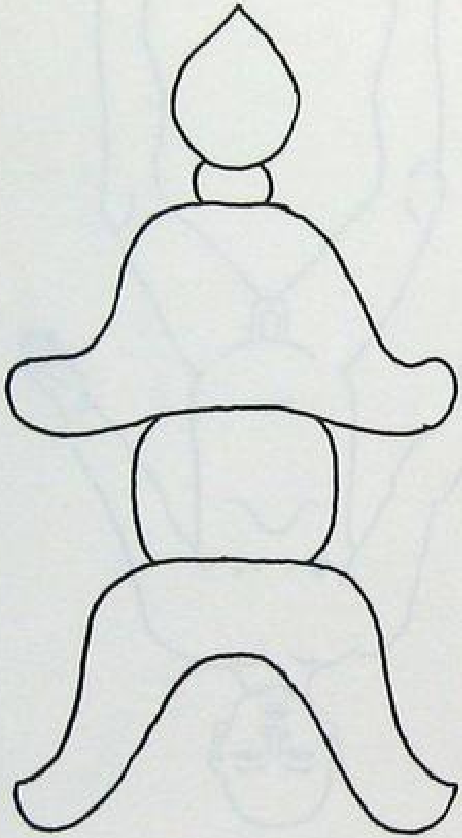
当身急所の図も、古くは五輪塔（五輪塔は五体を象ったもの）を以て、これを勝身と称しその急所部位を示してゐたが、それがいつしか、一、二、三、四図の様な順で、人体図に更められ、伝書に示される様になった。

従って才四図に近いものが古い図式である。

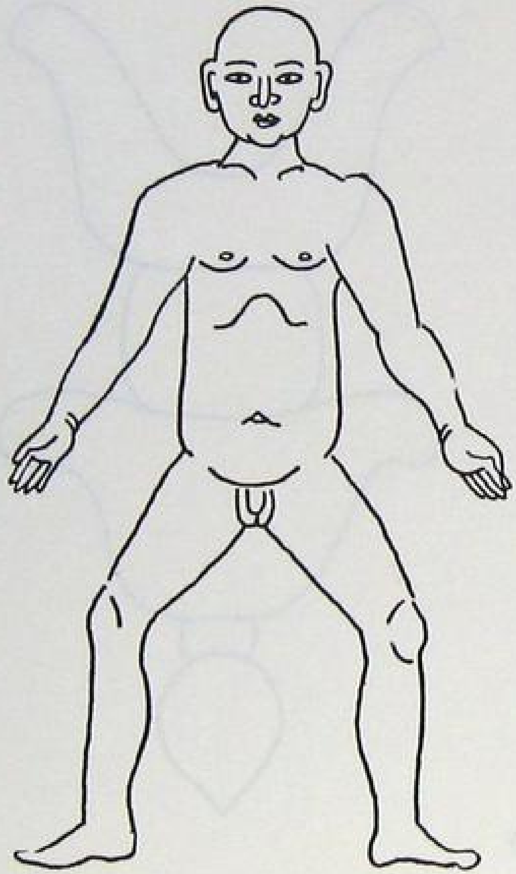
(一)



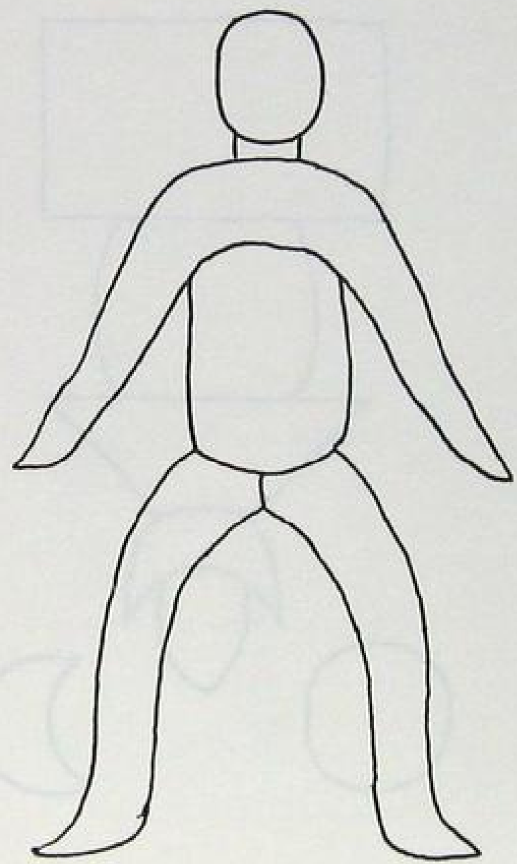
(二)



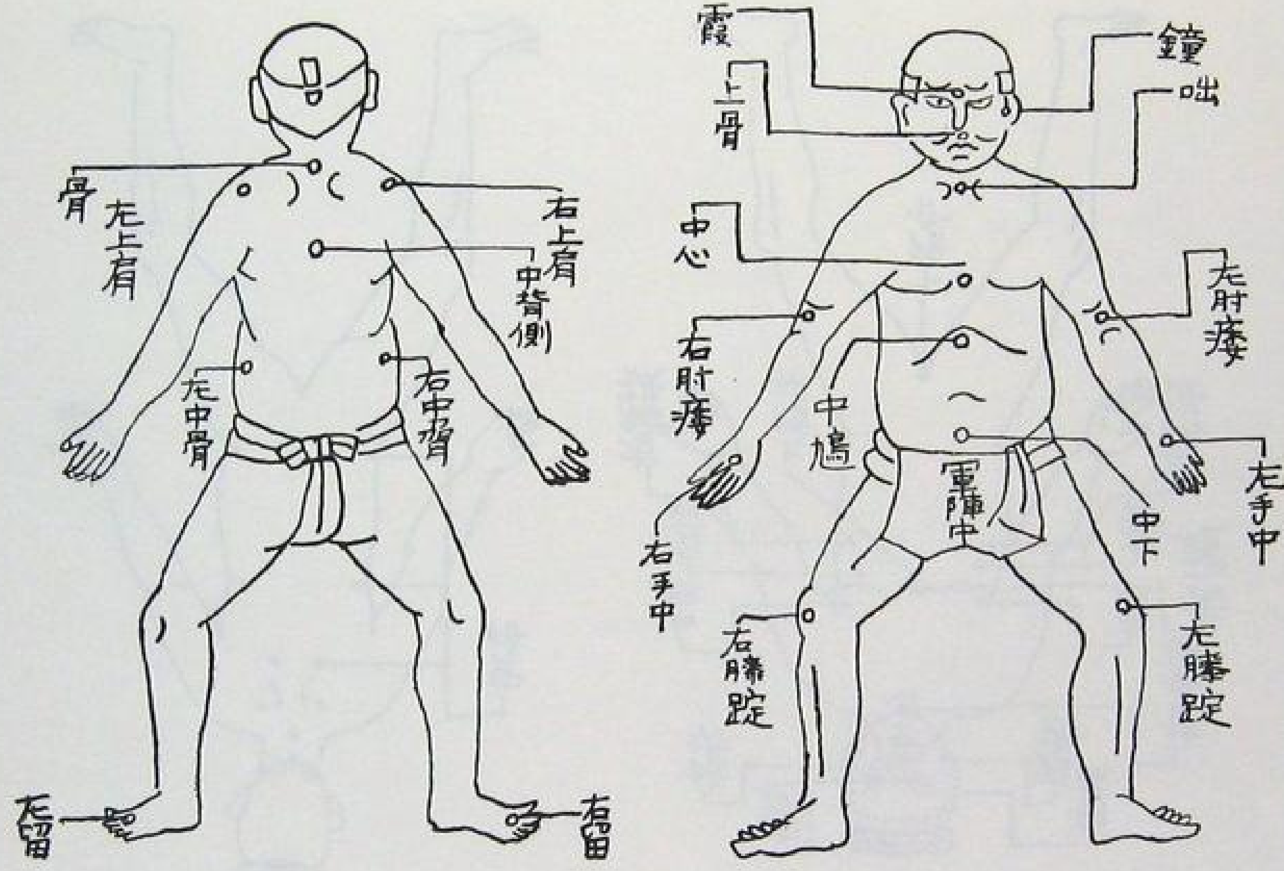
(四)



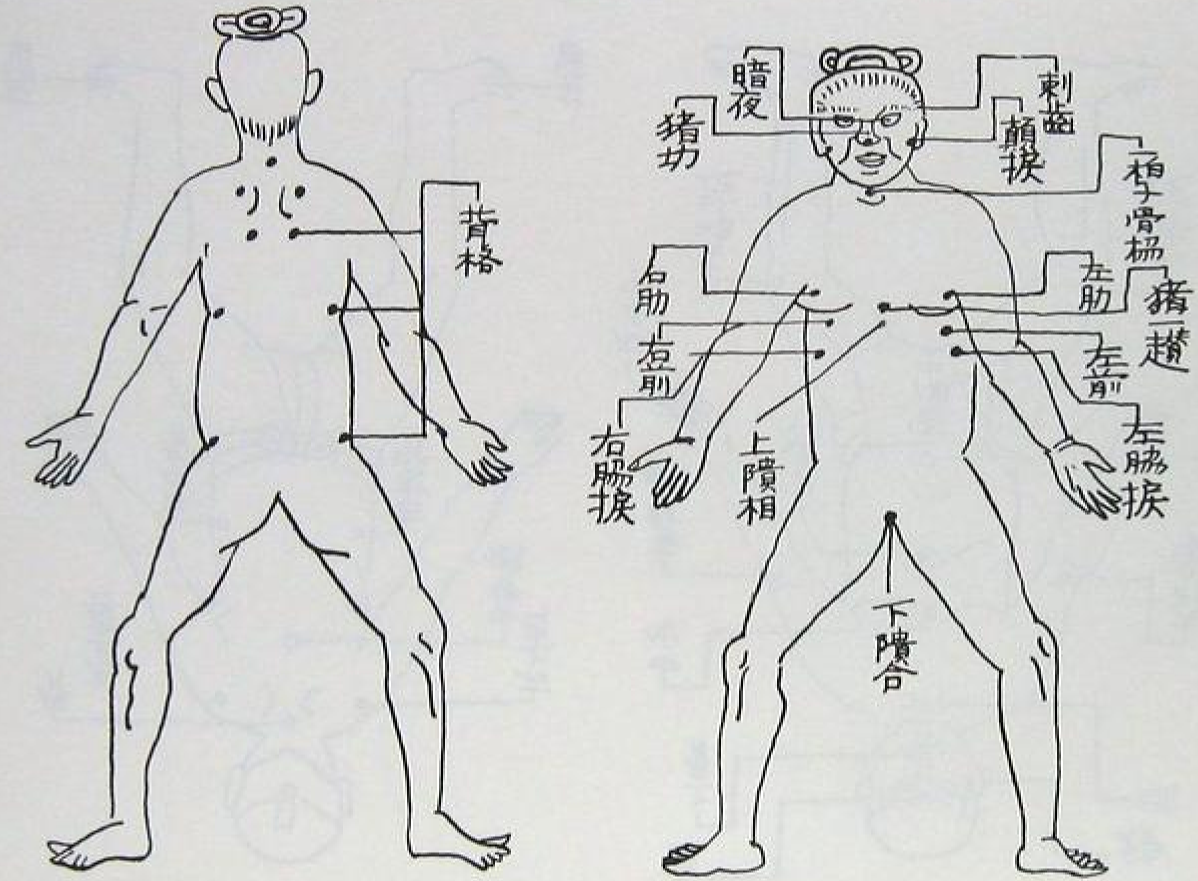
(三)



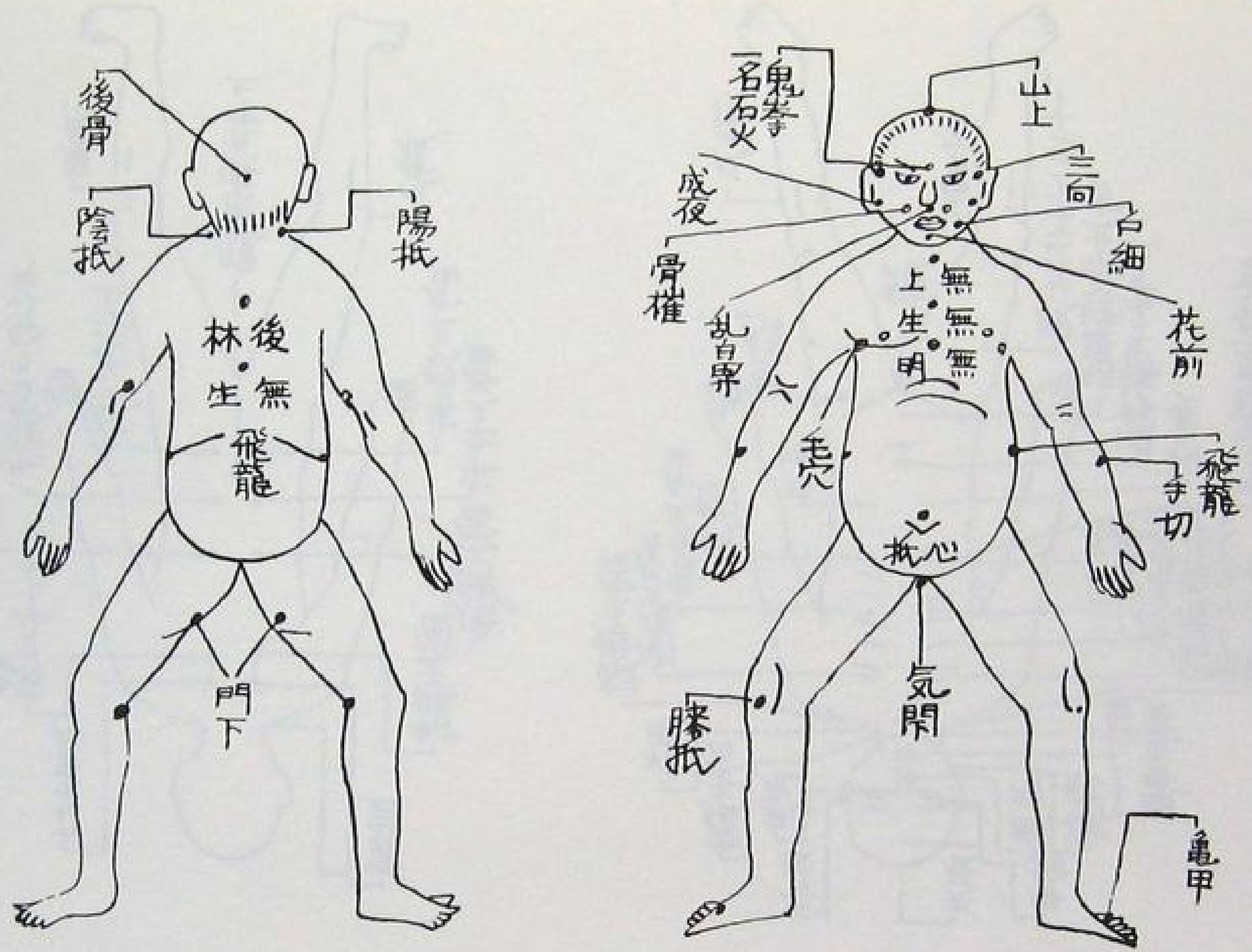
制剛流中身之図



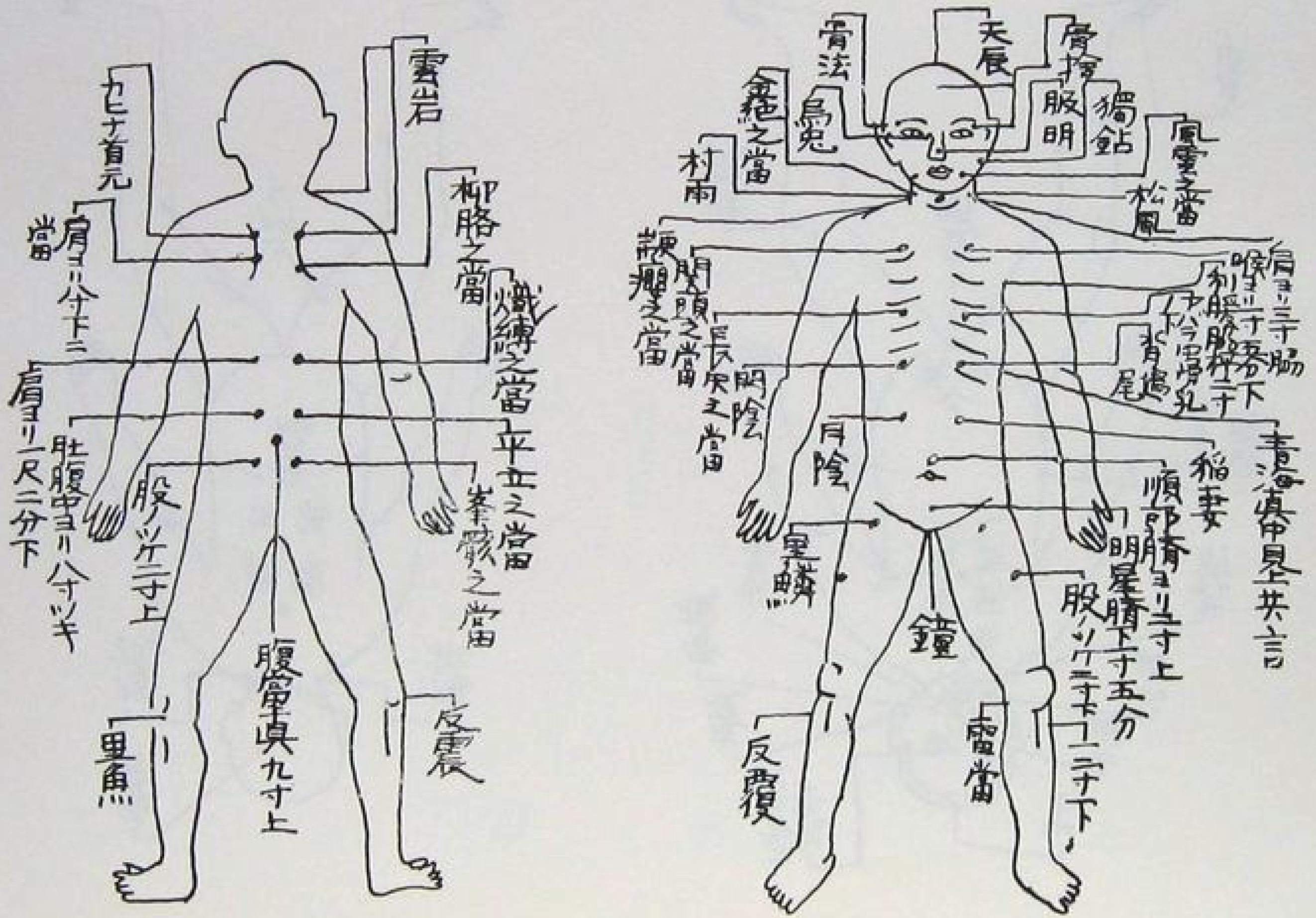
竹内流格身之図

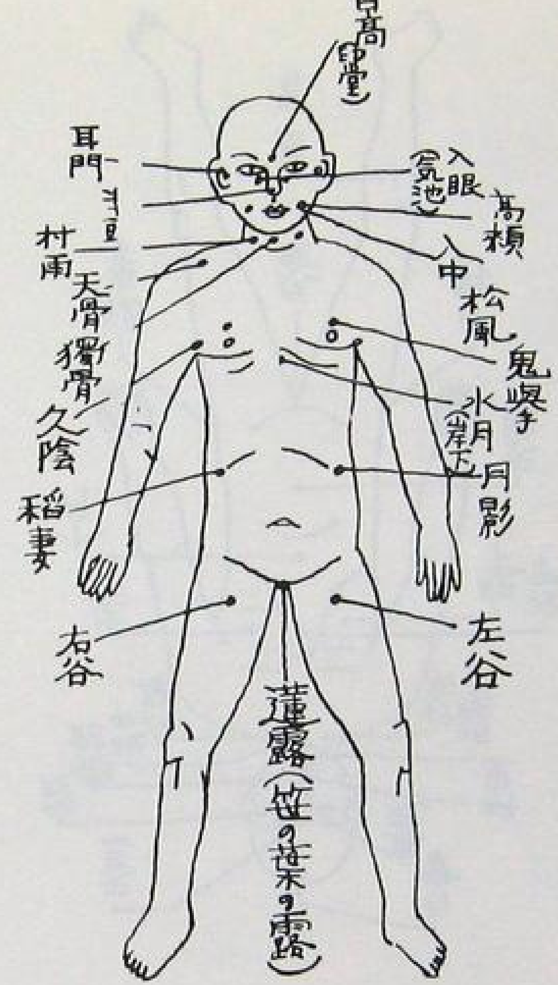


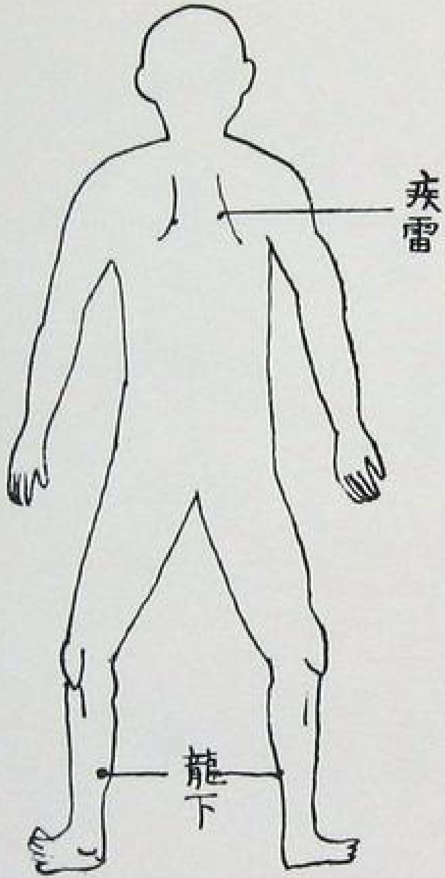
無雙流抵所之図



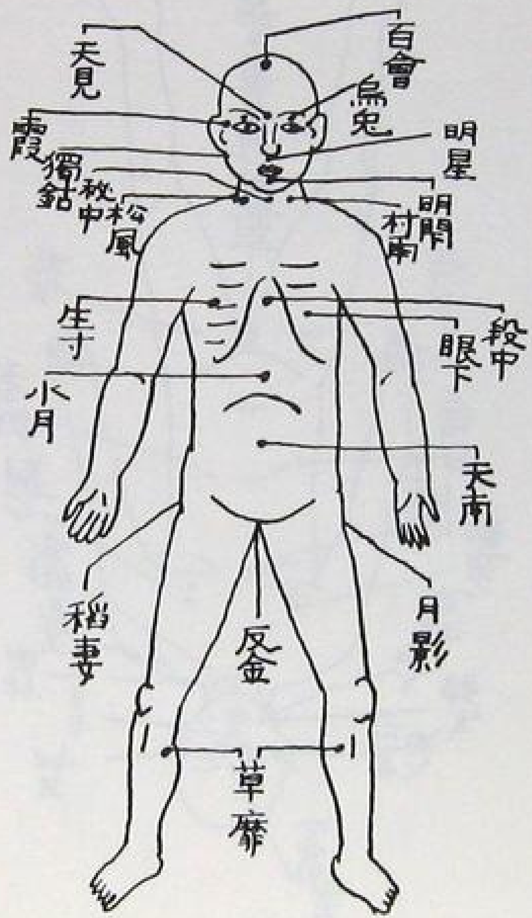
真心流骨殺秘穴図



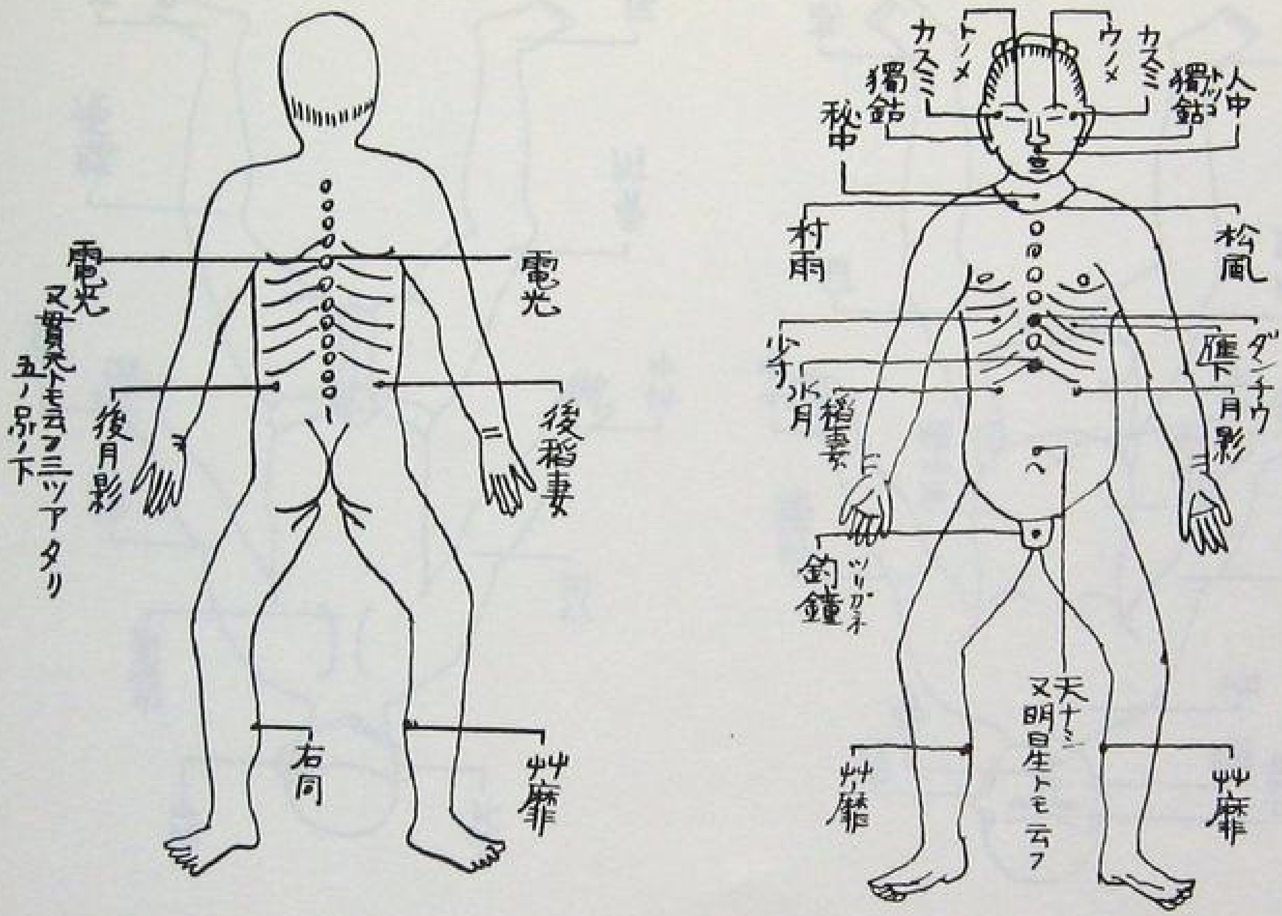

目高
（印堂）
入眼
（気池）
高頬
人中
松風
耳門
村雨
獨骨
久陰
水月
月影
稲妻
右谷
左谷
蓮露
（笹の葉の露）


疾雷

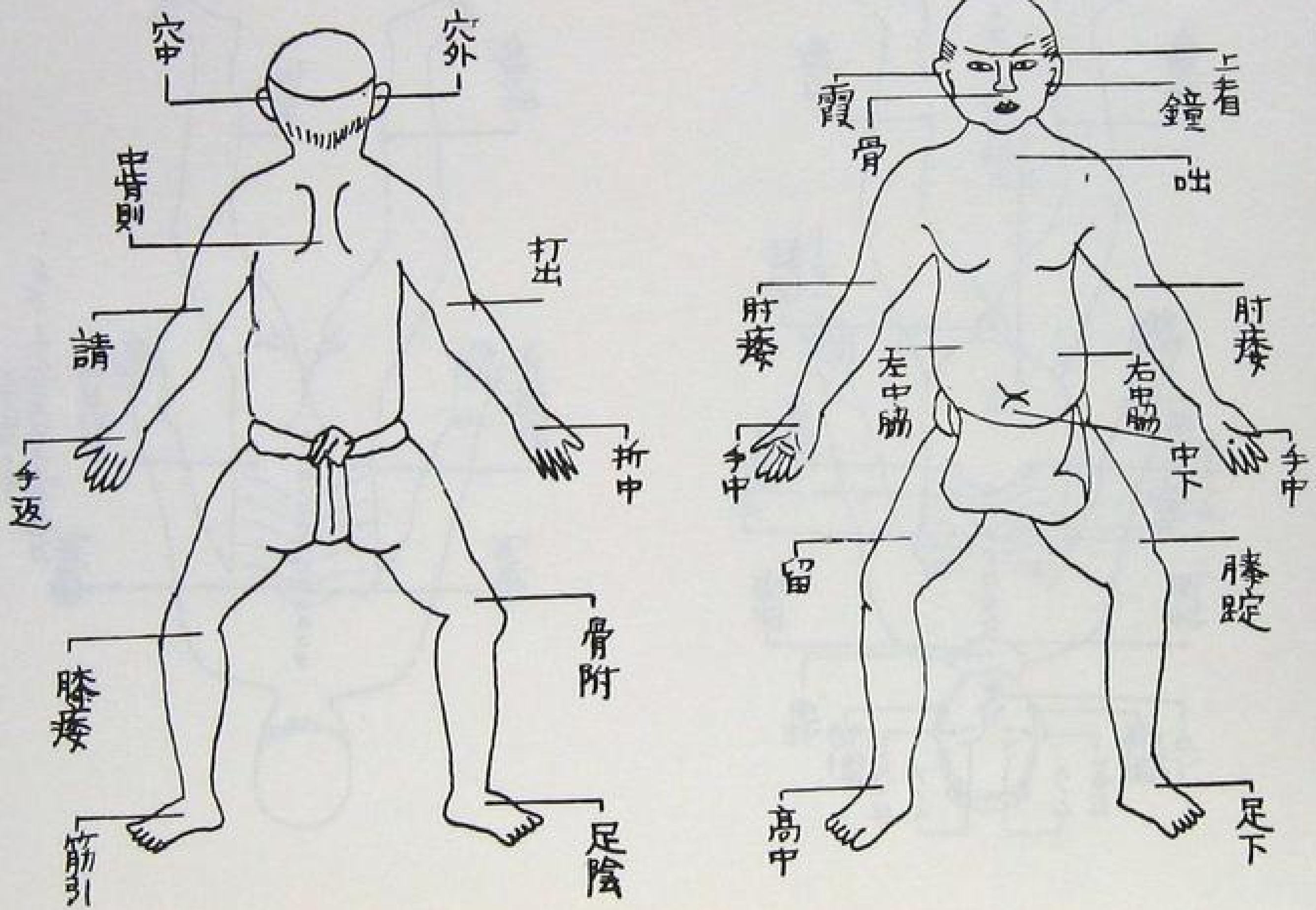
真神道流当身図

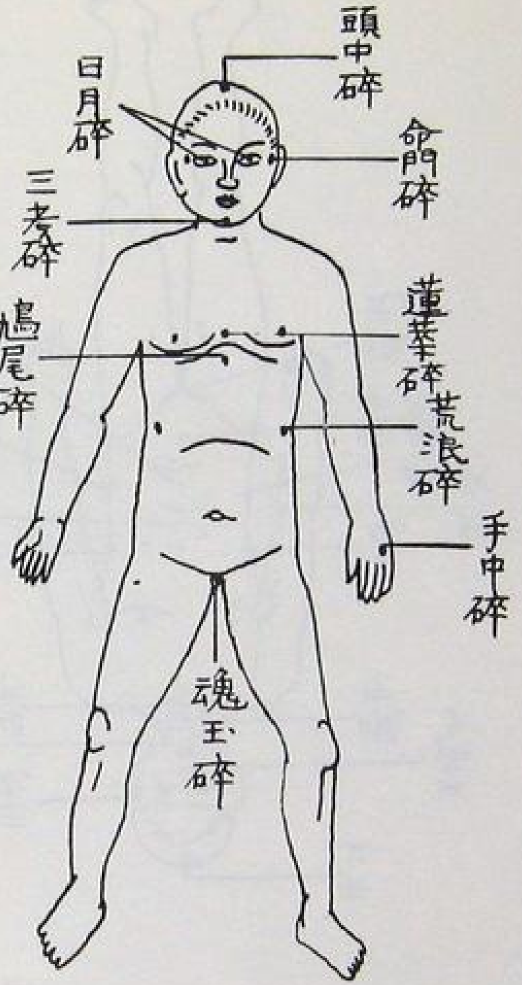


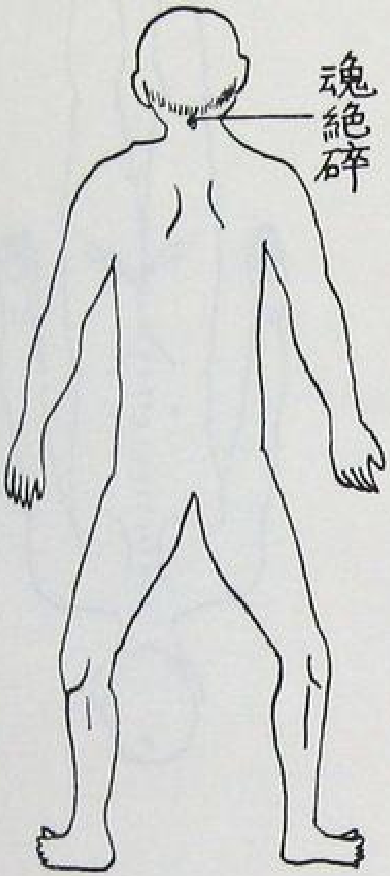
真神道流当身図（別派）


電光
後月影
電光
後稲妻
右同
トノメ
ウノメ
カスミ
カスミ
獨鈷
獨鈷
人中
秘中
村雨
松風
水月
稲妻
ダンチウ
月影
釣鐘
ツリガネ
又明星トモ云フ

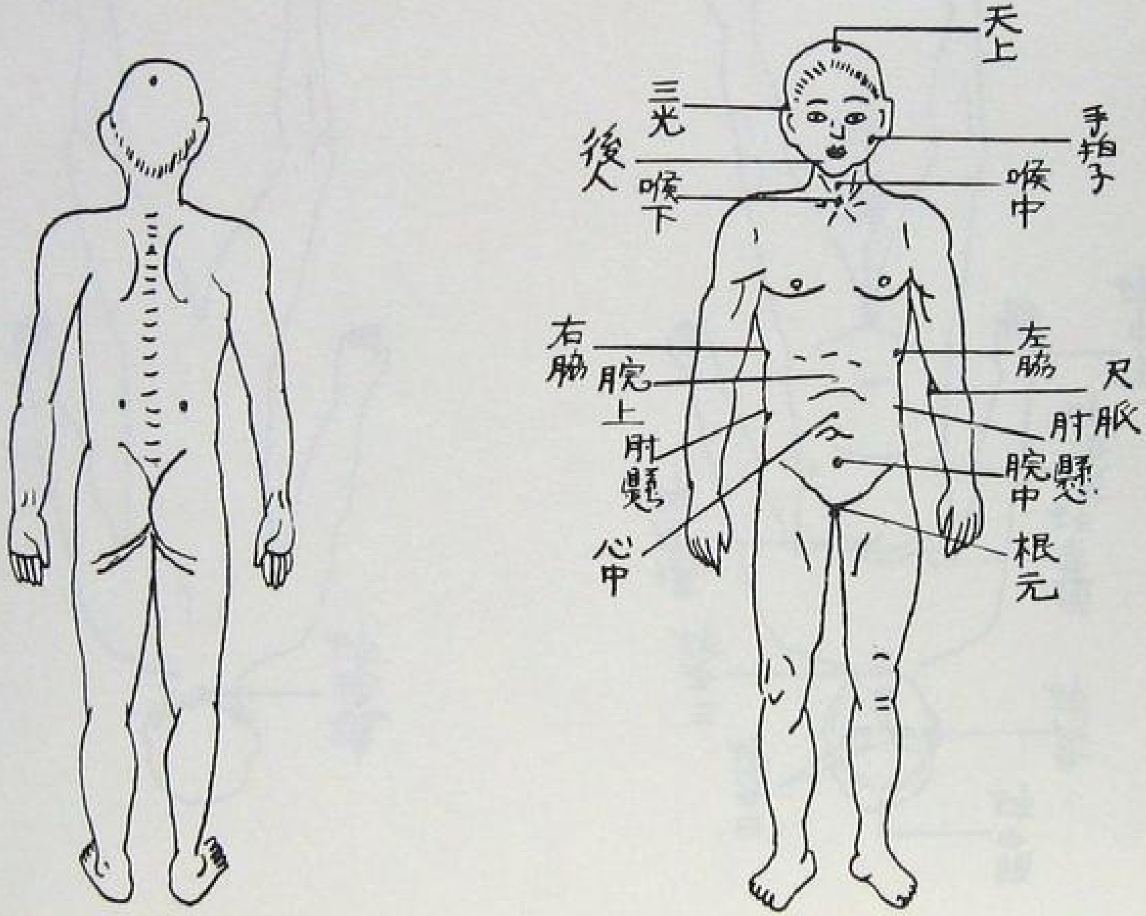
加嶋神捕流


穴中
穴外
中背則
打出
請
手返
折中
骨附
膝痿
筋引
足陰
上看
霞
鐘
骨
咄
肘痿
肘痿
左中脇
右中脇
中下
手中
手中
留
膝跪
高中
足下

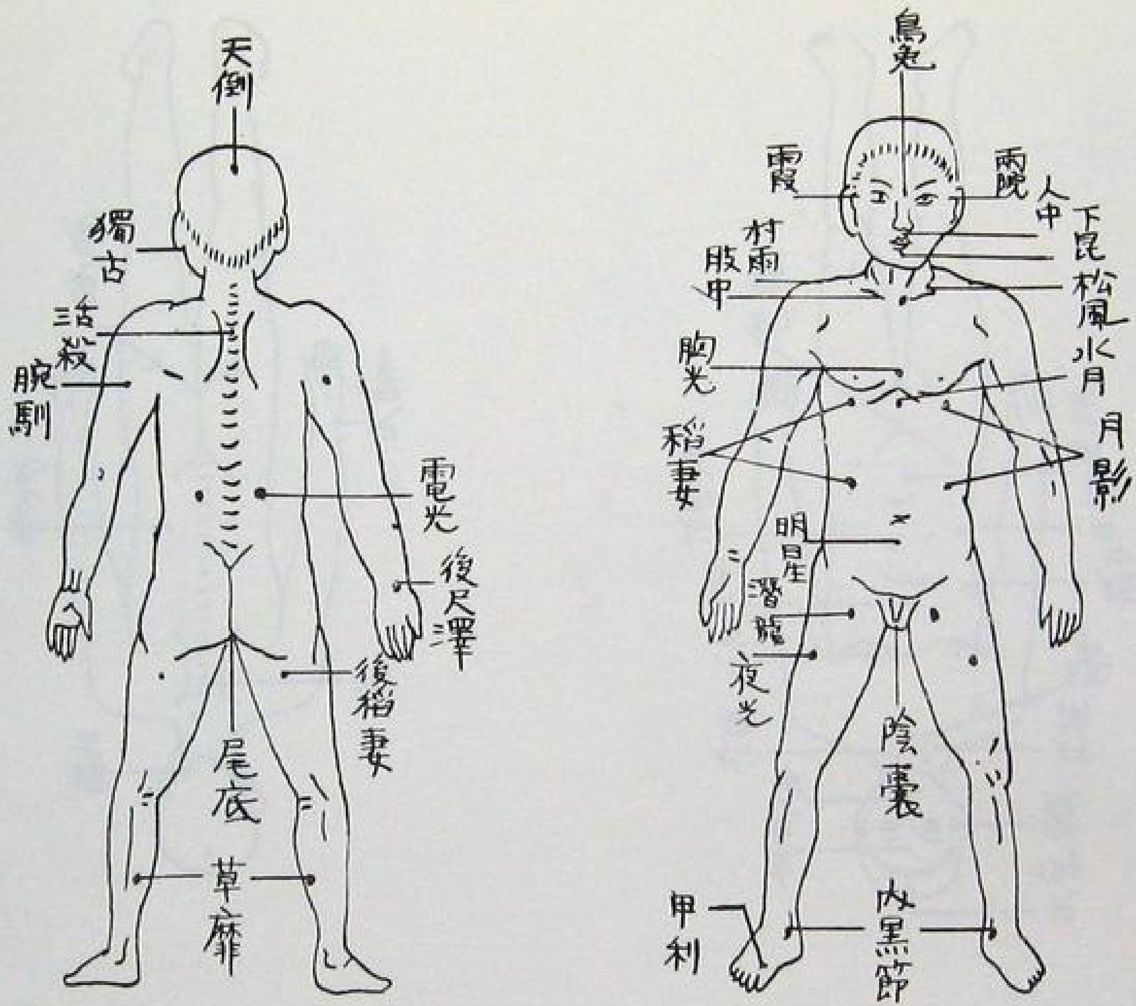

頭中砕
日月砕
命門砕
三考砕
鳩尾砕
蓮華砕
荒浪砕
手中砕
魂玉砕


魂絶砕

関口新心流当身之図

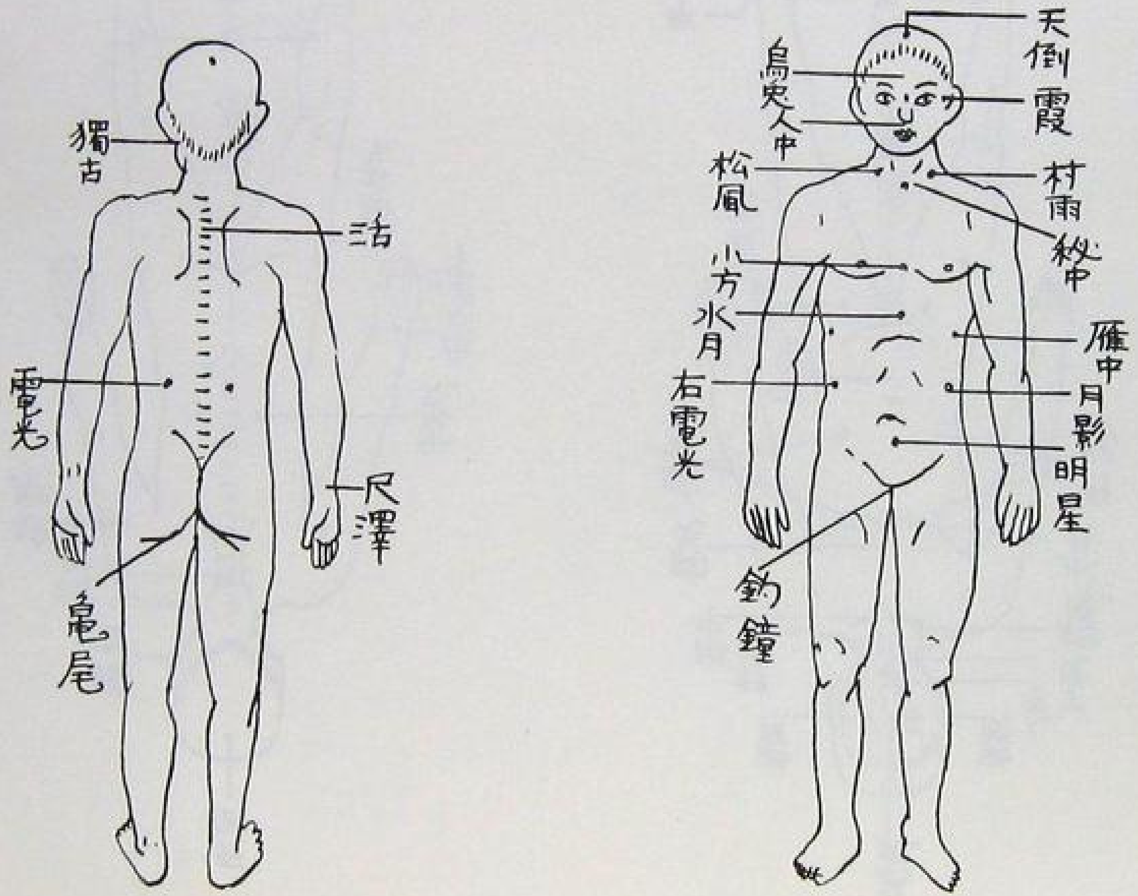


神道六合流当身図

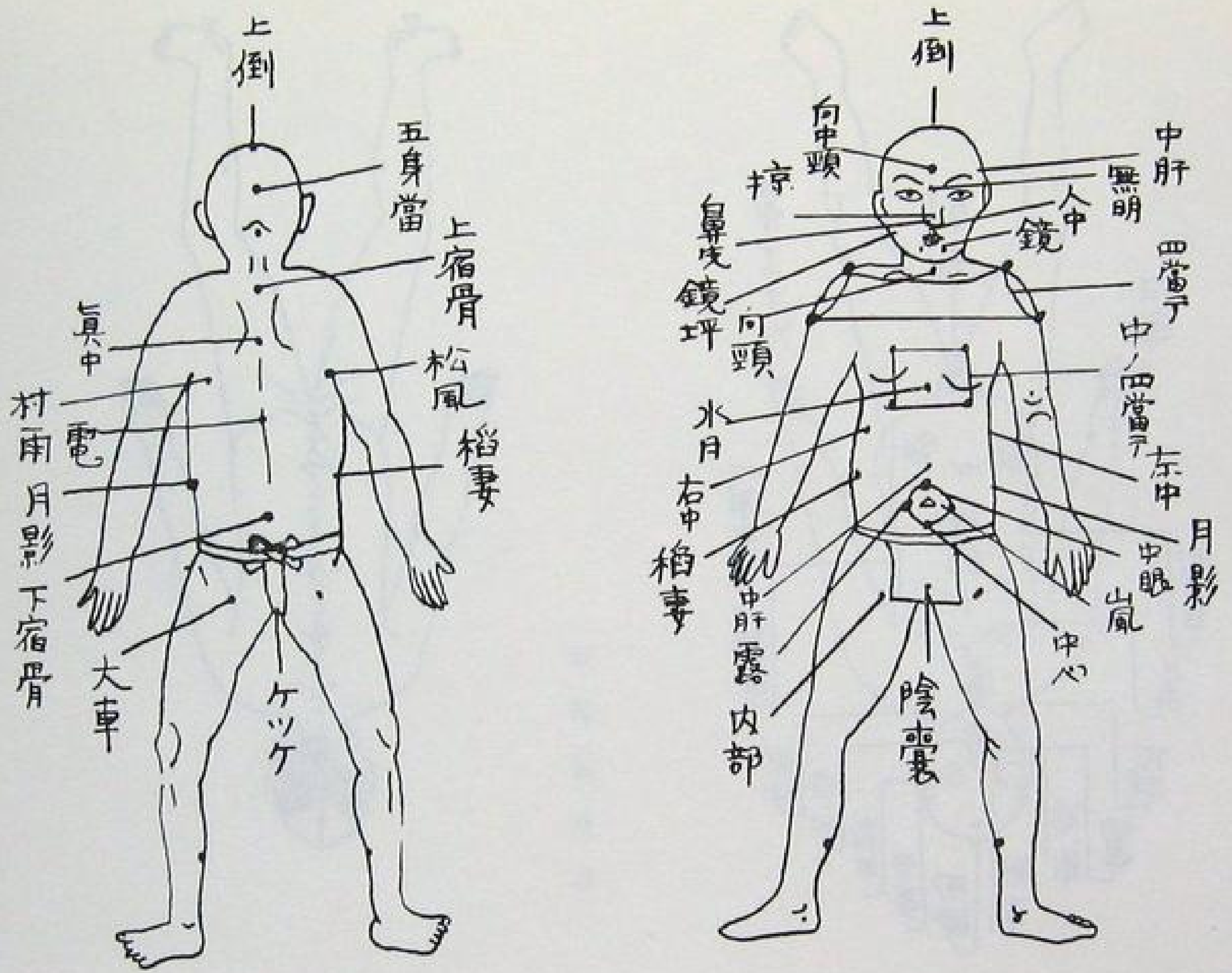


天倒
獨古
活殺
腕馴
電光
後尺澤
後稲妻
尾底
草靡
烏兎
霞
人中
下昆
村雨
股中
松風
胸光
水月
稲妻
月影
明星
潜龍
夜光
陰嚢
甲利
内黒節

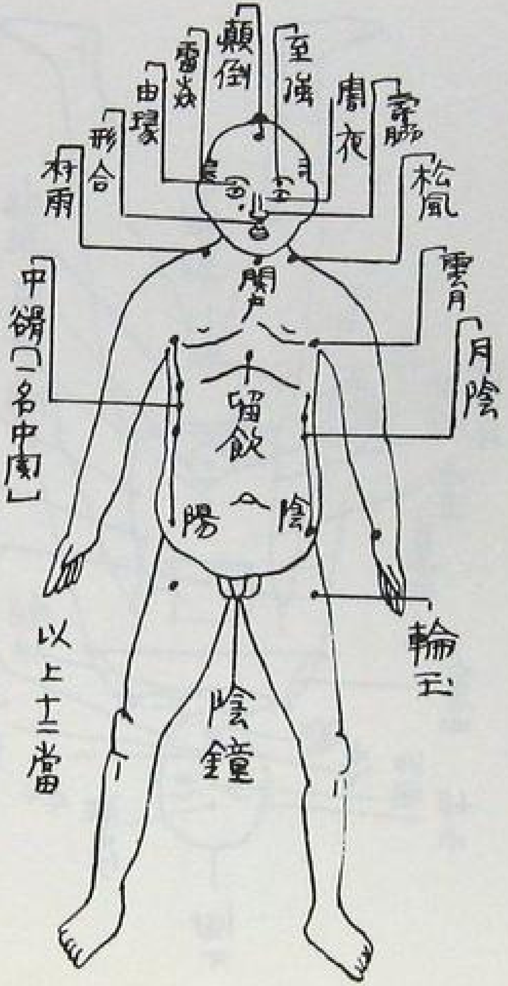
講道館流柔道当身図



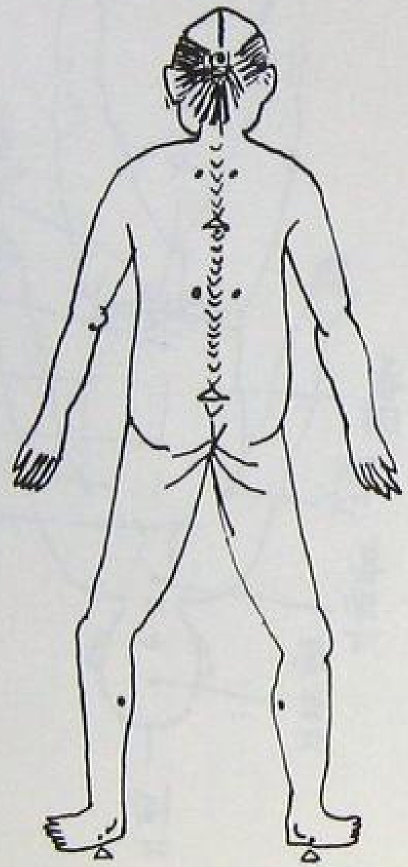
至心流当身之図


上
倒
五身當
上宿骨
眞中
松風
村雨
電
稲妻
月影
下宿骨
大車
ケツケ
上
倒
掠
中肝
無明
人中
鏡
鏡坪
向頭
四當テ
中ノ四當テ
水月
右中
月影
稲妻
中肝
中眼
山風
霞
中心
内部
陰囊

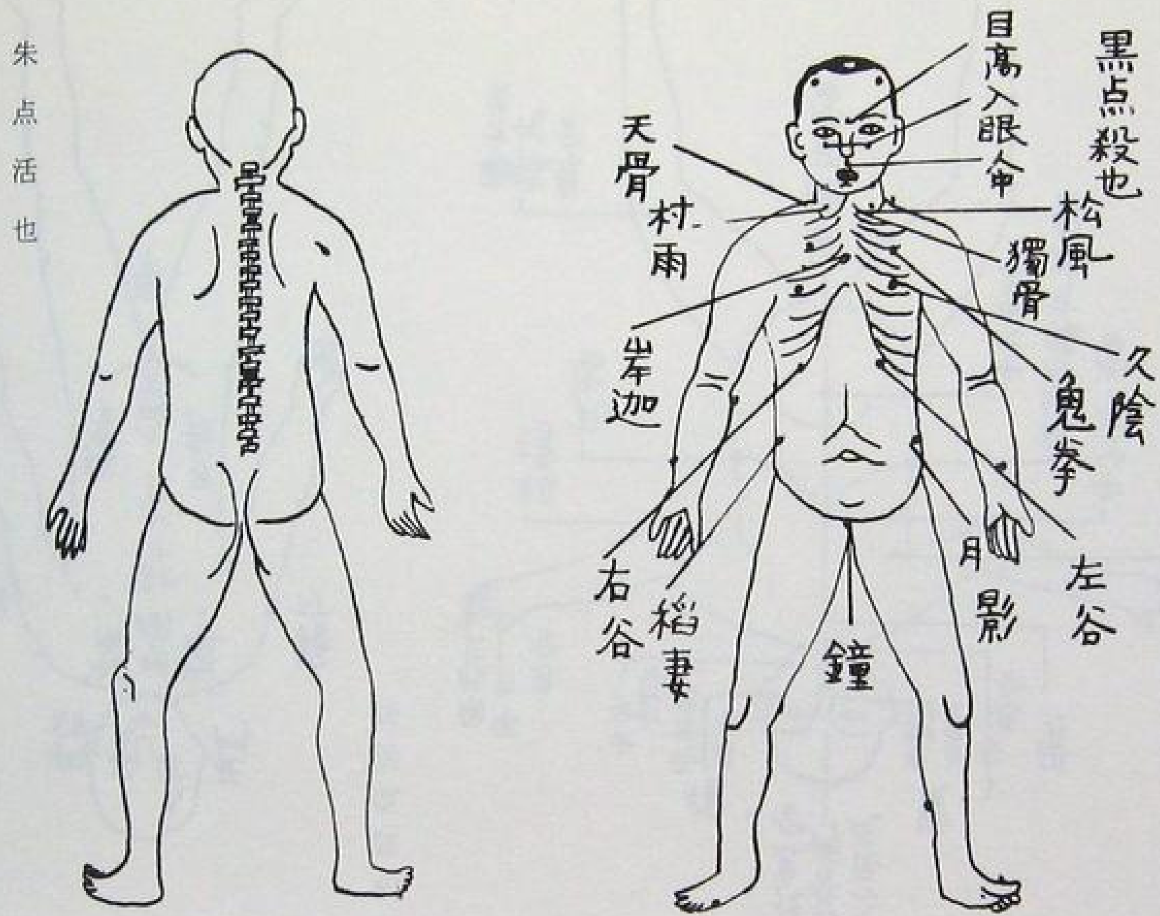
陽心流　柳生心眼流　当身雛形之銘目



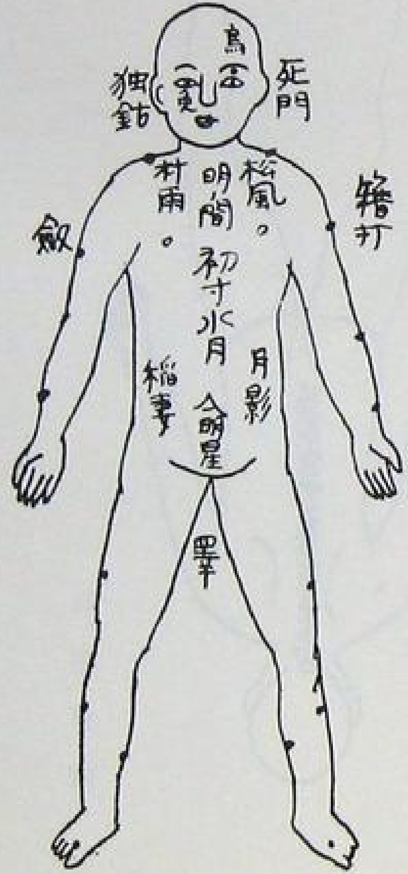
当身裏雛形



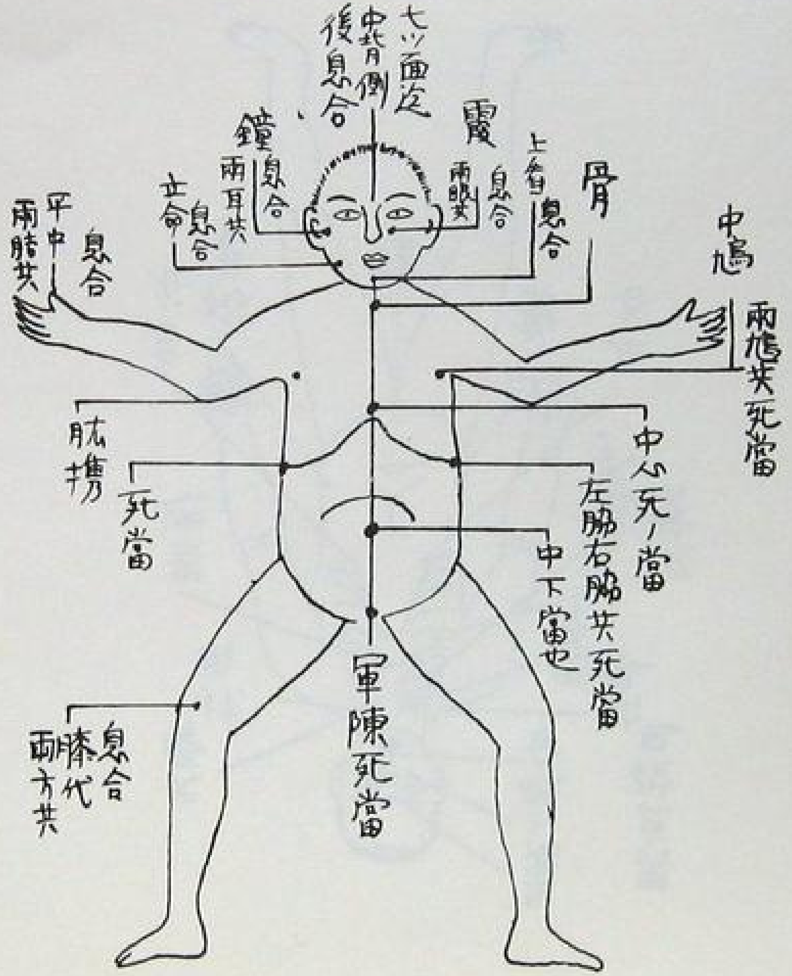
柳心流殺活点図



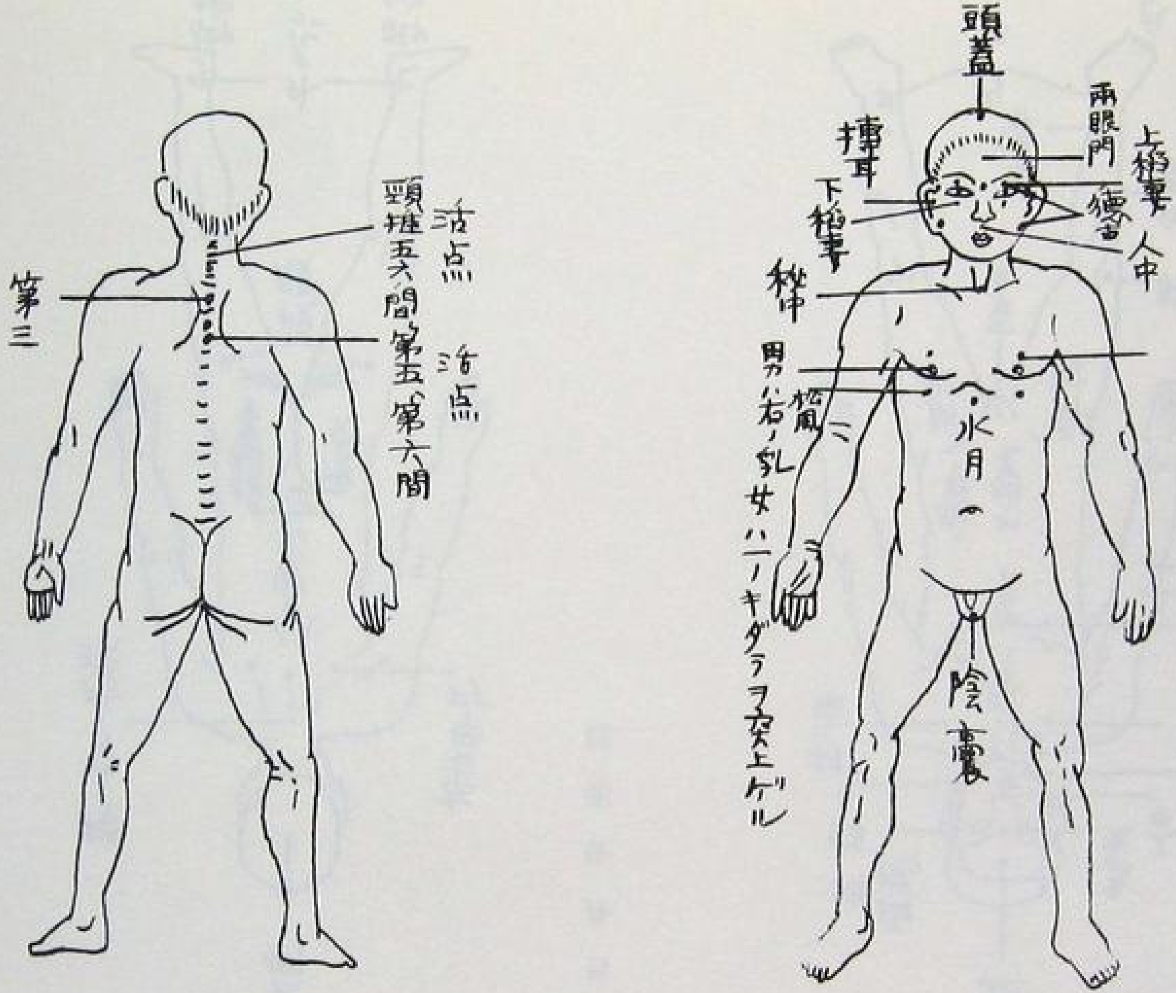
大和流急所図



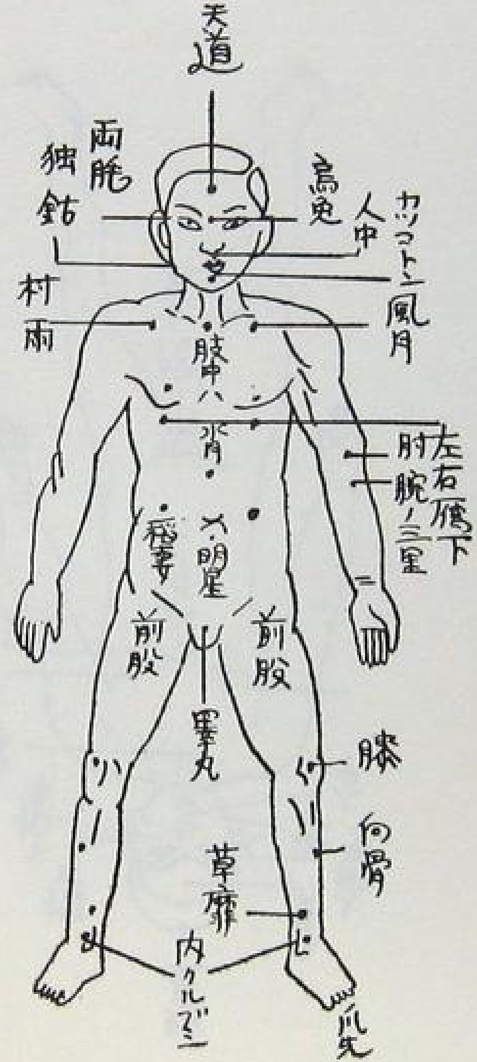
為我流当身之図



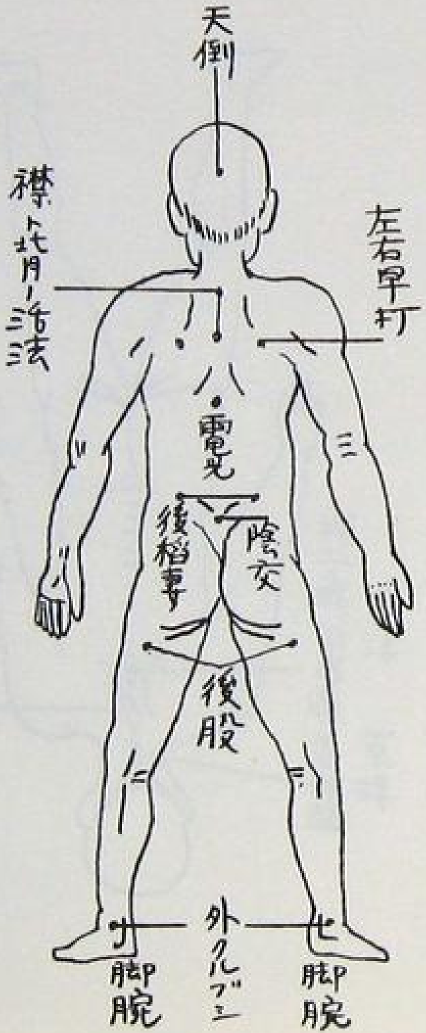
関口流当身図



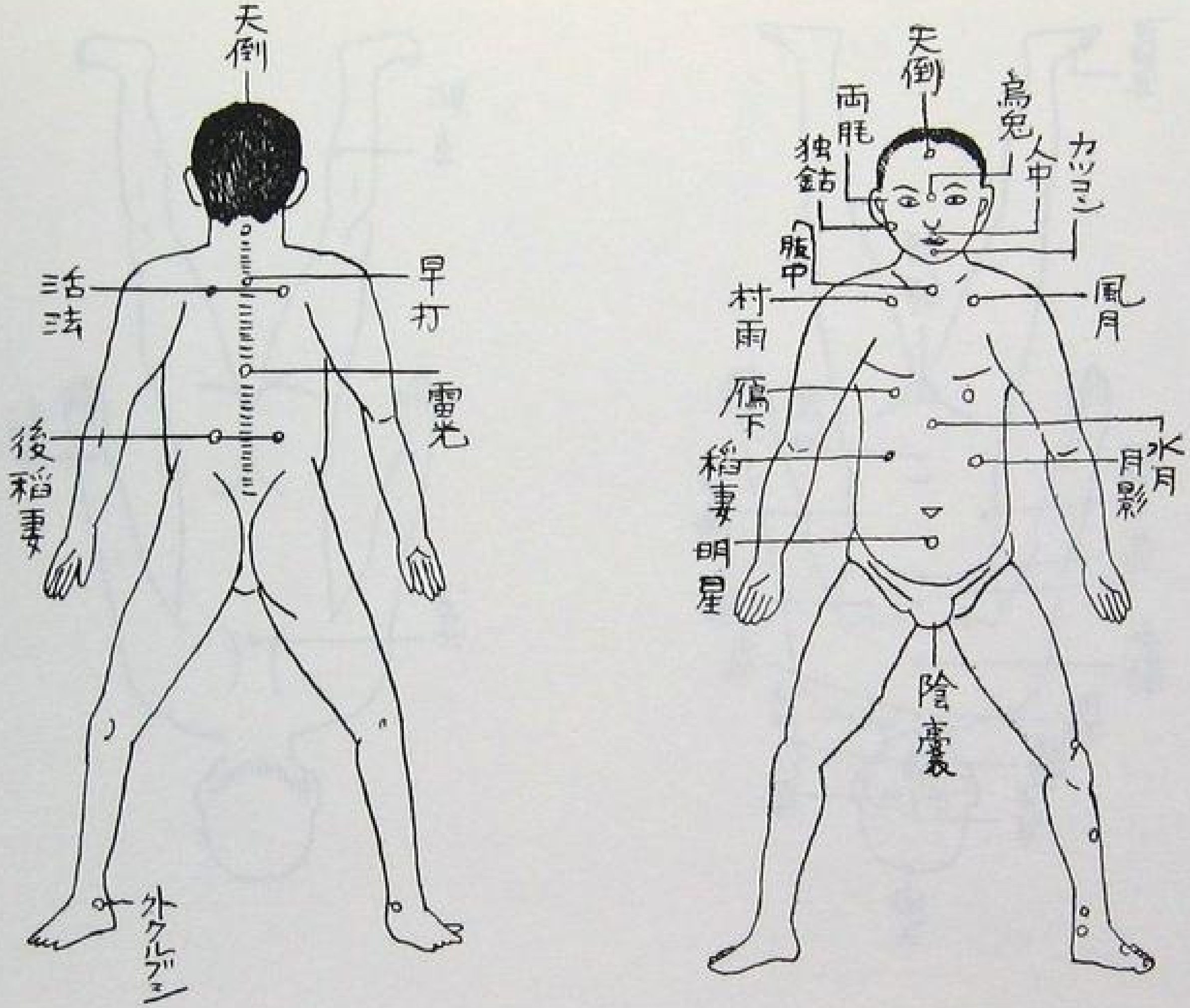
当身前面図


天道
独鈷
烏兎
人中
村雨
風月
稲妻
明星
前股
睾丸
膝
向骨
草靡
内クルブシ
爪先

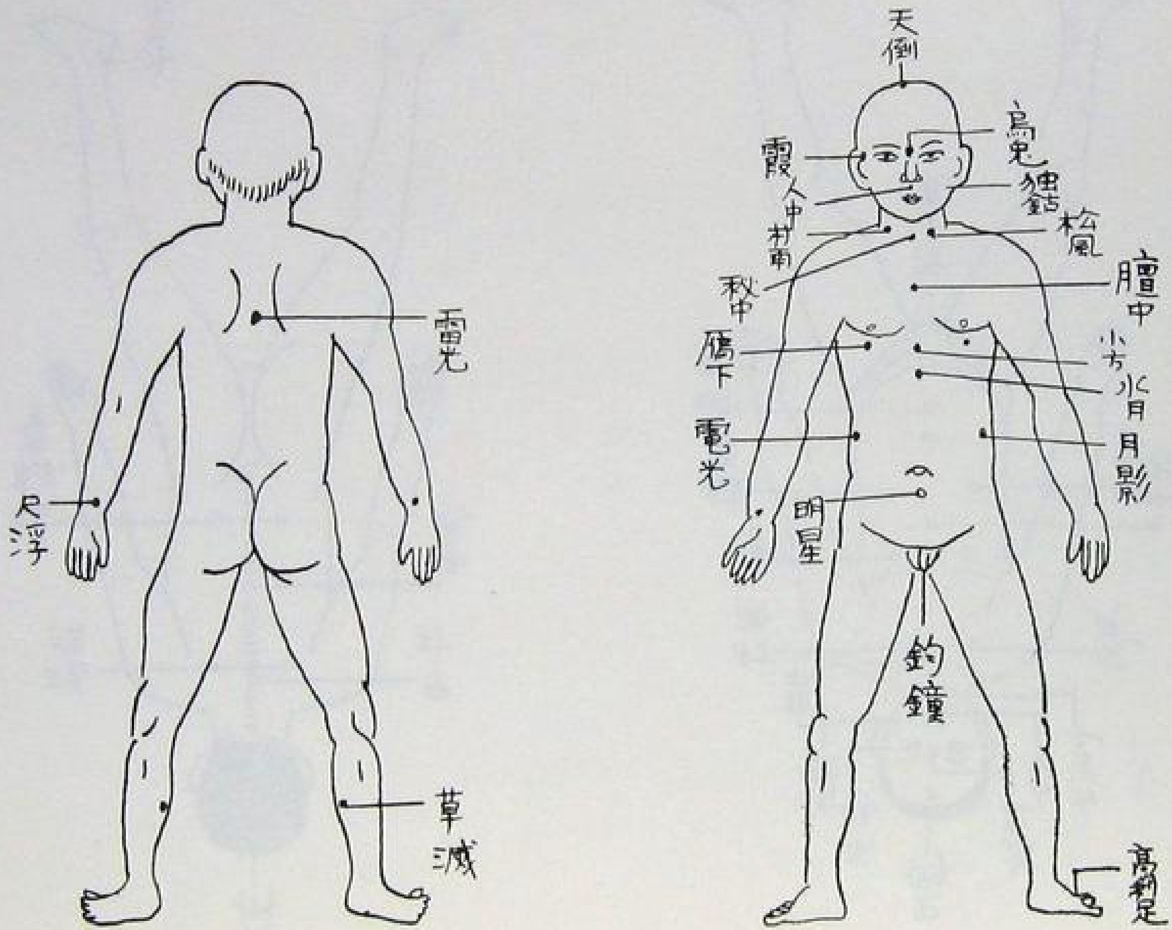
当身後面図


天倒
左右早打
電光
後稲妻
陰交
後股
外クルブシ
脚腕
脚腕

神道流当身之図

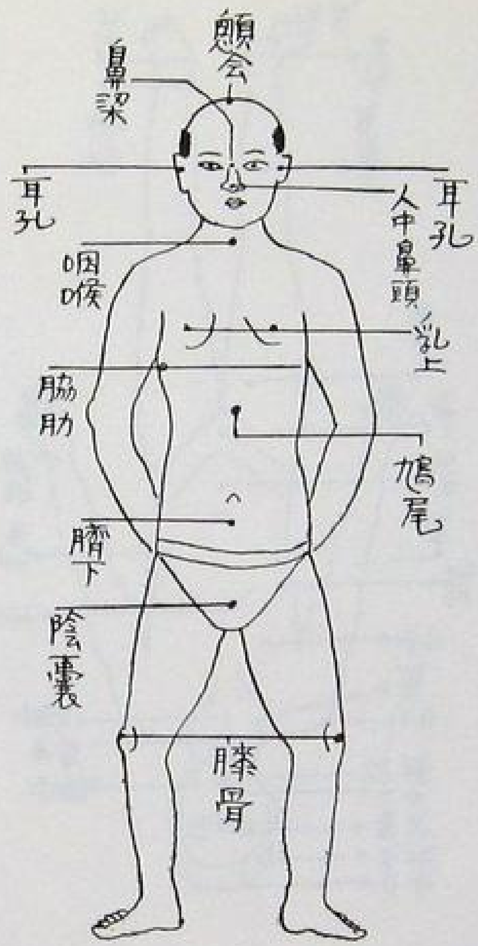


天神真楊流殺活図

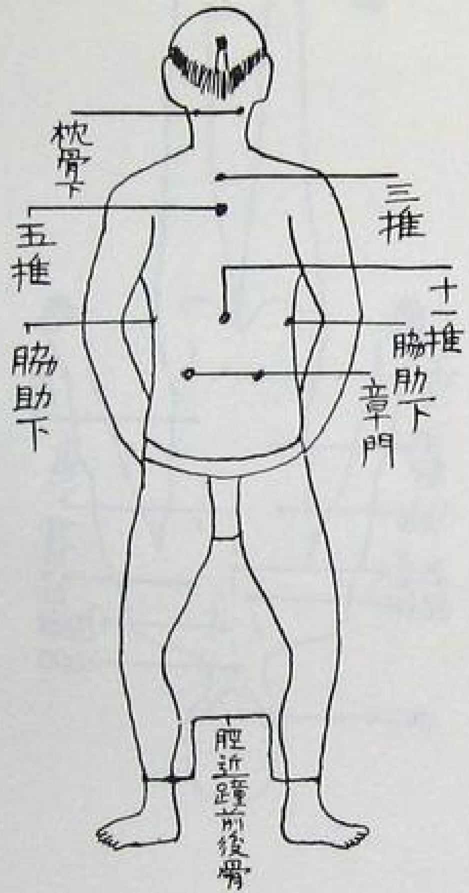


諸流を究めて書きたりと称する
「死活提要」書中に記載された死活図

死穴図

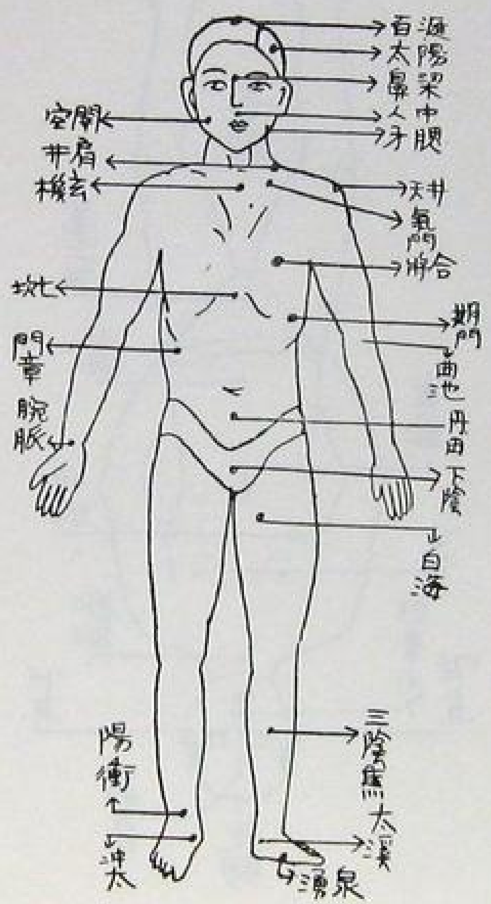


活穴図

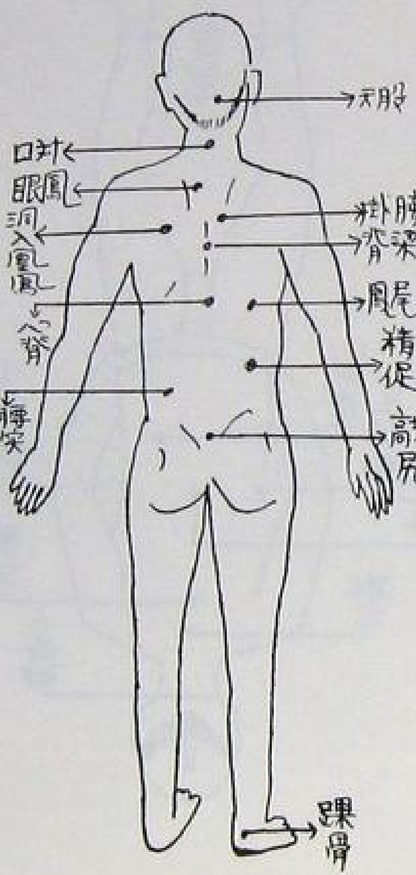


少林寺点穴法正面略図

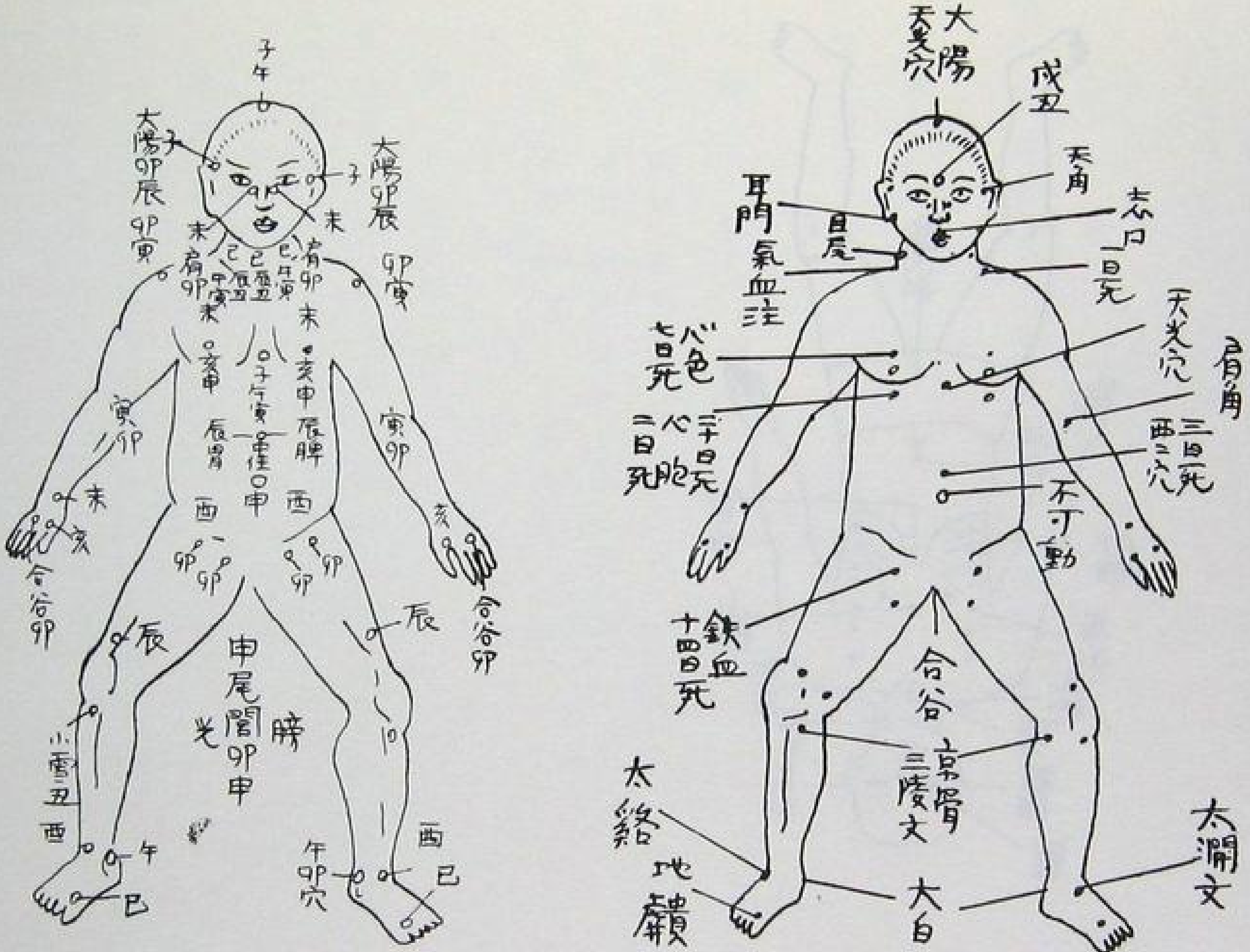
人身凡三百六十五穴ニシテ
針灸ニ用ユルハ三百六十穴ナリ
小林寺ニテ用ユル打穴二十六閉穴凡二十四点穴



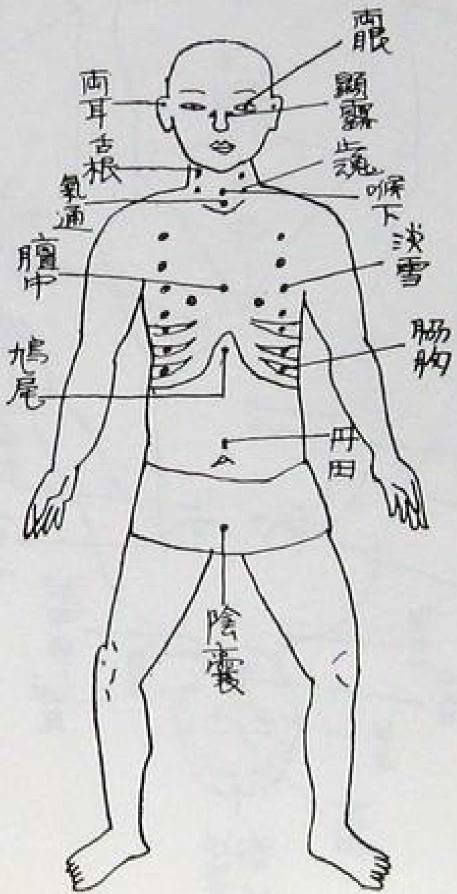
点穴法背面略図



武備誌に伝ふ急所図



禁穴的中図（相撲に伝ふ）



揚心流

袖車　松風　村雨　来光　宇戸　独鈷　稲妻　月陰　水月　天南
釣金　根開　高利

夢想流　当身

稲妻　肝端　夢枕　朝露　無命　当返　以上六法ナリ

真極流

気眼当　腮之当　谷壺当　会念当　水波当　下段当

鏡心流

（殺八法）　明星　風燕　貫止　雷車　虎乱　投飛　厳砕　乱当
雲雷　妙見　白虎　ヲ中段活法ト云ヒ
（活五法）
光照　飛龍　ノ二法ヲ上段活法ト云フ

真之神道流

艸靡　秘中　人中　烏乱　烏兎　独鈷　明間　松風（左）　村雨（急雨
トモ云）　釣鐘　電光　月影　鴈下　少寸　明星　水月

為勢自得天真流

雁下　初寸　水月　明星　膀胱　釣鐘　松風　村雨　明間　烏兎
独鈷　稲妻　月影

諸賞流

眼中　両眼ノ当口伝　喉骨　ノドノ事口伝死　脇穴　両手ノ肩ノ下

心胸　水落ノ下膌ヘ当ル艮死ナリ　曲骨　インノウノ付根腹骨ノ納也是ヲ当折レハ艮死　肩穴　手越之言後ノカタ根也

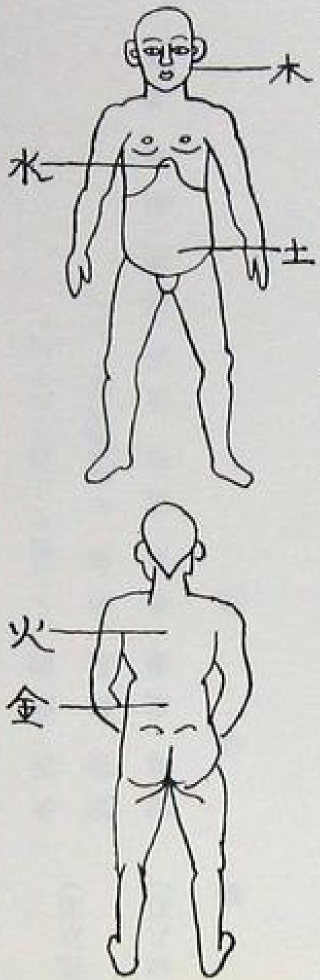
折目　膝頭ノ内ヨリ当ルヒカメノ事也　節骨　膝頭ノ外ヨリ当ル事也　〆八ケ条

右　乾　兌　離　震　巽　坎　艮　坤　ノ八方ニ表ス

四心多久間四代見日流

青龍　辻風　電光　風月　水月　晴風　飛鳥返シ

（五活）木　火　土　金　水



扱心一流殺法

烏兎　松風　雁下　月影　水月　明星　電　急雨　霹靂

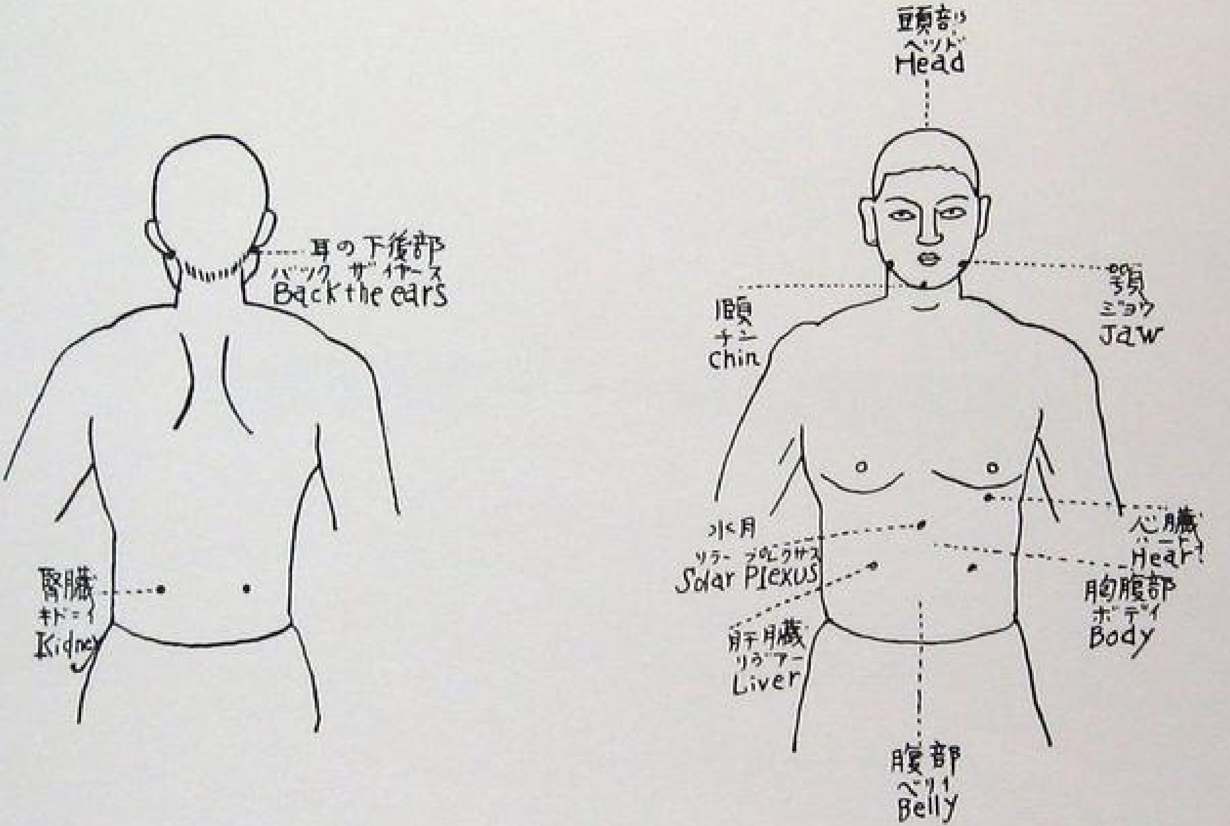
気楽流

魂賸碎　鳩尾碎　荒波碎　命門碎　日月碎

心外無敵流

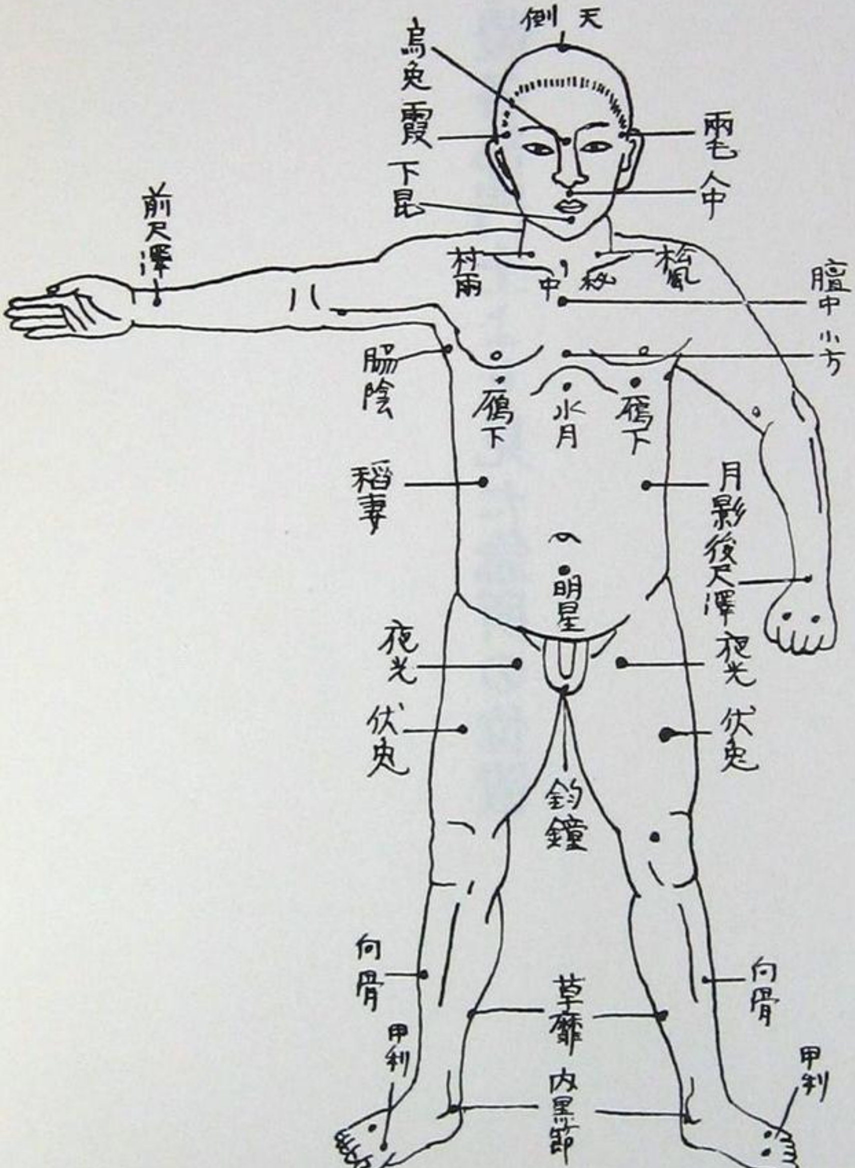
黒雲　眼饋　朝嵐　呒切　コントン

拳闘に於ける打撃部位の図



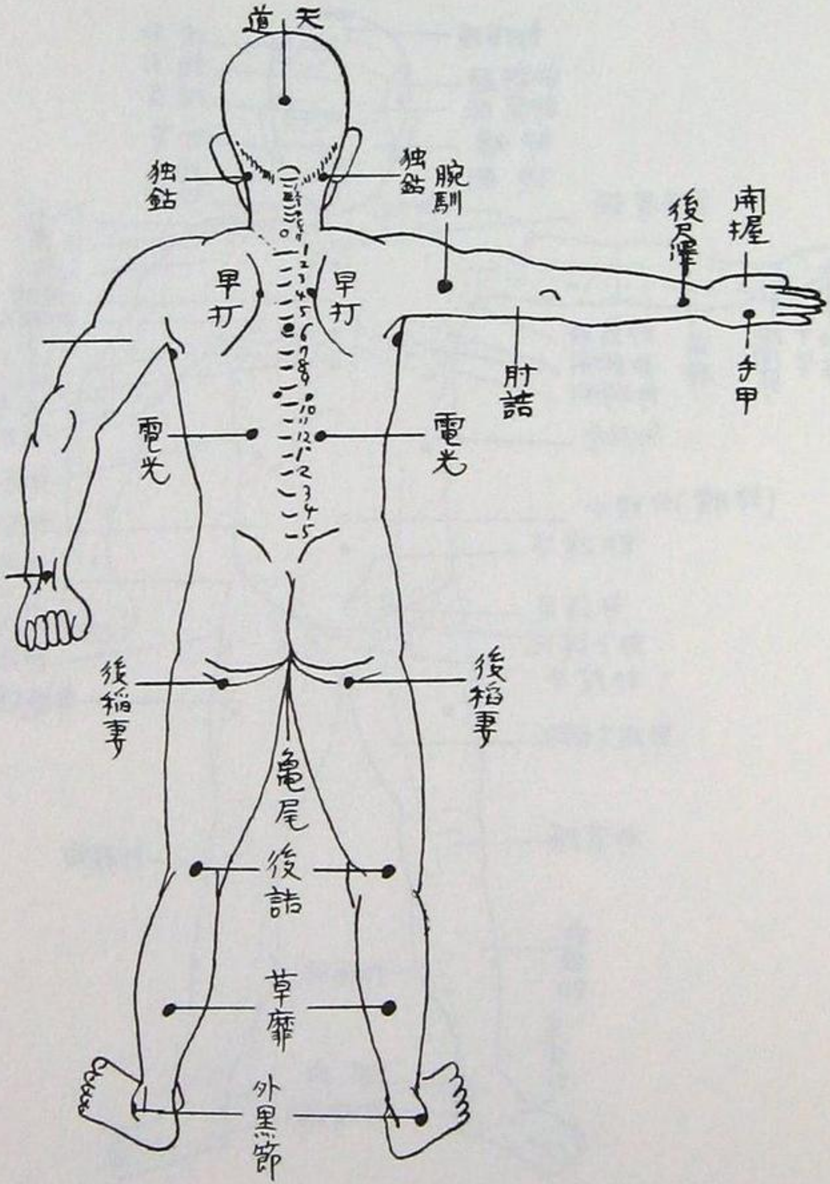
身體各部門上より見た急所の位置

当身急所之図（前面）

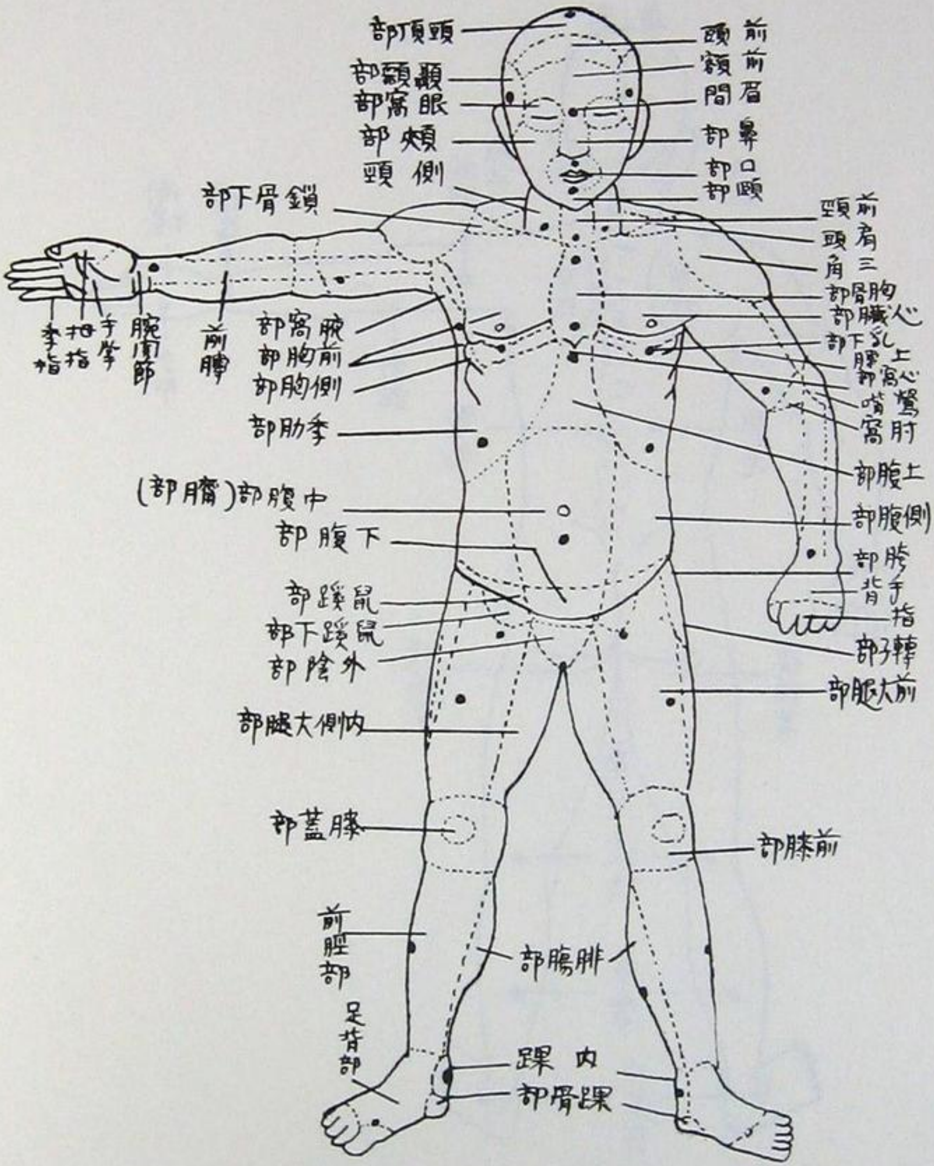


天倒
烏兎
霞
雨毛
人中
下昆
前尺澤
村雨
秘中
松風
膻中
小方
脇陰
雁下
水月
雁下
稲妻
月影
後尺澤
明星
夜光
夜光
伏兎
伏兎
釣鐘
向骨
向骨
草靡
甲利
甲利
内踝節

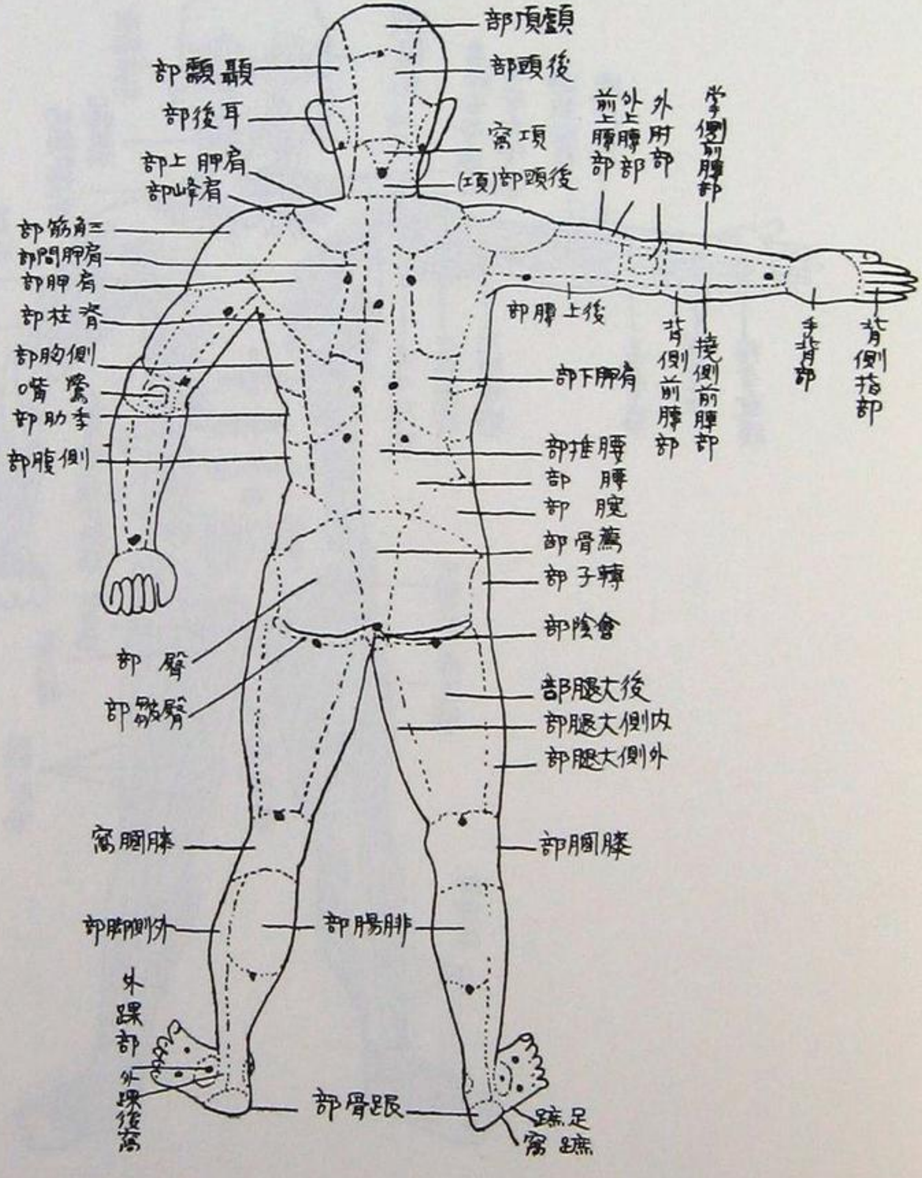
当身急所之図（后面）



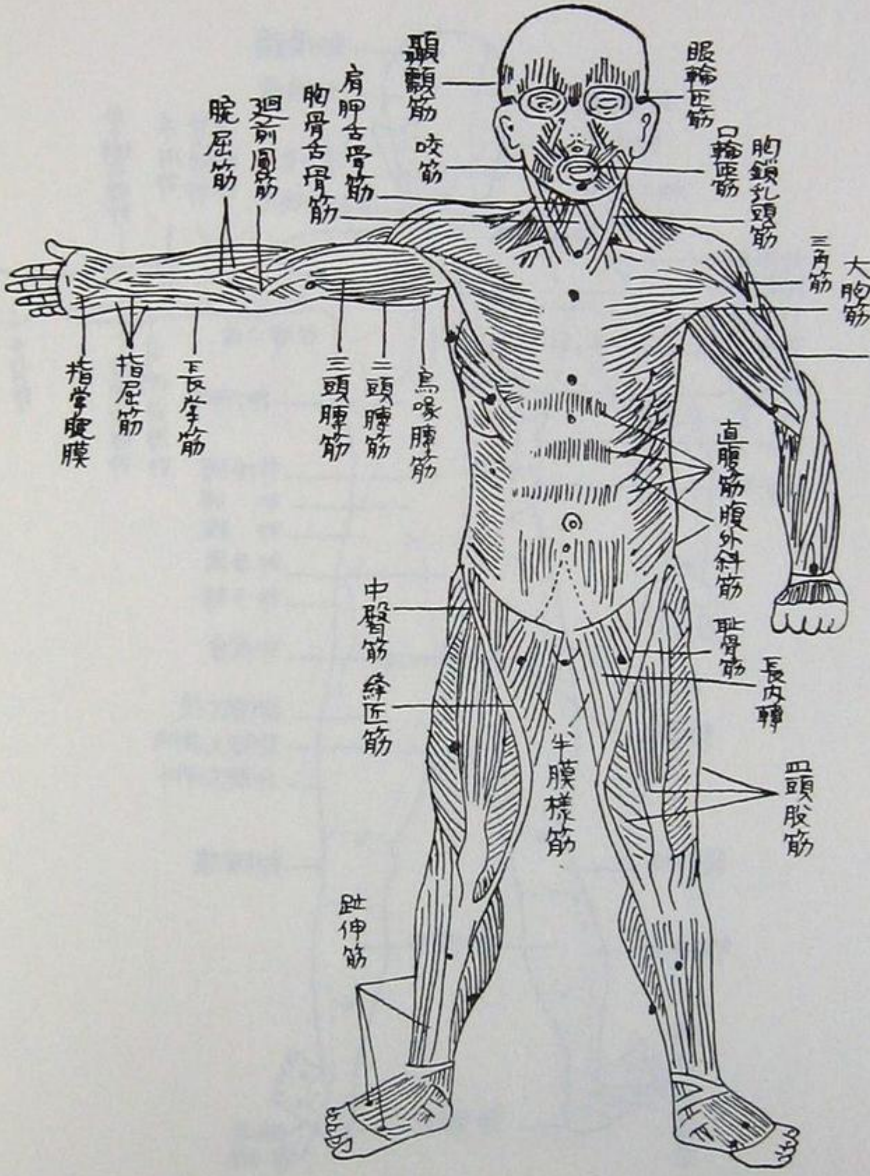
人体各部名称と急所部位之図（前面）



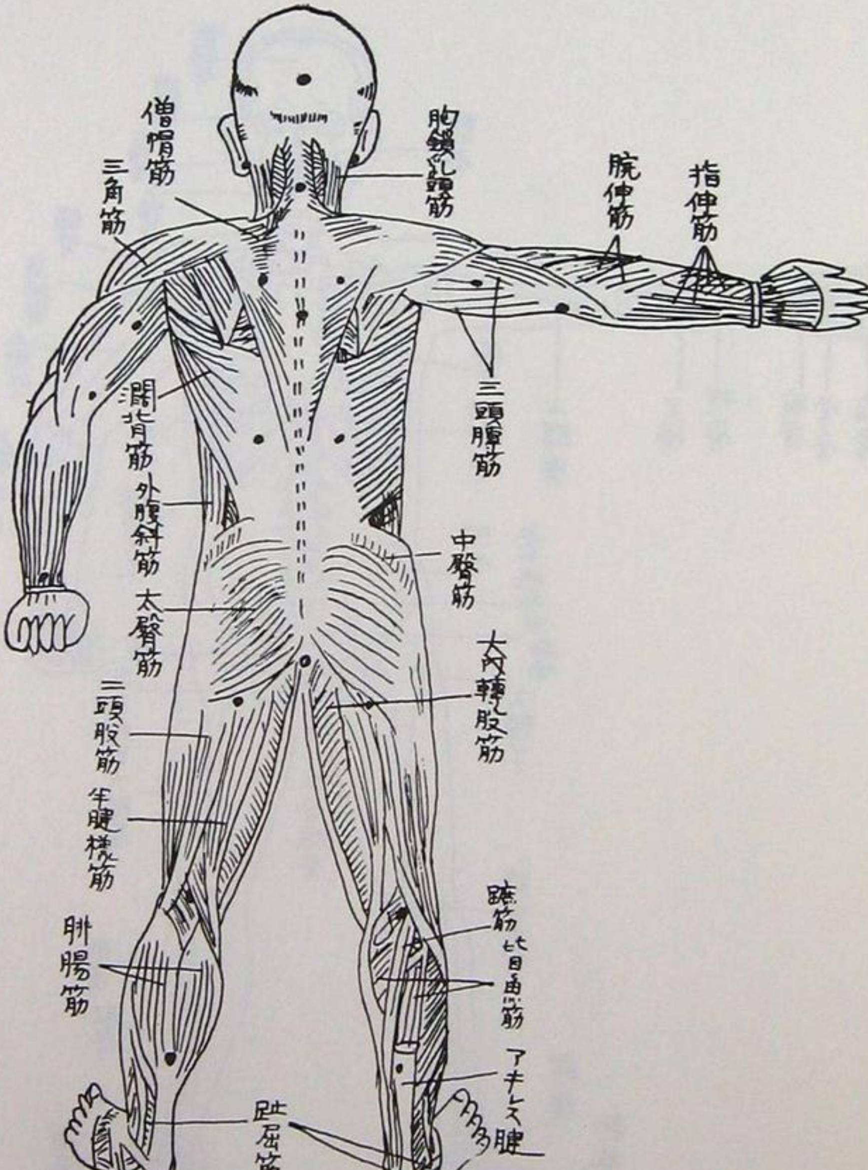
人体各部名称と急所部位之図（后面）



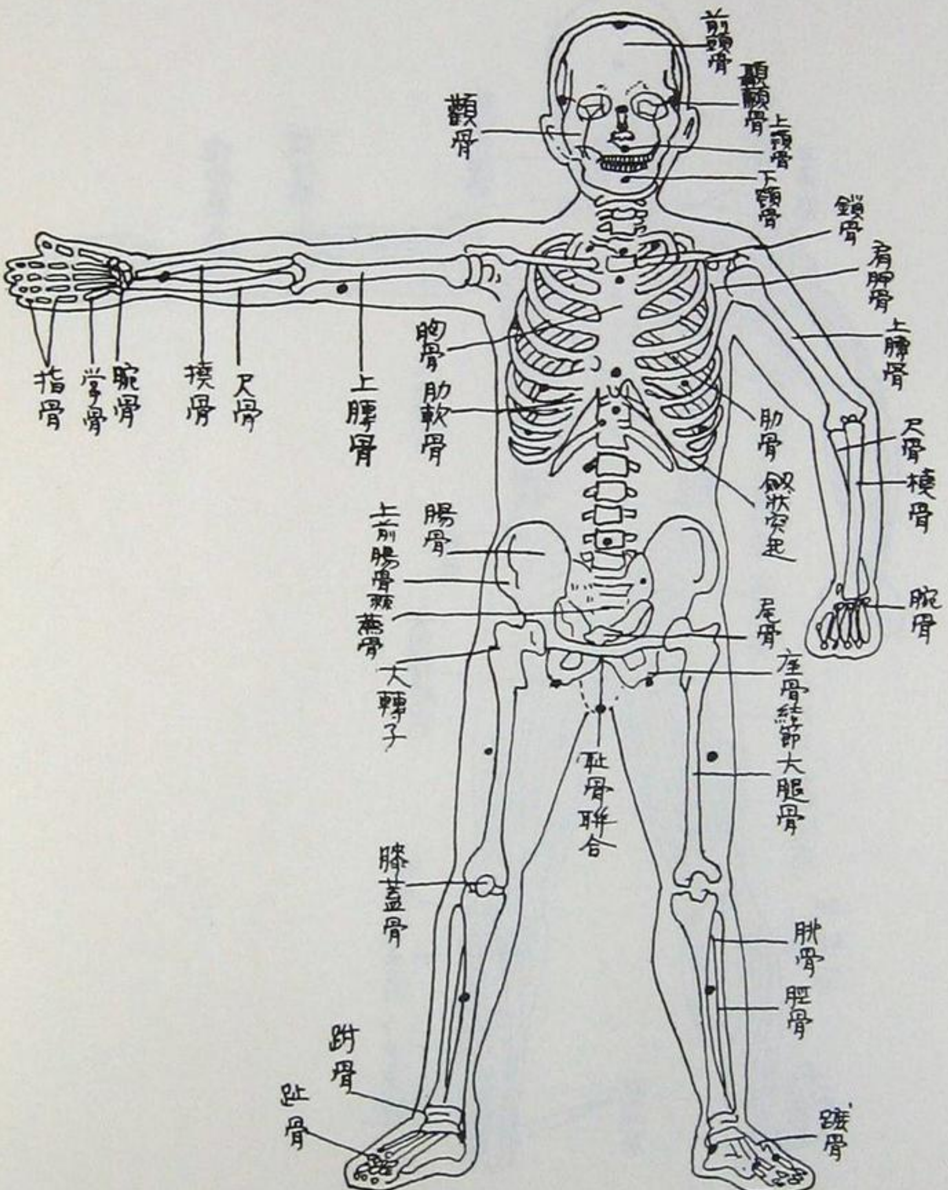
筋肉上に於ける急所部位之図（前面）



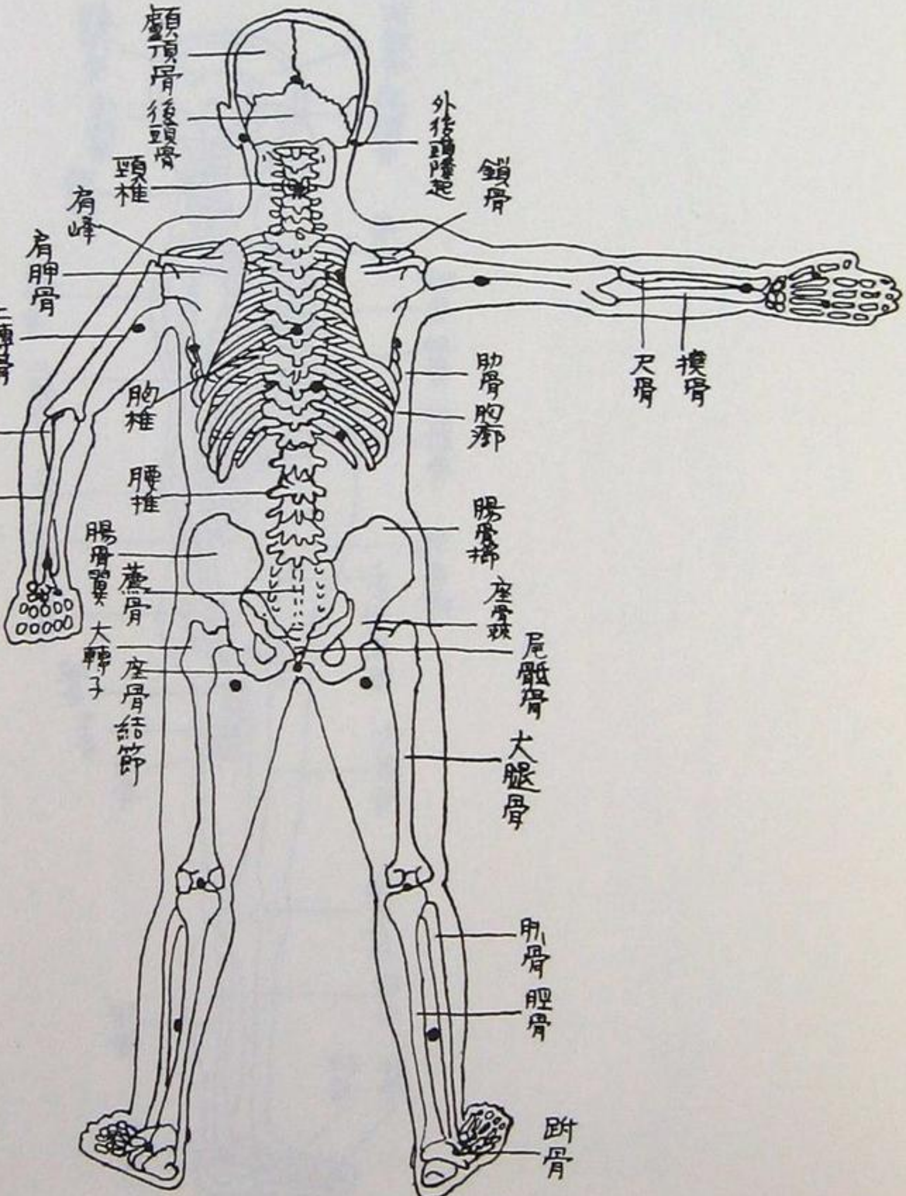
筋肉上に於ける急所部位之図（后面）



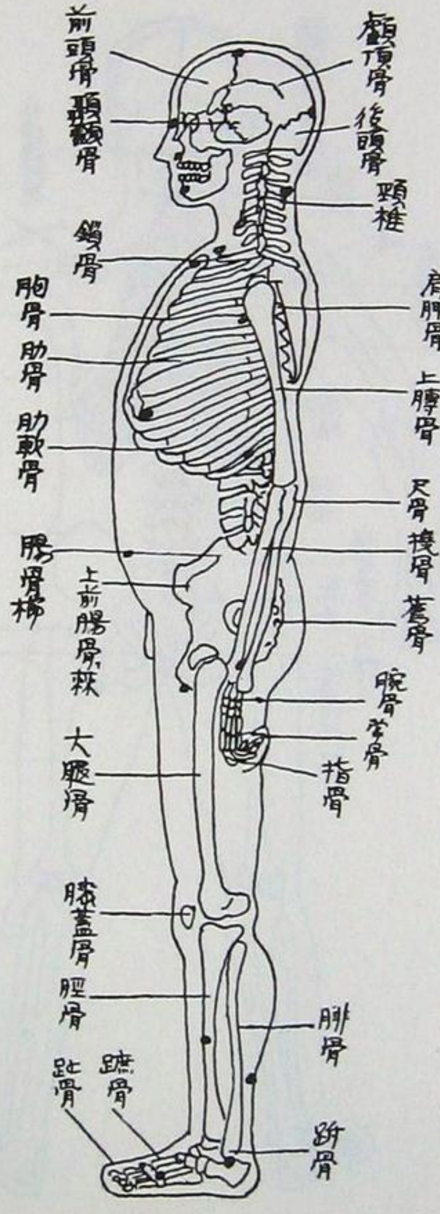
骨骼上に於ける急所部位之図（前面）



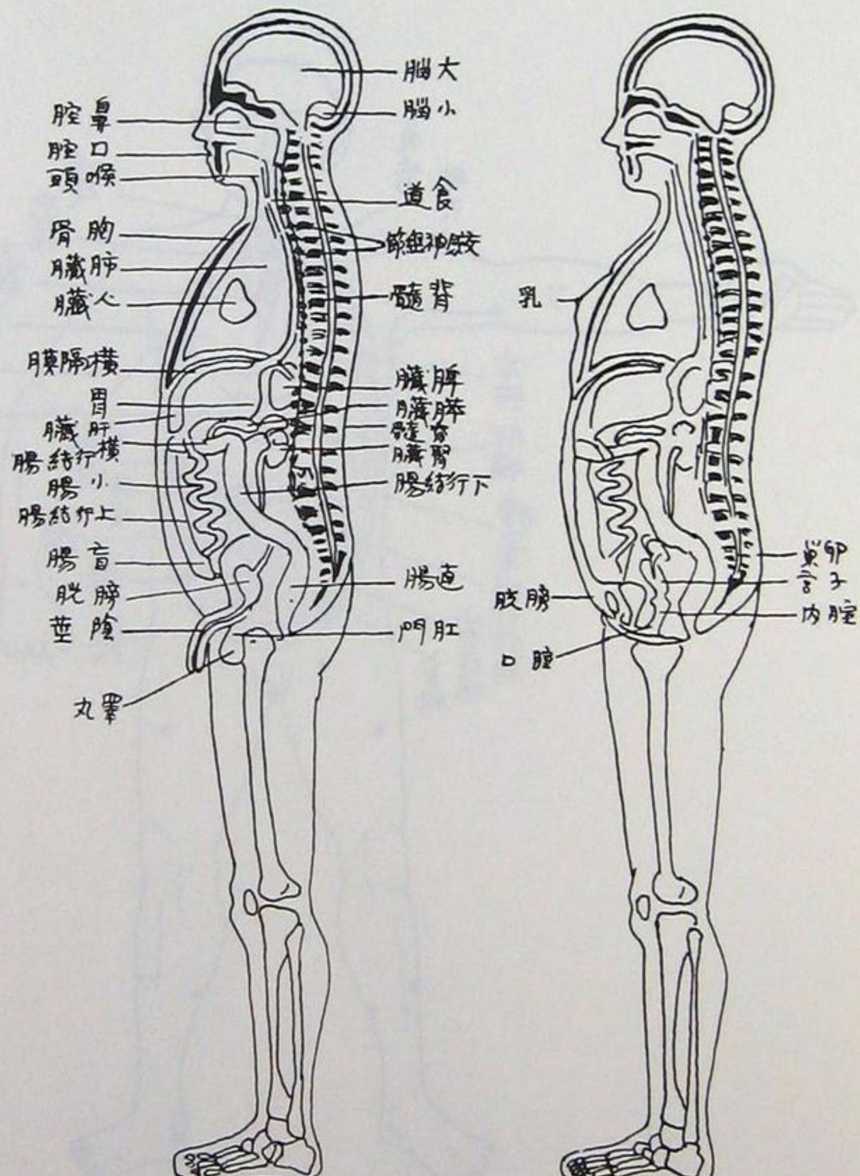
骨骼上に於ける急所部位之図（后面）



骨骼上に於ける急所部位之図（横面）

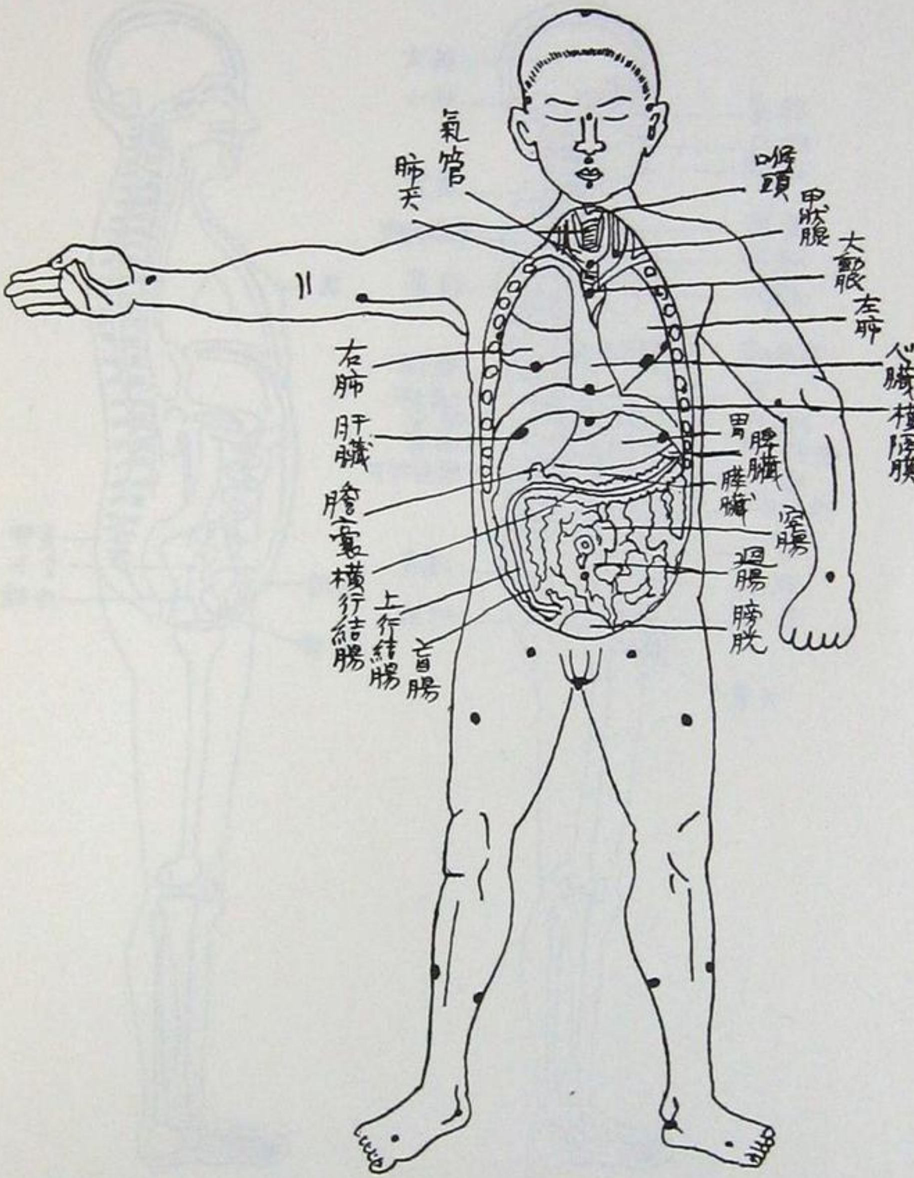


人体内臓之位置（横面）

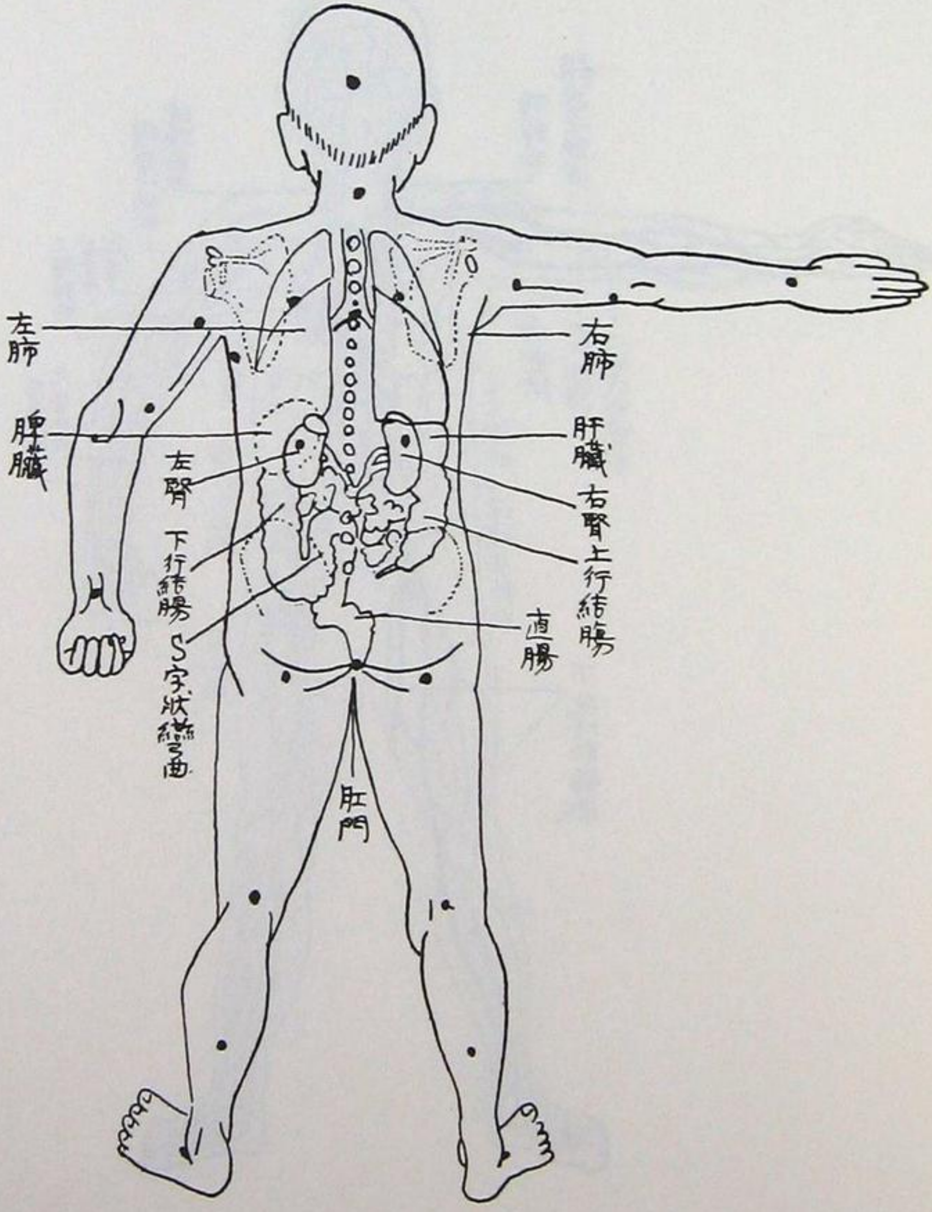


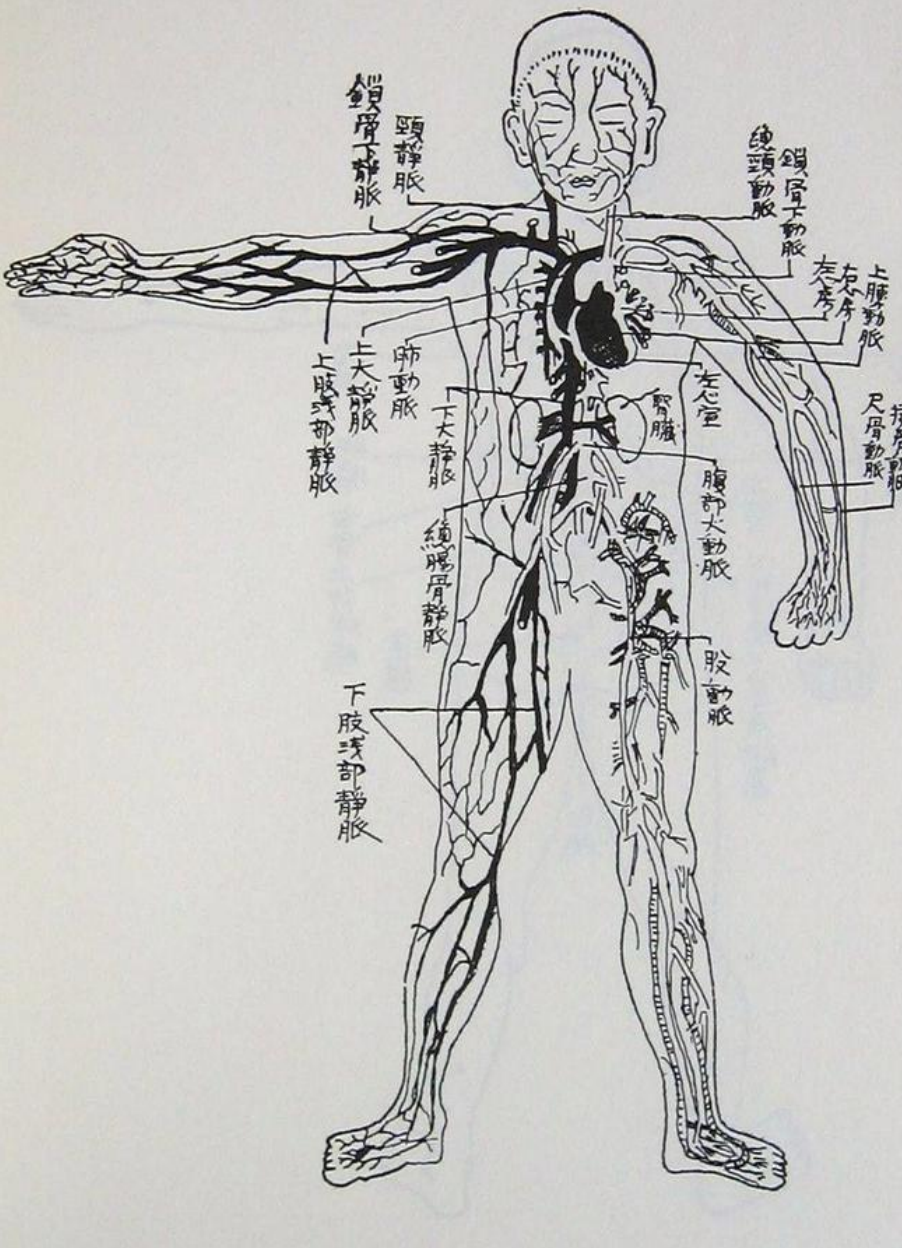
大脳
小脳
鼻腔
口腔
喉頭
食道
交感神経節
胸骨
肺臓
心臓
背髄
横隔膜
脾臓
胃
膵臓
肝臓
脊髄
横行結腸
腎臓
小腸
下行結腸
上行結腸
盲腸
直腸
膀胱
陰茎
肛門
睾丸
乳
卵巣
子宮
膀胱
腟内
腟口

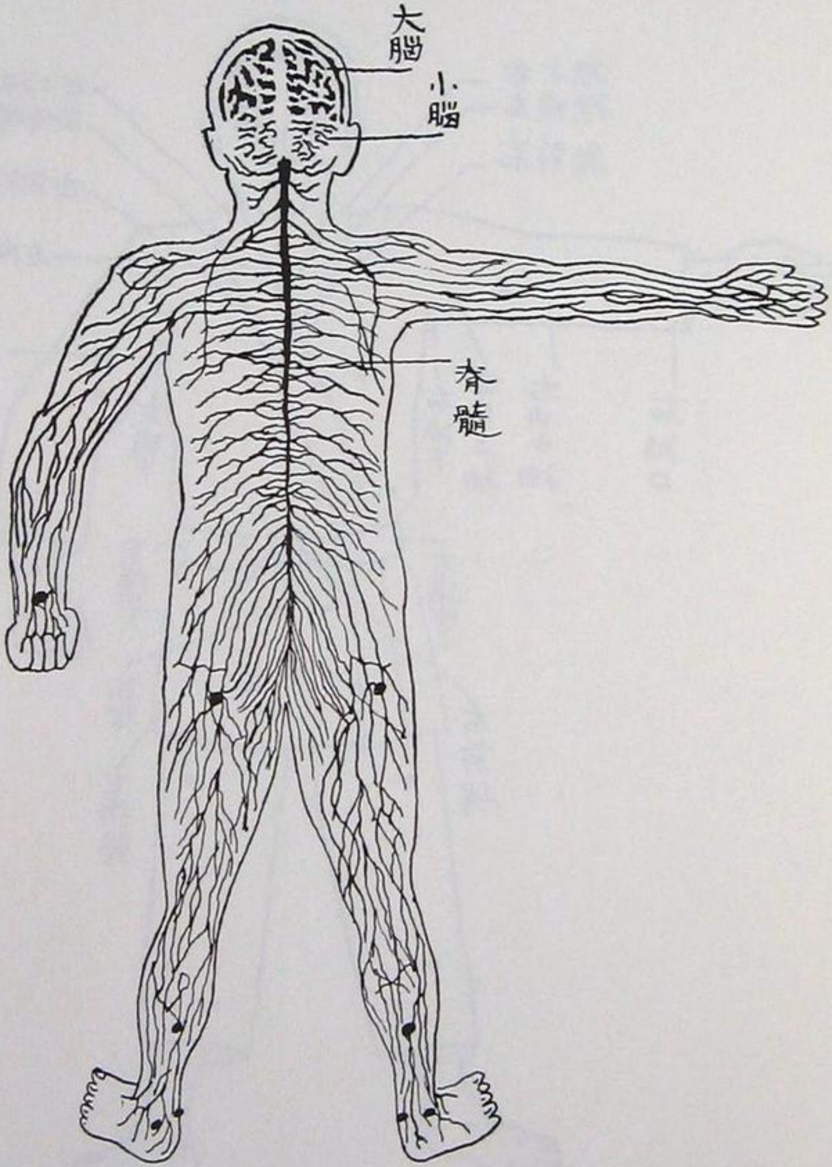
内臓部に於ける急所部位之図（前面）



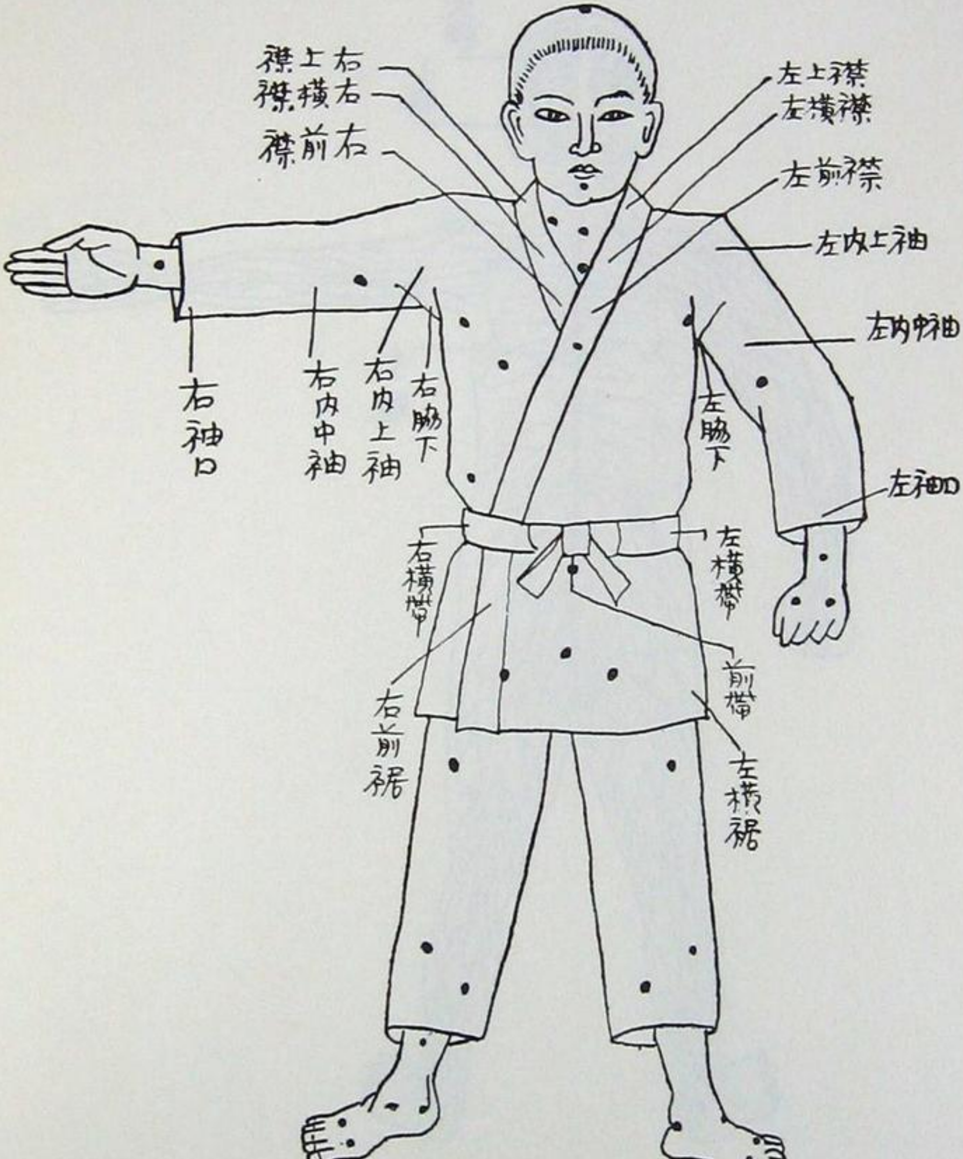
内臓部に於ける急所部位之図（后面）



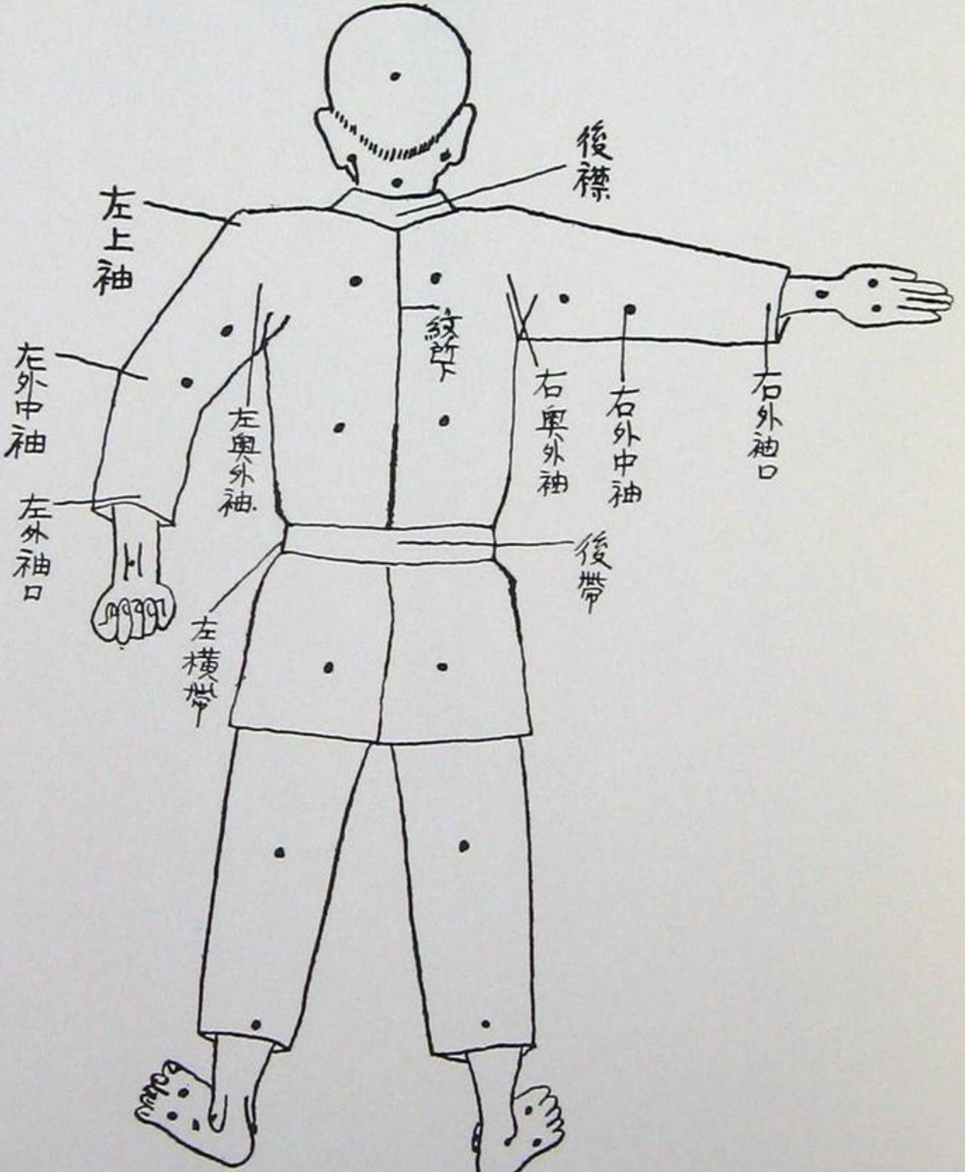

鎖骨下靜脈
頸靜脈
總頸動脈
鎖骨下動脈
左房
右房
上膊動脈
上肢浅部靜脈
上大静脈
肺動脈
下大靜脈
腎臓
左心室
撓骨動脈
尺骨動脈
腹部大動脈
總腸骨靜脈
股動脈
下肢浅部靜脈


大脳
小脳
脊髓

稽古着の上より見たる急所部位之図（前面）



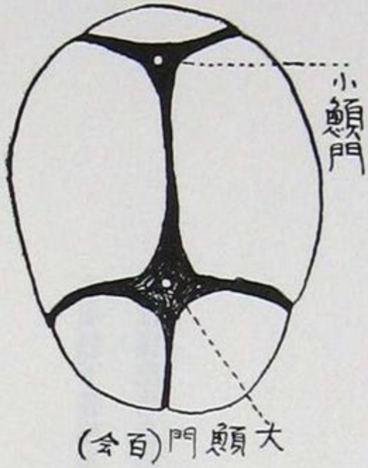
稽古着の上より見たる急所部位之図（后面）



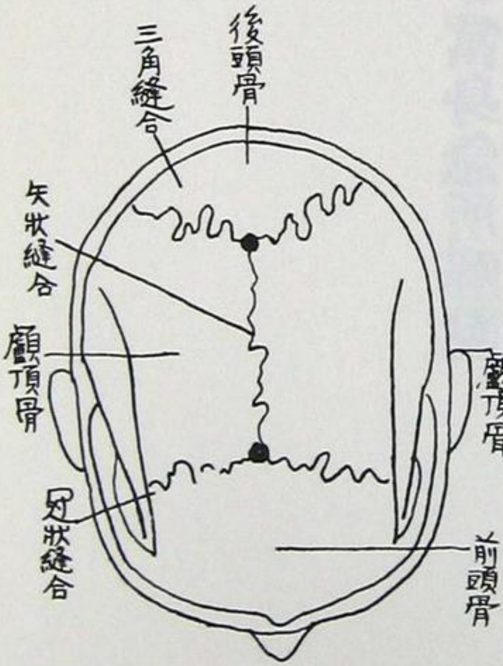
頭部並顔面咽喉部の當身急所解説

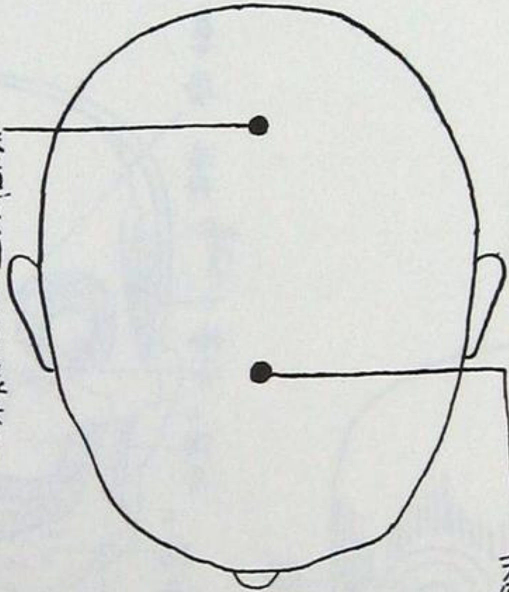
本項以下各部当身急所解説中に記載する当身手法の要領は後記当身の要領の項に記載した全項参照ありたし

初生兒頭骨



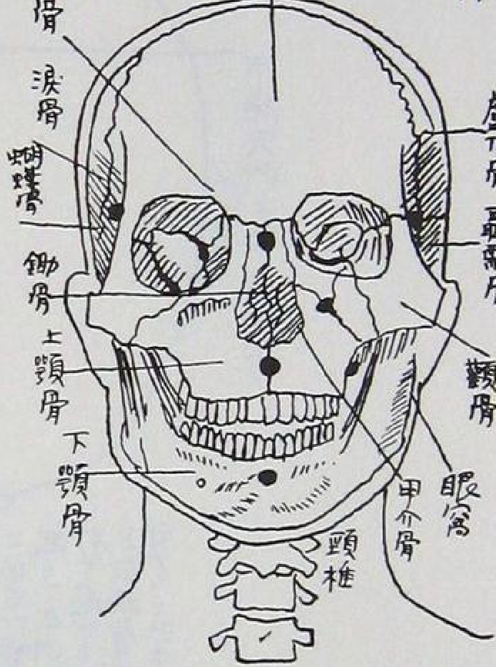
頭蓋骨



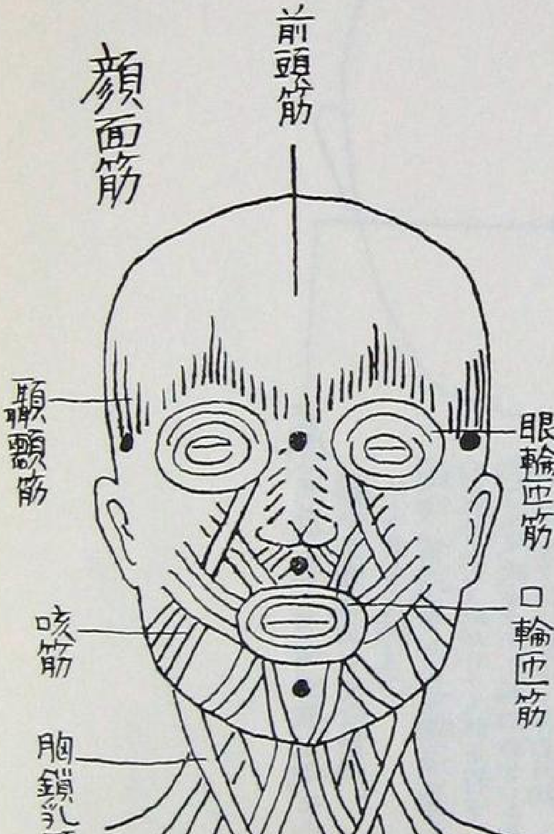


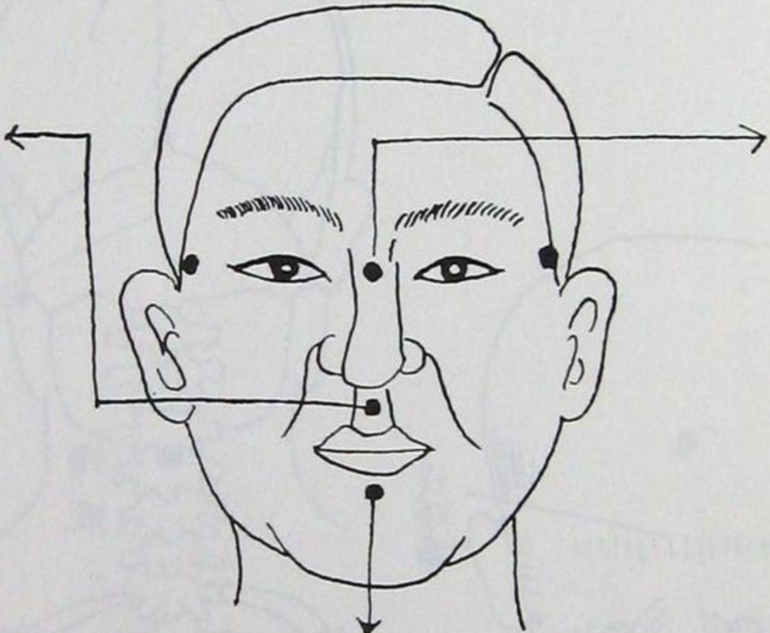
天倒（天道）山上、百会 天辰 上倒 天上
顚倒 大陽 日角 天光穴 聖門
ひよめき（踊子）
頭頂、前頭骨と左右顱頂骨との縫合部で幼時ピクピク脈を打ってゐる処、握拳の小指、球部でトンと跳返る様に打撃するのが有効
これを打撃すると脳髄震蕩を起して卒倒する。しかし余り強く打ち過ぎると三大骨（左右顱頂骨と前頭骨）が開けて絶命し蘇生せず、これを頭中砕の當とも云ふ

顏面骨


前頭骨
鼻骨
涙骨
蝴蝶骨
鋤骨
上顎骨
下顎骨
顱頂骨
顳顬骨
顴骨
眼窩
甲介骨
頸椎

顏面筋


前頭筋
顳顬筋
眼輪匝筋
口輪匝筋
咬筋
胸鎖乳頭筋



烏兎（眉間 山根 日月 鬼拳 石火 無明 面山 目高 顔別）

両眼の間 前頭骨と鼻骨の縫合部 これを握拳又は手刀を以て衝突すると大脳刺劇 神経錯擾 眼神経錯乱 視感激変等によって卆倒す

流派によっては両眼を烏兎と云って左眼を烏(日)(陽)右眼を兎(月)(陰)と云って両眼を突くを日月砕と云ってゐる

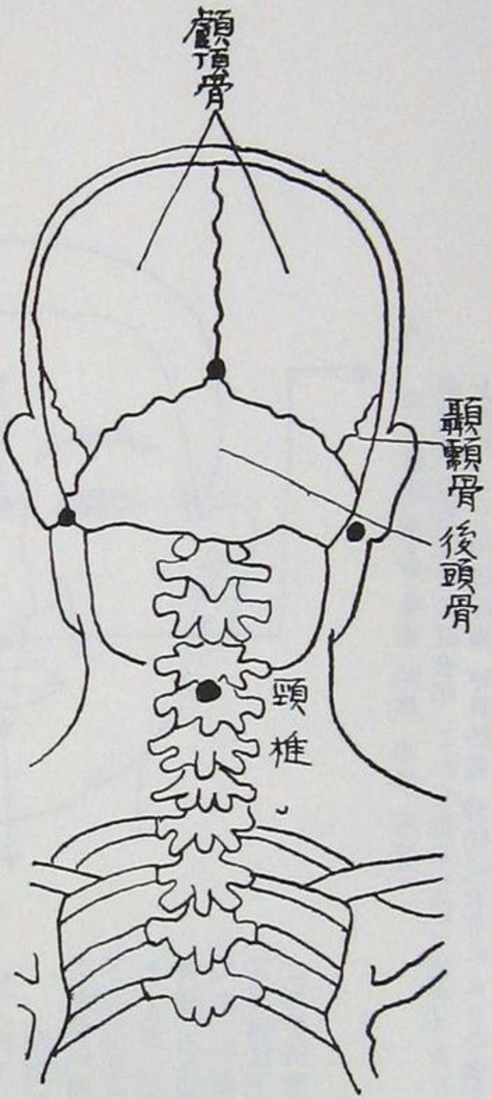
下昆（髣下 下根 下民 頤溝 花前 明閅）

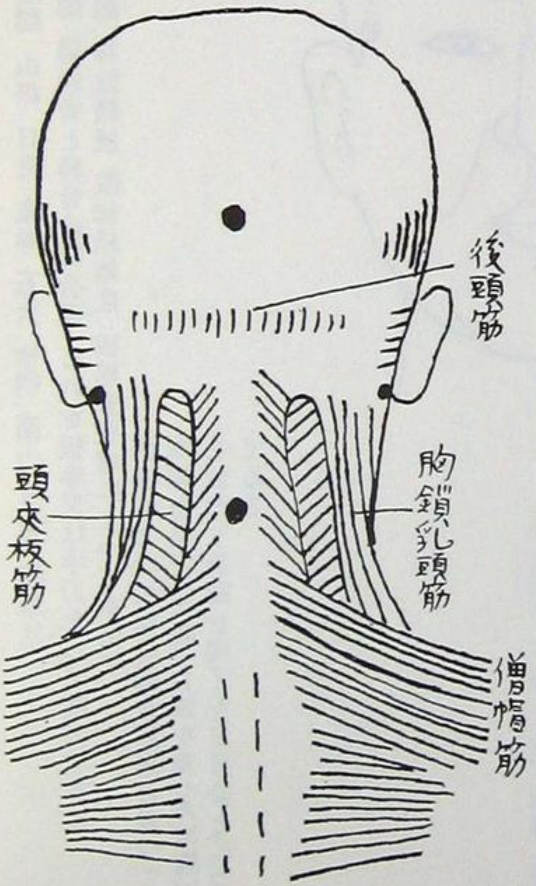
下頤骨の前面中央部で下唇の直下五六分の処握拳を以て突上ると 人中の当と仝じく 顔面動脈神経 三叉神経紛擾 神経戟衝等によって卆倒す

又下顎は下より蹴上くるもよしこれを三考砕と云ふ

人中（溝道 形合 乱鼻 明星 志口 玉窉）

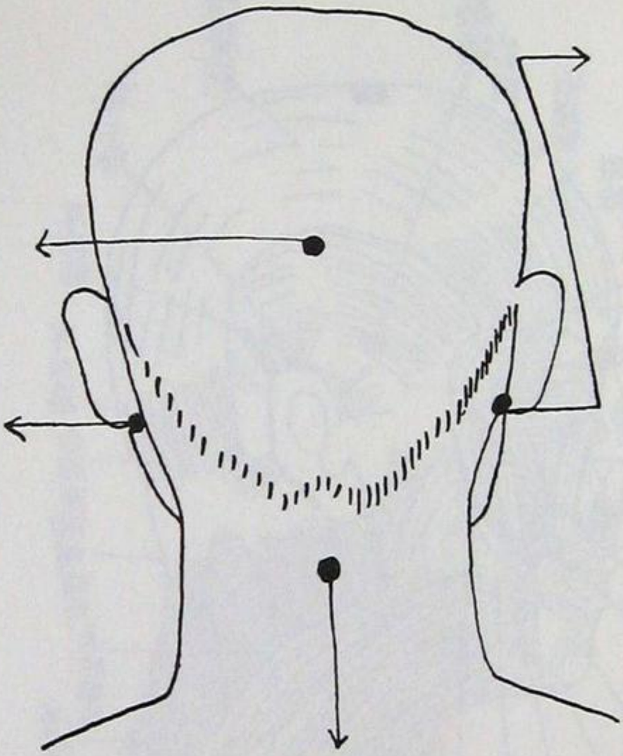
鼻の下 左右顎骨の縫合部 これを握拳を以て衝突すると 顔面動脈神経 鼻骨上顎骨 三叉神経紛擾 呼吸妨害 神経戟衝等により卆倒す


顱頂骨
顳顬骨
後頭骨
頭椎


後頭筋
頭夾板筋
胸鎖乳頭筋
僧帽筋

独鈷（独古、耳果、徳古、竜耳、耳下）

耳朶の裏、耳下乳頭突起と下顎骨枝との間、握拳を以て突くか指頭を以て強圧すると大耳顔面舌因三叉神経内頸静動脈等に及ぶ血管神経圧迫により劇痛、卆倒するか戦意喪失す



頸中（北極、動元、ぼんのくぼ）

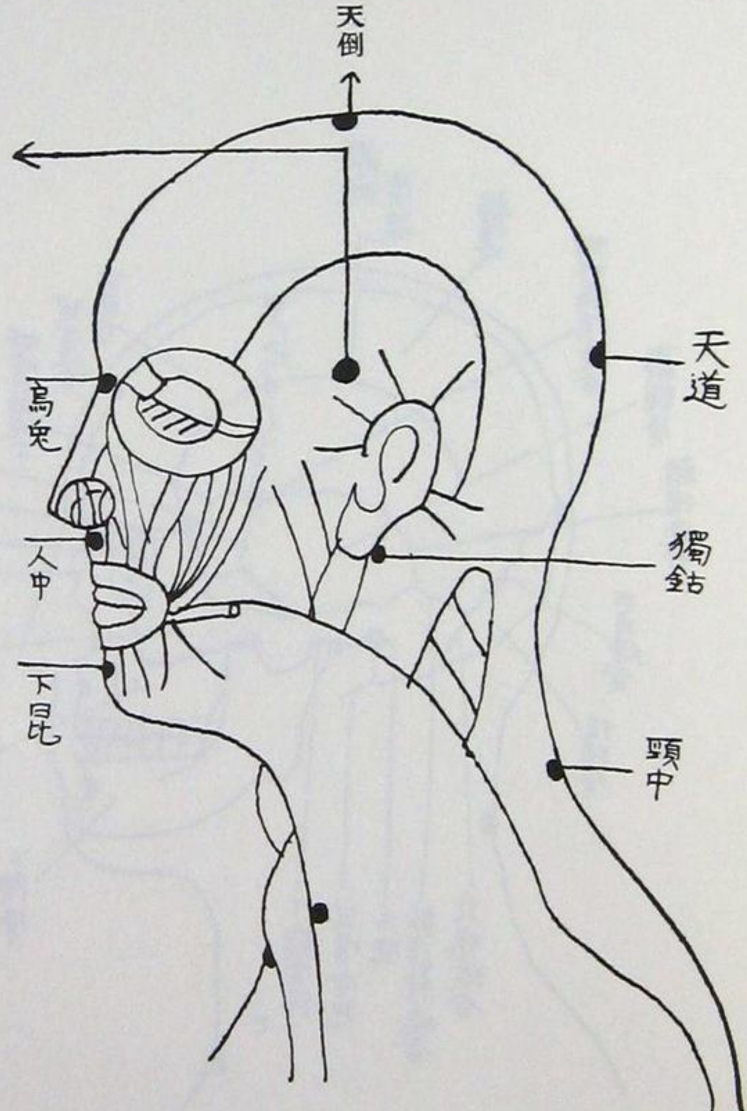
頸の後方中央部第三頸推と第四頸推との間これを手刀を以て搏撃すると運動中枢神経刺撃により卆倒すこの当を魂結砕と云ふ

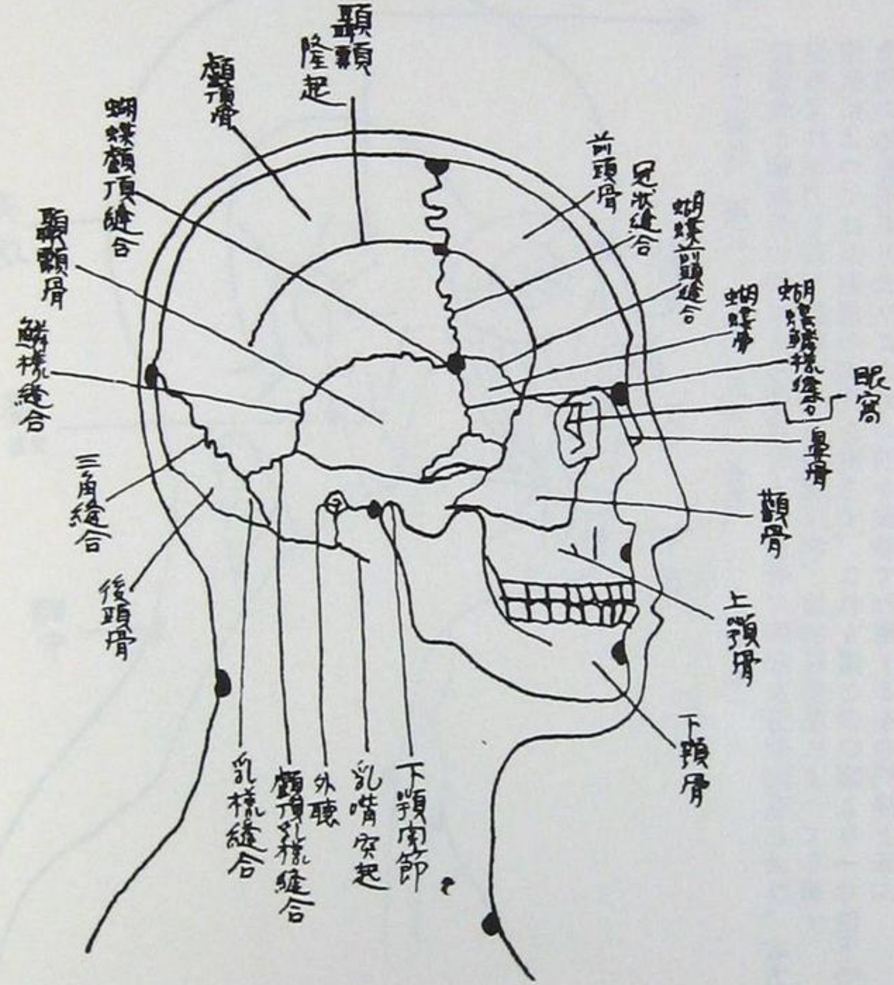

帽状腱膜
前頭筋
眼輪匝筋
耳上筋
耳前筋
耳后筋
后頭筋
胸鎖頭筋
肩胛擧筋
僧帽筋
皮下頸筋
口角擧筋
方形頤筋
三角頤筋
小顴骨筋
笑筋
大顴骨筋

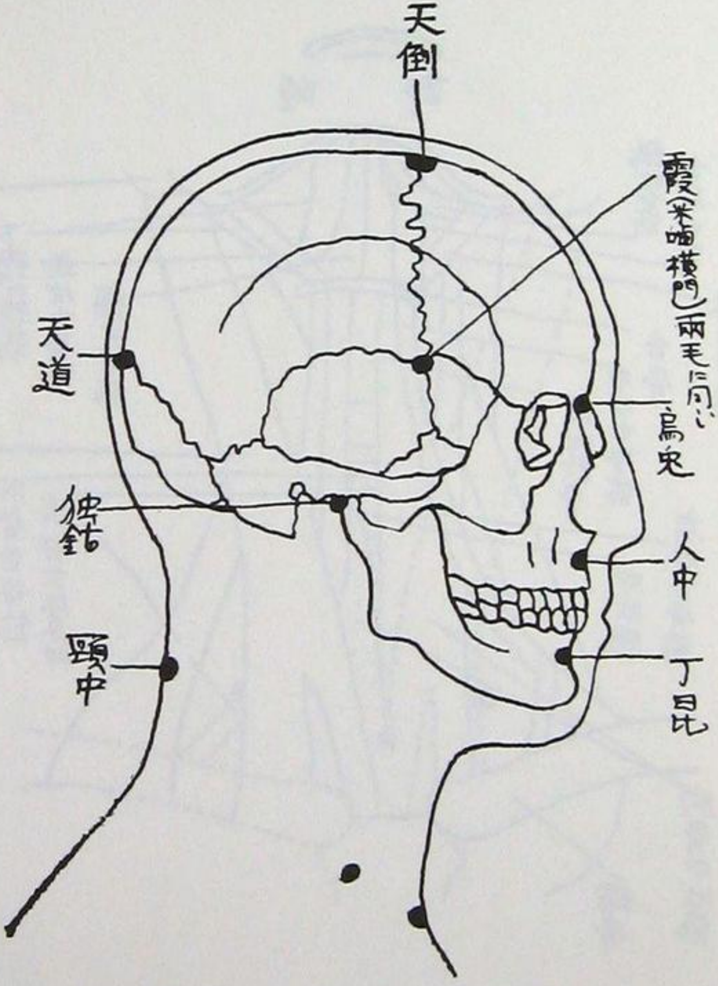
両毛（両髦、霞孔、三向、天角、骨当、三光、米嚙）

前頭骨と顱顬骨の間にある胡蝶骨と顱頂骨の縫部左方を両毛と云ひ、右方を霞と云ふ、握拳又は手刀を以て搏撃すると脳髄反劇、諸神経攪乱によつて卆倒す

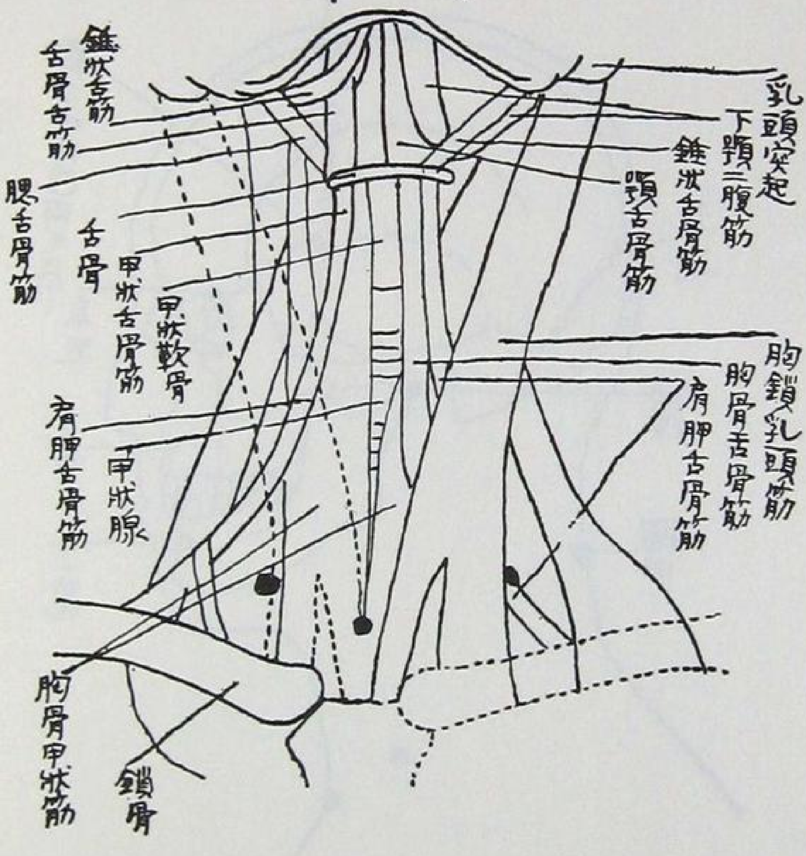
流派によつては左右別の名称を附さず、これを霞と云ひ霞より一寸位下つた耳の前、命門の処を両毛と云ひこの耳の前を握拳で打撃するを命門砕と云ふ



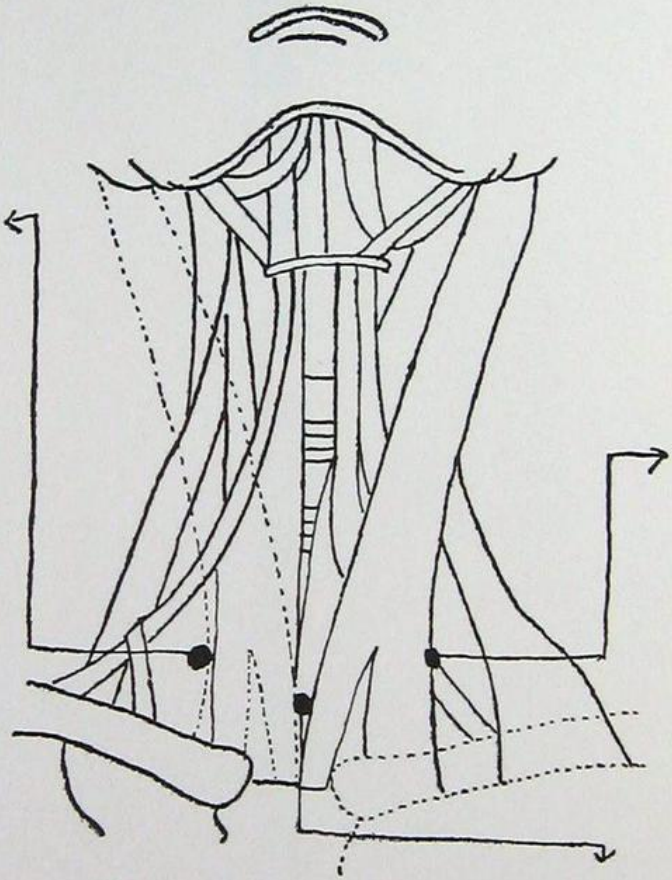

顳顬隆起
顱頂骨
蝴蝶顱頂縫合
顳顬骨
鱗様縫合
三角縫合
後頭骨
乳様縫合
顱頂乳様縫合
外聴
乳嘴突起
下顎関節
前頭骨
冠状縫合
蝴蝶前頭縫合
蝴蝶骨
蝴蝶鱗様縫合
眼窩
鼻骨
顴骨
上顎骨
下顎骨


天倒
霞（米噛横門）兩毛に同じ
天道
烏兎
独鈷
人中
頸中
丁昆

頸部



錐狀舌筋
舌骨舌筋
腮舌骨筋
舌骨
甲狀舌骨筋
甲狀軟骨
肩胛舌骨筋
甲狀腺
胸骨甲狀筋
鎖骨
乳頭突起
下顎二腹筋
錐狀舌骨筋
頸舌骨筋
胸鎖乳頭筋
胸骨舌骨筋
肩胛舌骨筋

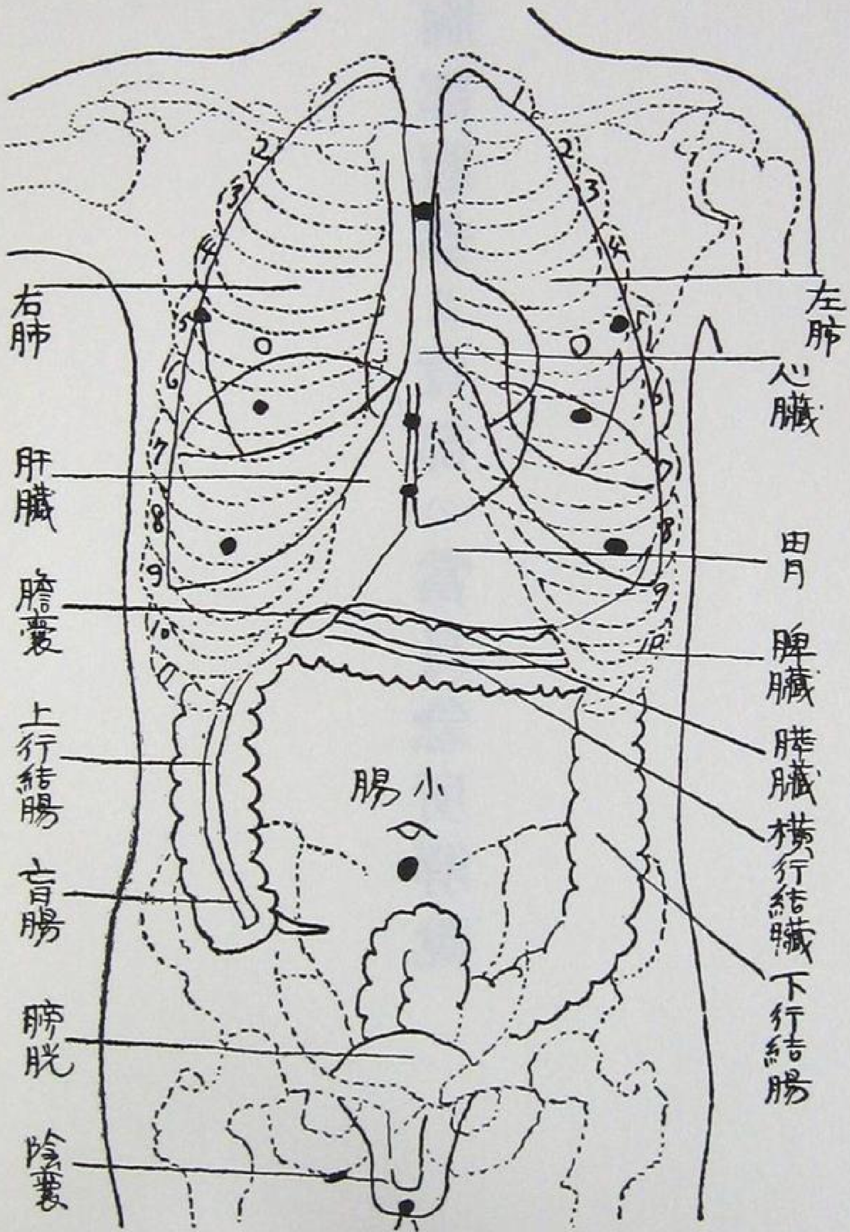


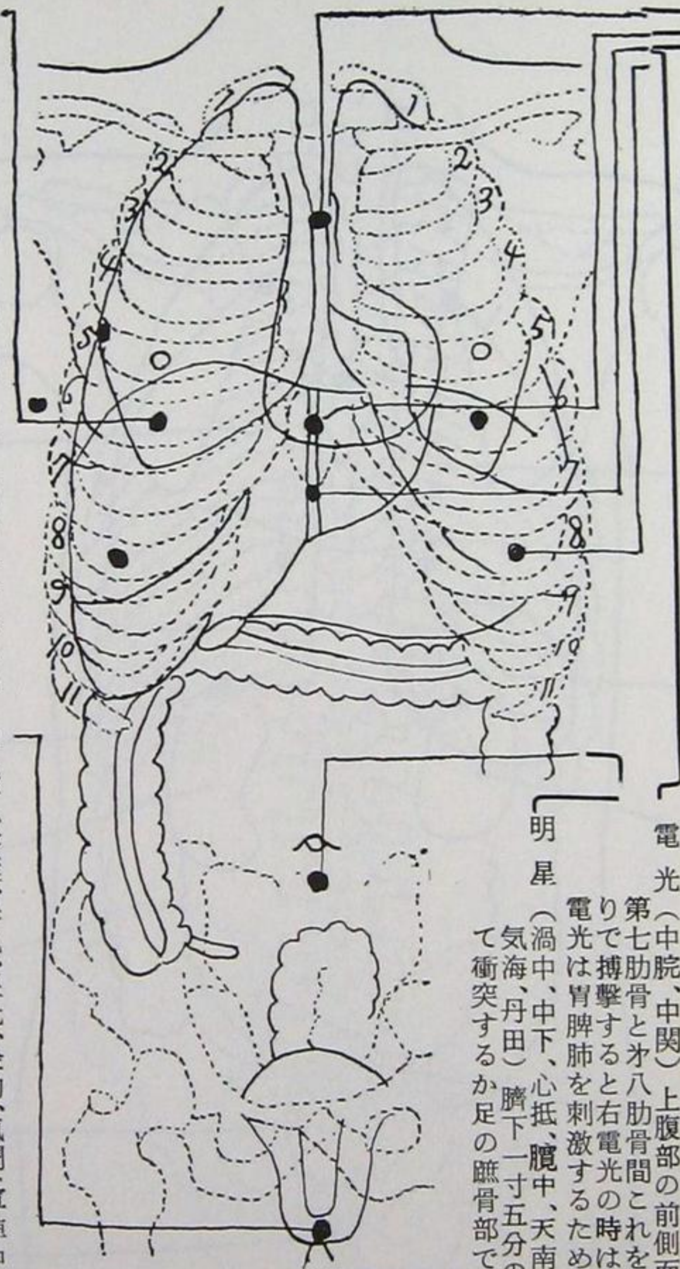
松風（風月）村雨と全じ様なり

秘中（肢中　独骨　関戸
喉笛　喉仏　極意
明ノ間）
前頸部舌骨と胸骨上端との中間の凹所、握拳で突くか圧迫すると頸動脈及び気管を圧迫し肺臓に障礙を及ぼし呼吸気室塞により卆倒す

村雨（急雨　襟下）側頸部、左側を松風、右側を村雨と云ふ胸鎖乳頭筋の外側で肩胛舌骨筋の上手刀で打撃するか圧迫すると肺胃神経（一名迷走神経）横膈神経の二神経刺劇と頸動脈、気管圧塞、呼吸気絶息により卆倒す

胸部腹部並背部の當身急所解説


右肺
肝臓
膽嚢
上行結腸
盲腸
膀胱
陰嚢
左肺
心臓
胃
脾臓
膵臓
横行結腸
下行結腸
小腸



膻中（胸中）胸骨体の前面上端部握拳又は肘を以て衝突す神経震盪血行遽変呼吸気絶により卒倒すこの当を肥骨殺とも蓮華砕とも云ふ

小方（胸尖、脆骨、中上）胸骨の下端劒状突起の基頭、握拳又は肘を以て衝突すると水月と仝じ起因により卒倒す

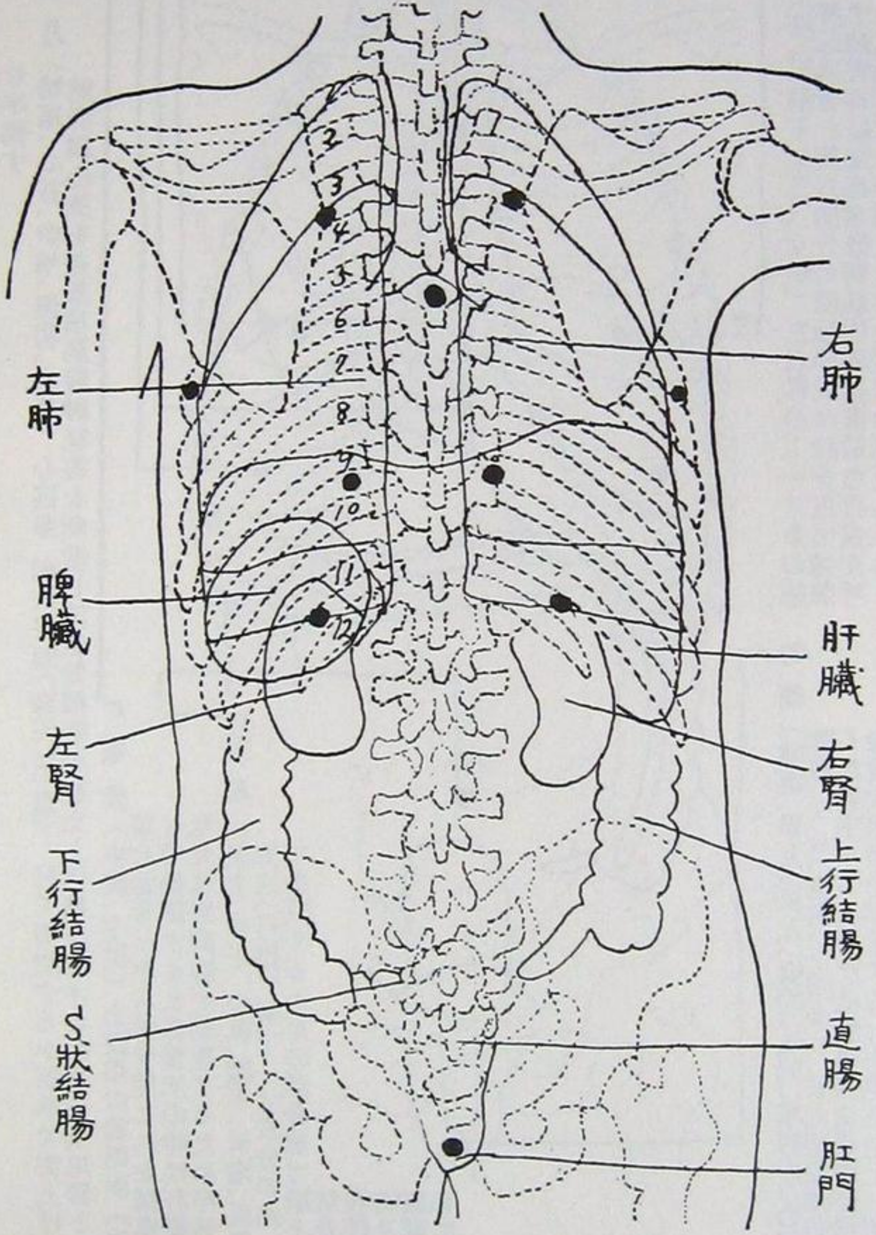
水月（鳩尾、心谷、中鳩、無明、水落）心窩部 剣状突起（胸尖）の真下 肘で衝突するか握拳で突上げる胃腑肝臓心臓を遽振横膈膜神経等を刺激し諸血管機能を絶止し気絶卒倒すこの当を鳩尾砕と云ふ

鴈下（雁中、眼下、少寸、女根）左右乳の下一寸余の処第五肋骨と第六肋骨の間握拳又は肘を以て搏撃す肺胃神経交感神経神経挾神経震盪血行遽変呼吸気絶により卒倒すこれを長矢の当とも云ふ

電光（中脘、中関）上腹部の前側面（季肋部）第七肋骨と才八肋骨間これを握拳手刀蹴りで搏撃すると右電光の時は肝臓肺臓左電光は胃脾肺を刺激するため卒倒す

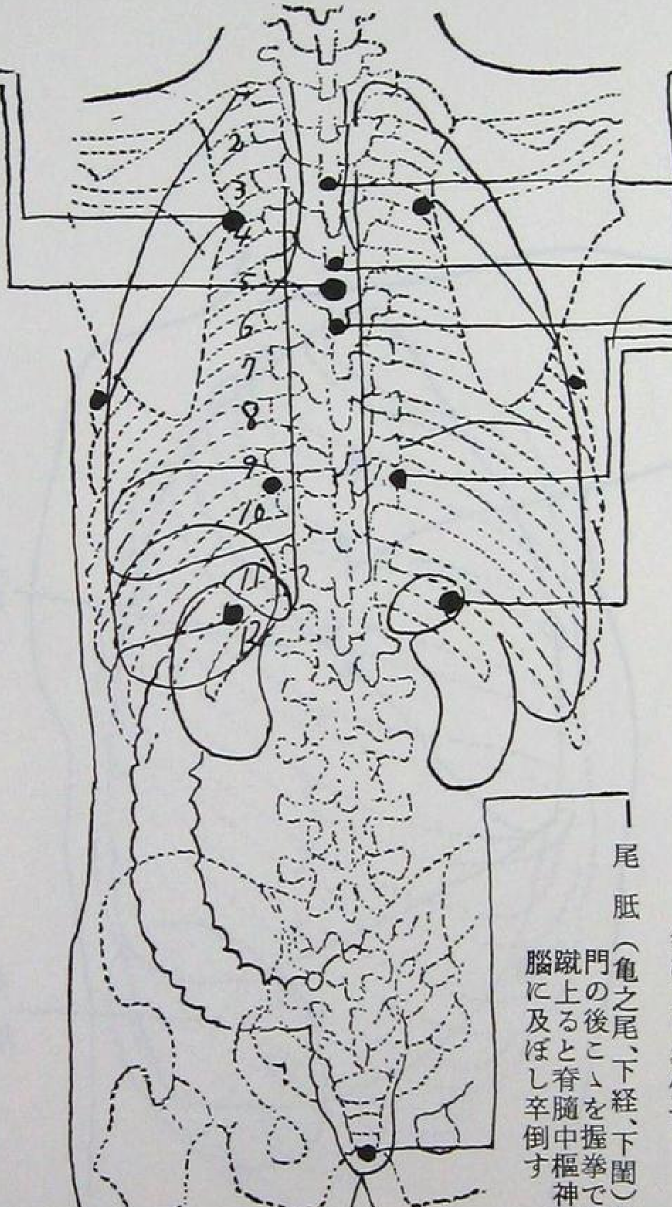
明星（渦中、中下、心抵、臏中、天南、天光、中心気海、丹田）臍下一寸五分の処 握拳にて衝突するか足の蹠骨部で蹴上ると総腸骨動脈及腹膜大腸小腸及膀胱を劇震するために卒倒す

釣鐘（陰嚢、睪丸、根元、金的、気閂、軍陣中、合谷、玉水陰鐘、反金、蓮露、下隨合）睪丸膝蓋脚頭にて突くか握圧すると膀胱直腸睪丸交感神経精糸動脈会陰動脈等を刺激するため睪丸釣上り絶息卒倒すこれを魂玉砕の当と云ふ


右肺
左肺
脾臓
肝臓
左腎
右腎
下行結腸
上行結腸
S状結腸
直腸
肛門

電光　この急所は俗に三つ当り電光と云って第一は脊推第三胸推の処第二は五胸推の処第三は第六胸推の処でこれを握拳で撃突すると脊推中枢の激動と肺臓心臓其他胃肝臓等の脈管激震により卆倒する

癒活電光　脊推第九胸推の左右を癒活電光と称し癒治に用ふ此処を栂指で強く押すと癒を治す

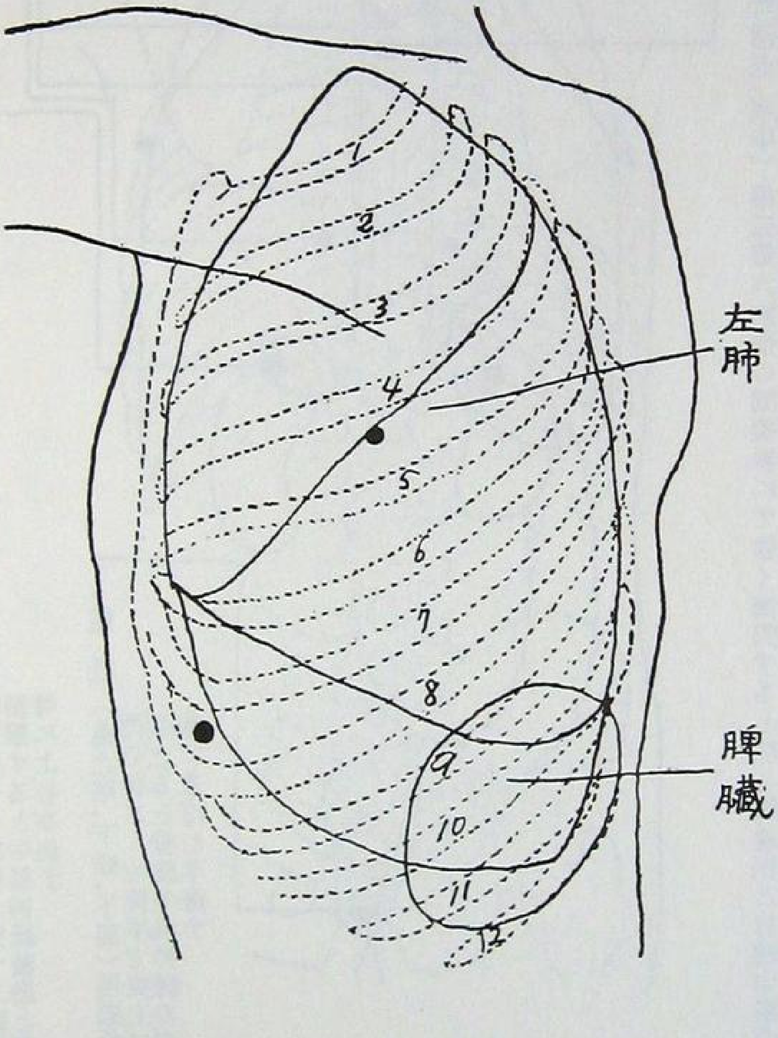


電光　脊推第十一胸推と第十二胸推の間を衝撃すると中枢神経激動と腎臓激震等により卆倒す

尾骶（亀之尾、下経、下闇）尾骶骨の下端肛門の後こゝを握拳で突上げるか足で蹴上ると脊髄中枢神経の刺劇より大脳に及ぼし卒倒す

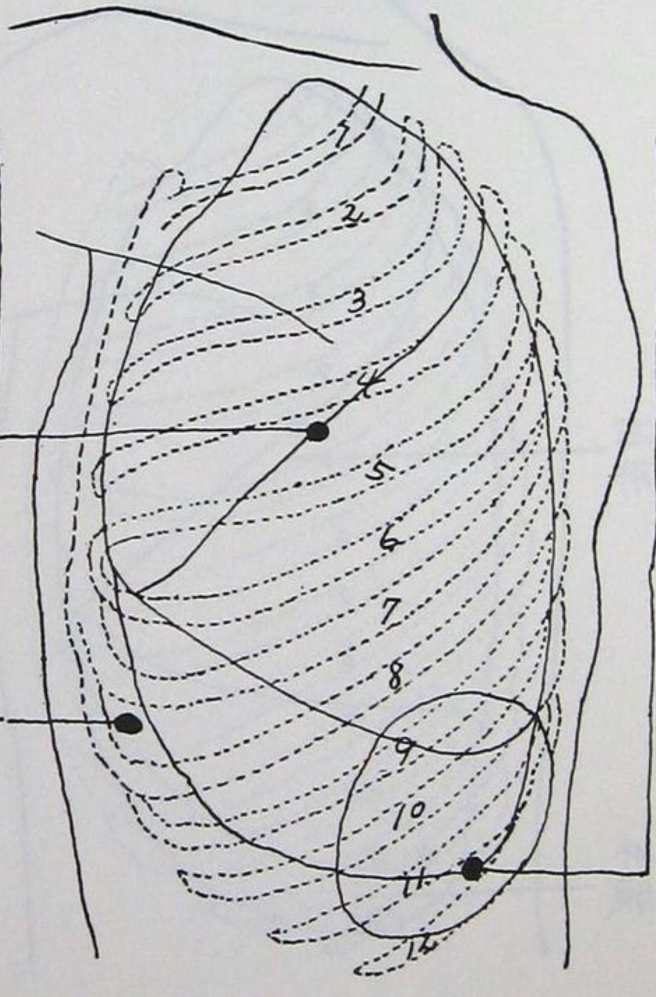
活殺（活処、活点、真中）第五第六胸推の間握拳にて強く衝突すると肺心臓遽振と脊髄中枢の激動により大脳震動を起し全身の機能を失ひ卒倒す　又此急所は卒死者の男は左側女は右側に打撃を加へて蘇生させる活法二十五活法中一番多く用ひられる活処である

早打（安下、雷公）脊推第三第四胸推の間にして肩甲骨の内側に接した処握拳にて衝突すると肩甲筋神経刺激と脈管の故障を起し卒倒する又早打肩称して肩凝りつまりて倒れた者に強圧刺激を加へて蘇生させる活処である


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
左肺
脾臓

月影

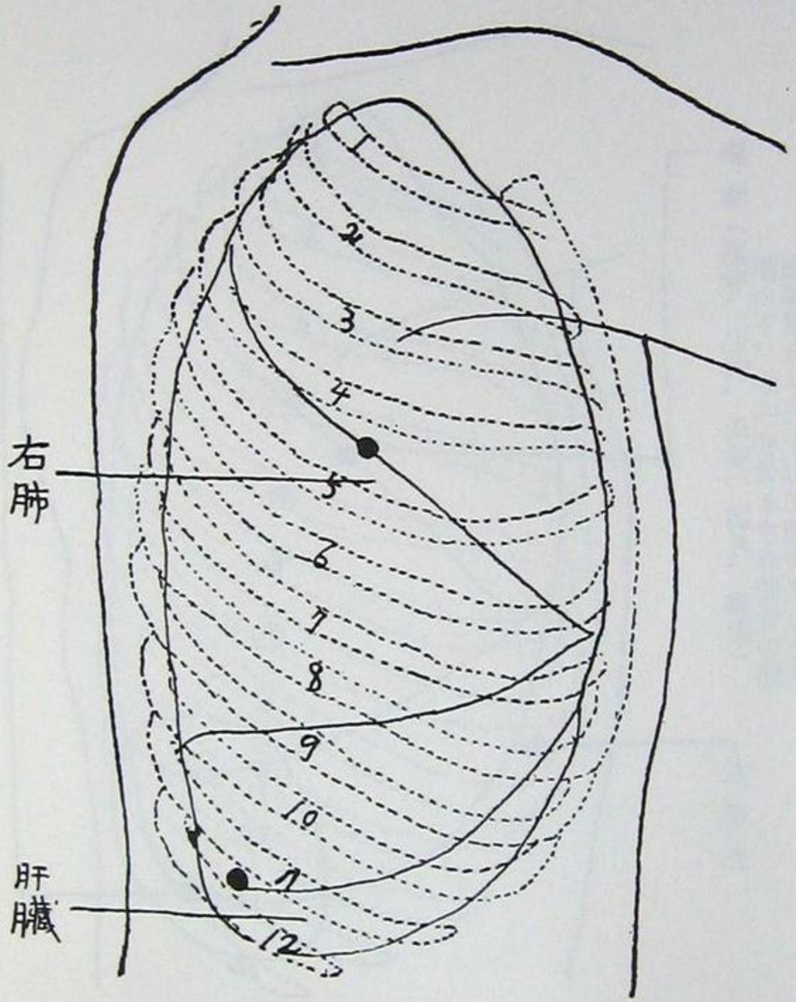
俗に肋の三枚目と云ふ処　上腹部の前側面才十一浮肋骨と才十二浮肋骨の間、左を月影、右を稲妻と云ふ　肘又は握拳手刀を以て衝突するか足で蹴上る、肺胃神経、横膈神経及び右は交感神経の肝臓嚢及肝臓、左は脾臓を刺激し卒倒す　この当を荒浪砕と云ふ



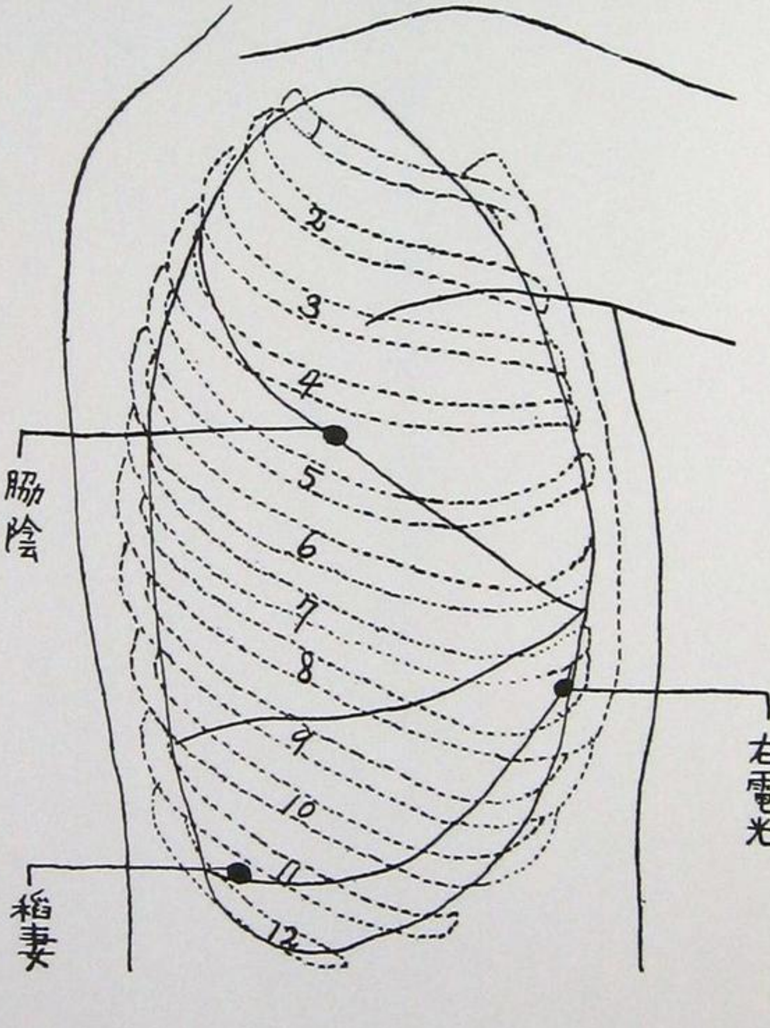
腋陰（扇骨、毛穴、久陰、雲月、腋影）

腋の下、才四肋骨と才五肋骨の間握拳又は手刀を以て衝突すると肋膜神経を刺激し肺臓を遽振せしめ呼吸絶止により卒倒す

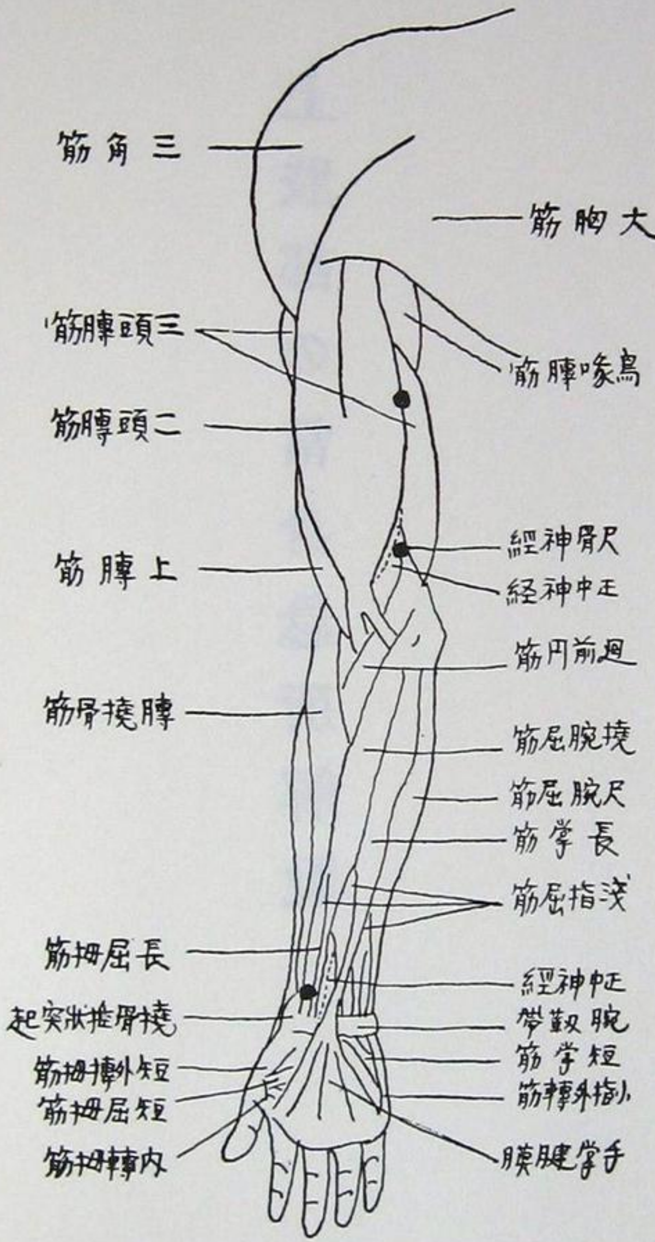
左電光



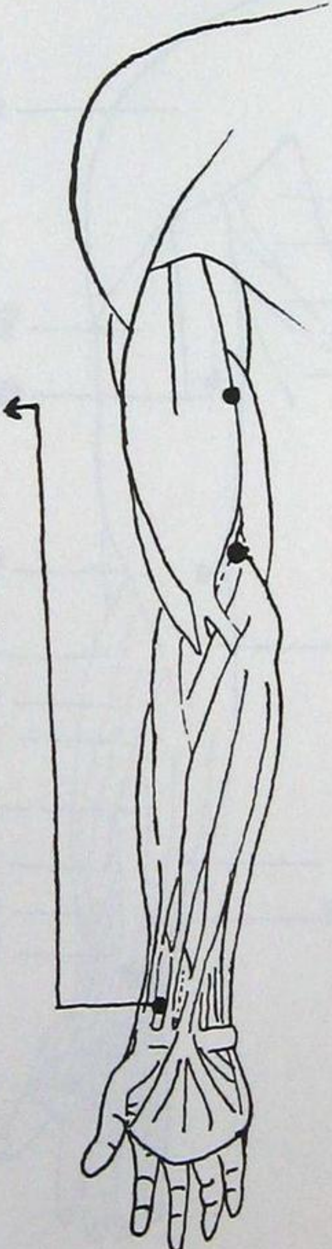
右肺
肝臟
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12


2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
腸陰
右電光
稲妻

上肢部の當身急所解説

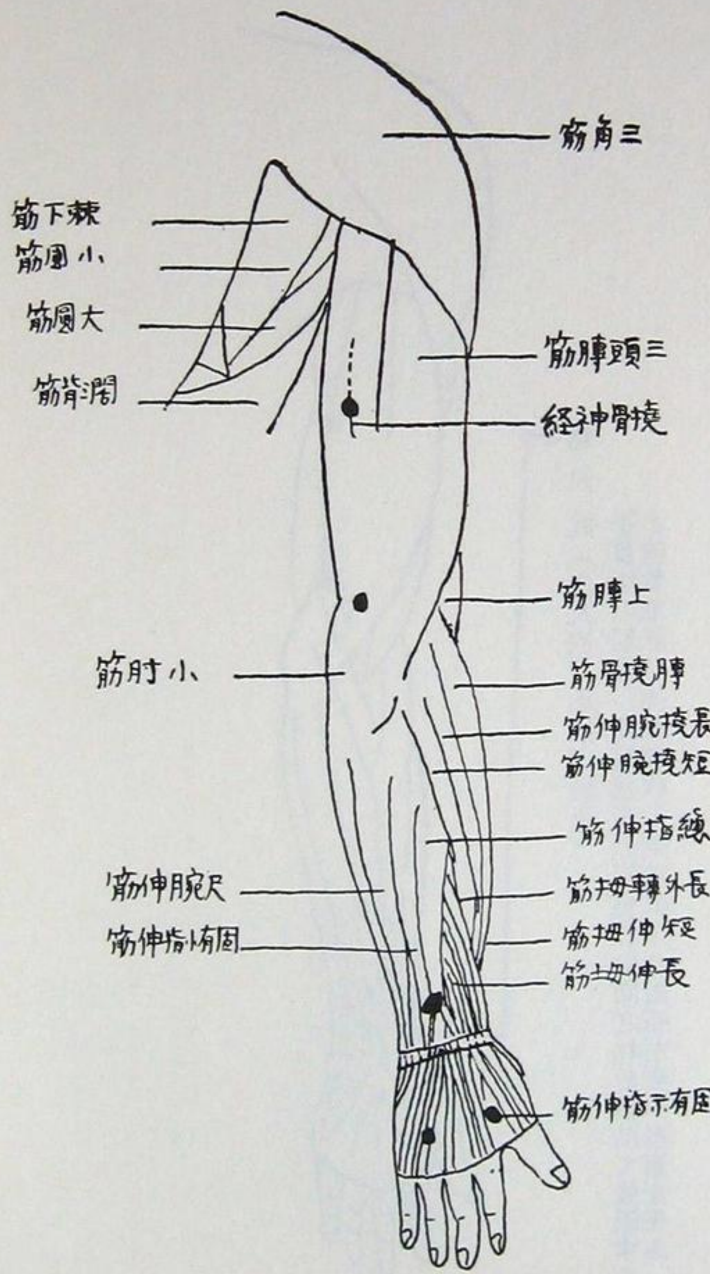


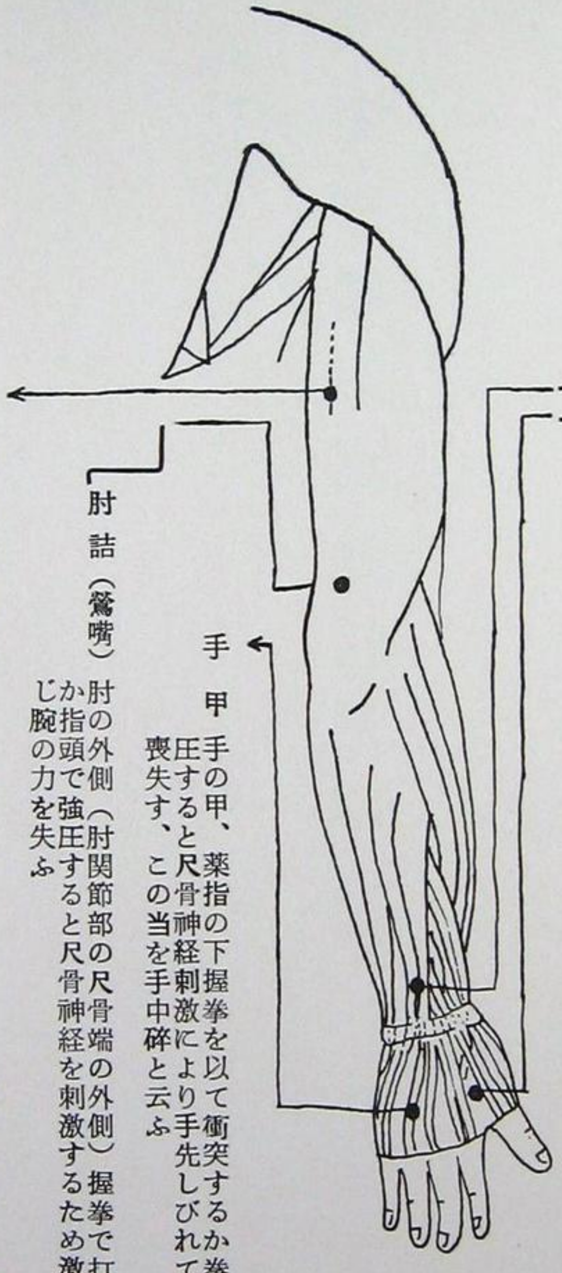
三角筋
大胸筋
三頭膊筋
烏喙膊筋
二頭膊筋
尺骨神經
上膊筋
正中神経
廻前円筋
膊橈骨筋
橈腕屈筋
尺腕屈筋
長掌筋
淺指屈筋
長屈拇筋
正中神經
橈骨茎状突起
腕靭帶
短外轉拇筋
短掌筋
短屈拇筋
小指外轉筋
內轉拇筋
手掌腱膜



前尺沢（内尺沢、小捕、脈所）

手首際の前面　撓腕屈筋と腓撓筋の間之れを指にて強圧する**と撓骨**動脈、撓骨神経の刺激により激痛を覚へ戦意を失ふ


筋角三
筋下棘
筋圓小
筋圓大
筋背濶
筋膊頭三
経神骨撓
筋膊上
筋肘小
筋骨撓膊
筋伸腕撓長
筋伸腕撓短
筋伸指總
筋伸腕尺
筋拇轉外長
筋伸指小有固
筋拇伸短
筋拇伸長
筋伸指示有固



後尺沢（外尺沢、小捕）手首際の背面中央部、総指伸筋と尺腕伸筋との間（撓骨端と尺骨端との間）これを指にて強圧すると撓骨神経尺骨神経の刺激により痛みに耐へず戦意を喪失する

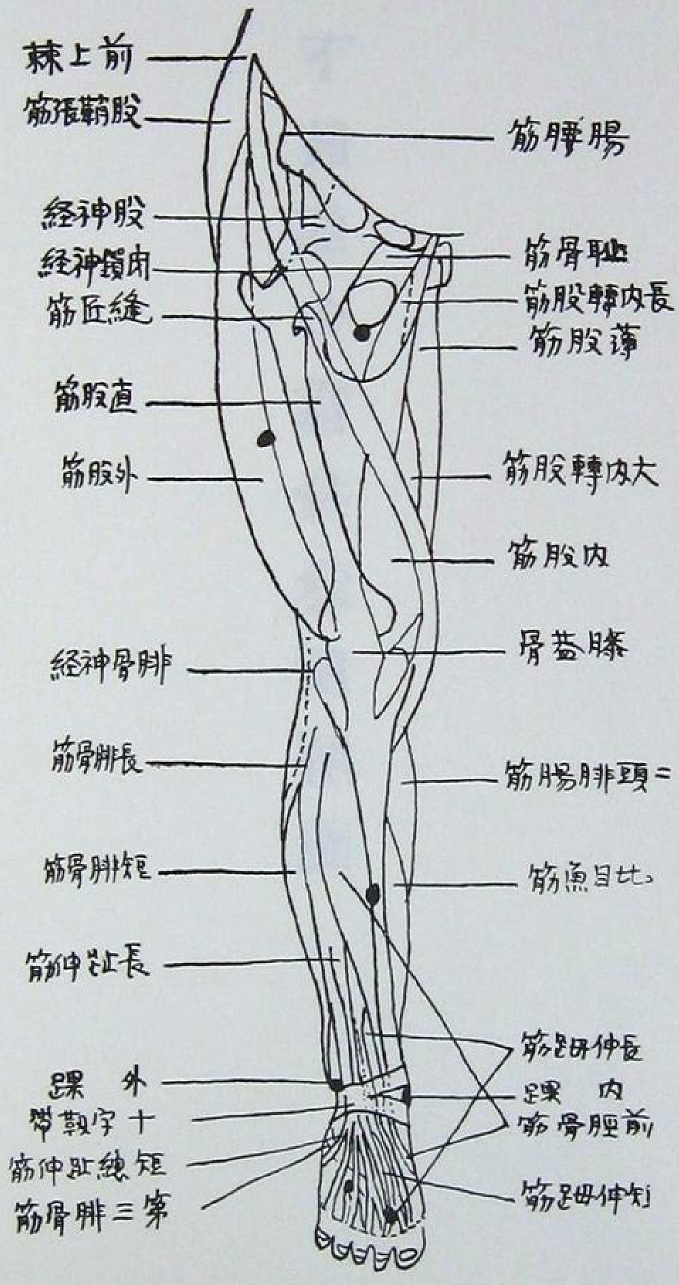
開握（合谷）拇指（才一掌骨）と次指（才二掌骨）の間強圧すると前腕外側神経撓骨神経等の刺激により戦意を失ふ

手甲　手の甲、薬指の下握拳を以て衝突するか拳固で強圧すると尺骨神経刺激により手先しびれて戦意を喪失す、この当を手中砕と云ふ

肘詰（鷲嘴）肘の外側（肘関節部の尺骨端の外側）握拳で打撃するか指頭で強圧すると尺骨神経を刺激するため激痛を感じ腕の力を失ふ

腕馴（膊桥）上膊後側の中央部にて二頭膊筋と三頭膊筋との間これを握拳又は手刀で打撃すると三頭膊筋神経、尺骨神経、正中神経上膊動静脈を刺激するため腕の力を失ふ

下肢部の當身急所解説


前上棘
股鞘張筋
腸腰筋
股神経
閉鎖神経
縫匠筋
恥骨筋
長内轉股筋
薄股筋
直股筋
外股筋
大内轉股筋
内股筋
膝蓋骨
腓骨神経
長腓骨筋
二頭腓腸筋
短腓骨筋
比目魚筋
長趾伸筋
長踇伸筋
外踝
内踝
十字靭帯
前脛骨筋
短總趾伸筋
短踇伸筋
第三腓骨筋



夜光（潜龍、里鱗、輪玉）大腿上部の前内側恥骨筋の処、肘又は握拳にて衝突すると縫匠筋と四頭股筋神経刺激により倒る

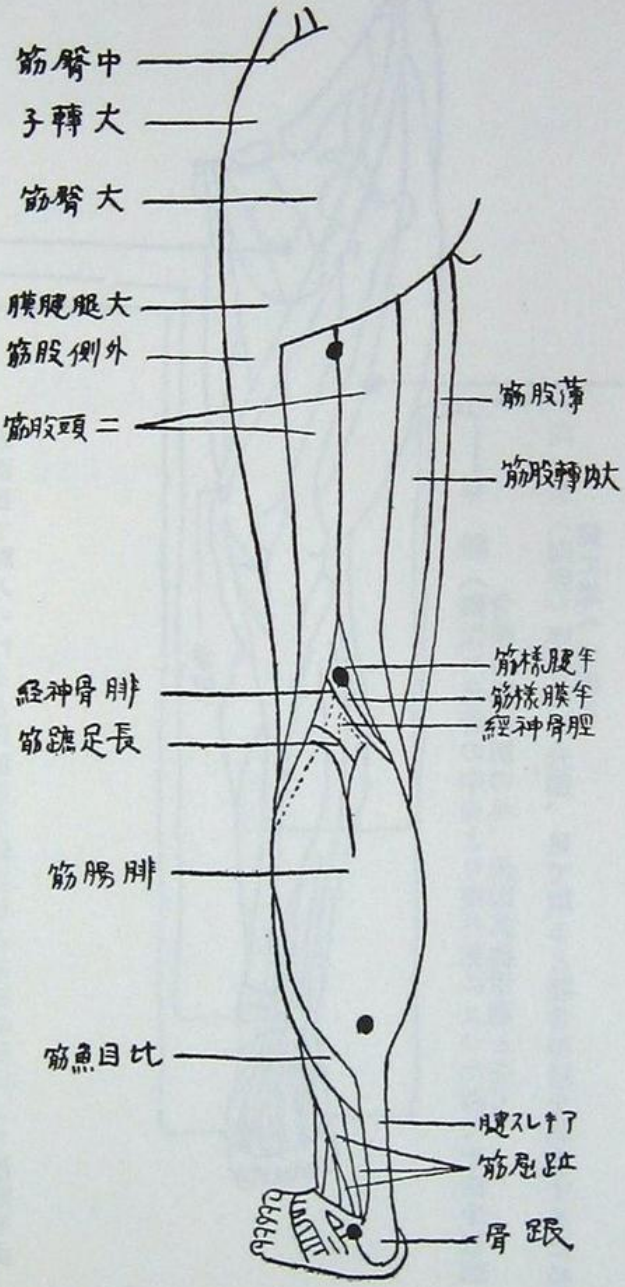
内黒節（距脚）内踝、俗に云内黒節の直下距骨の内側面を蹴ると全身に痛みを感じて倒る

甲利（高利足）足の踇指と才二指の筋骨間、握拳で突くか指先で強圧するか跟部で踏みつけると趾蹠筋及踇指筋の神経刺激により激痛卒倒

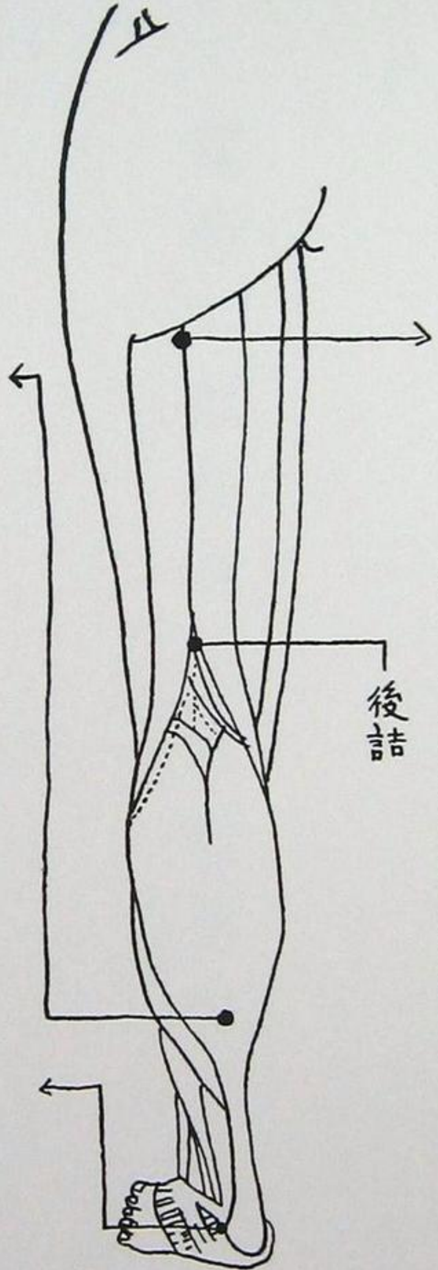
草隠（臨泣）足骨の中央より稍外側によった所で才四才五蹠骨接合部の前の処、倒因其他甲利と仝じ

向骨（向脛）脛骨の中央部、足で蹴ると脛骨神経を刺激するため激痛に堪へず倒る

伏兎（潜龍、長光、野口）大腿下部の前外側面、外股筋の中央部、肘又は握拳にて衝突すると、直股筋、外股筋の神経刺激により倒る


中臀筋
大轉子
大臀筋
大腿腱膜
外側股筋
二頭股筋
薄股筋
大內轉股筋
半腱様筋
半膜様筋
腓骨神經
脛骨神經
長足趾筋
腓腸筋
比目魚筋
アキレス腱
趾屈筋
跟骨

後稲妻（臀下）大腿後側の上部中央、大臀筋の直下二頭股筋と半腱様筋の間（重り目）の処これを握拳を以て衝突するか強圧すると、座骨神経を刺激するため腰腹部に異様の苦痛を覚へて倒る



草靡（刈当、腓下、後脛、草滅）二腓腸筋のアキレス腱に移る処の中央、足にて蹴るか指先にて強圧すると腓腸筋神経、座骨神経枝激動により全身に痛みを感じて倒る

外踝節 外踝蹴る全身腱腱に激痛を覚へて倒る

當身に使用する人體部位

打つに用ふ

手刀
(小指球部)(一)



仝(二)



握固
第二指骨部

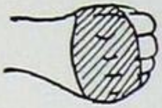


拳背部



撞くに用ふ

第三指骨部



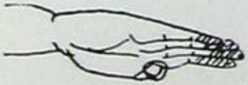
握拳



一本拳



四本貫手
指尖部



三本貫手



二本貫手

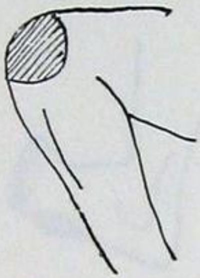


鶯嘴部



蹴るに用ふ

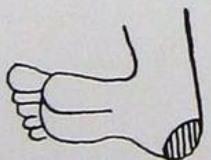
膝蓋部



蹠骨部



跟部



蹠側部

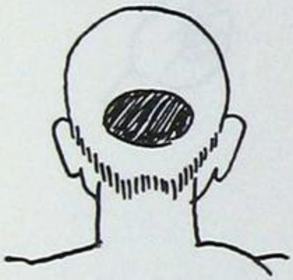


当るに用ふ

前頭部



後頭部



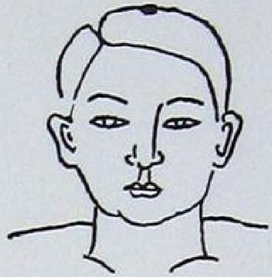
側頭部

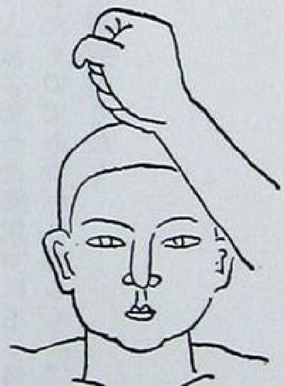


當身の要領

本項は前項、人体各部当身解説中にある当身手法の参考として記したものであるから委しくは、前記解説をよく参照して研究ありたし

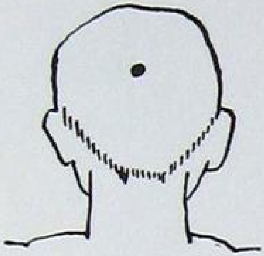
天倒

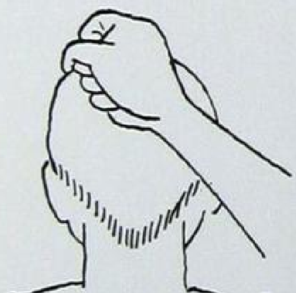




握拳の小指球部で打ち下す

天道





握拳の小指球部で打ち下す

烏兎



両眼の間眉間の処

流派によつては左眼を烏（日）と云ひ右眼を兎（月）と云ふ　又ウノメ（左）トノメ（右）とも云ふ

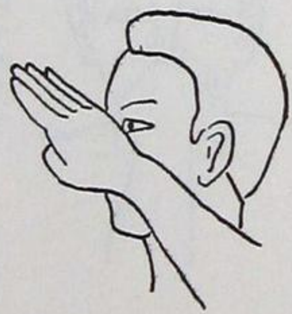
両眼

二星　眼星





握拳又は手刀を以て撃突す







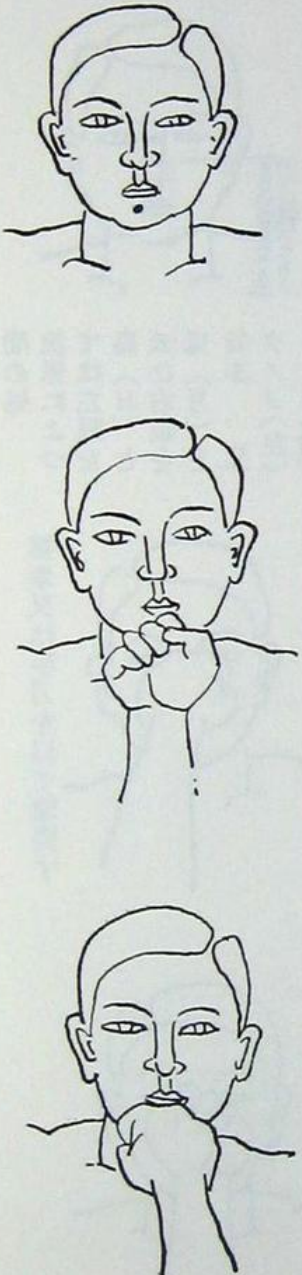
両眼を打つを暗夜の当と云ひこれを突くを日月砕と云

人中



握拳を以て撃突す

下昆

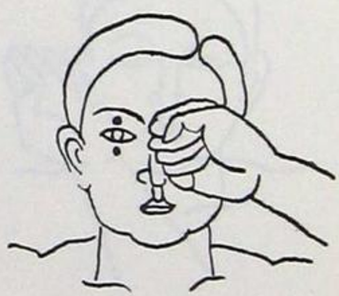


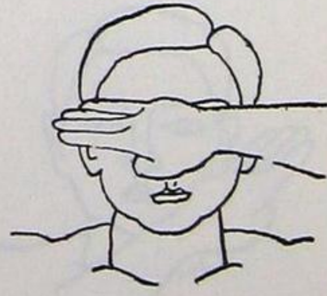
握拳で突き上げる

晴曇

晴曇とは両眼の上下を云ふ







雪焱

一名（耳孔）（鐘）

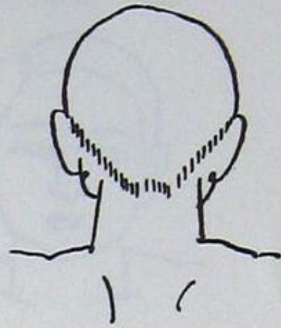




平手を以て双方同時に挟撃するを搏耳と云ふ



独古







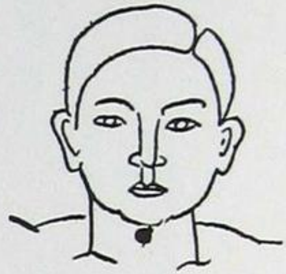
耳朶を目当に手刀の小指球部の処に力を入れ引く様に打つと頤がはづれる







三日月





突き上げる

これを三考砕と云ふ



蹴上る

準頭

鼻先　猪功



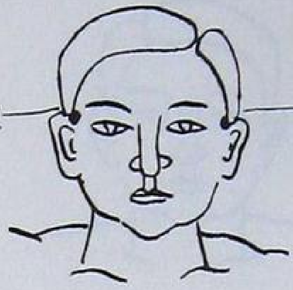




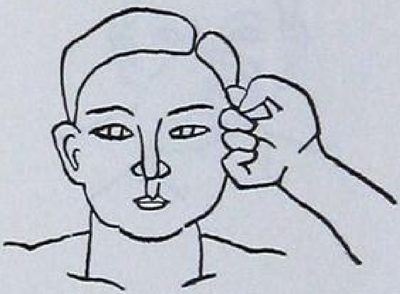
鼻を下より摺り上げる

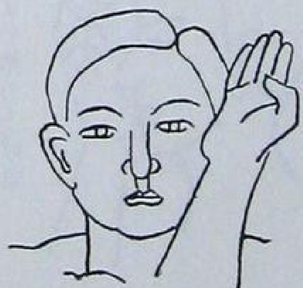
鼻摺り上げは鼻柱を切断することあれば注意を要す

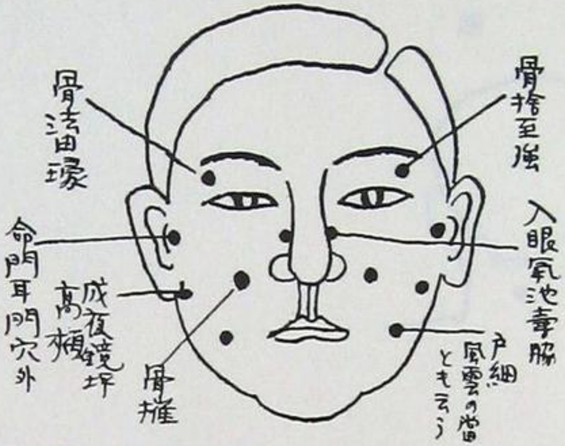
（霞）（毛两）



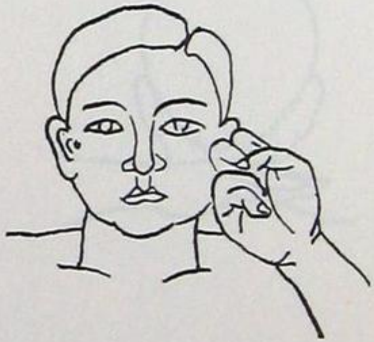







骨法田壕
骨捨至陰
命門耳門穴外
成夜鏡坪
高頬
骨摧
入眼氣池毒脉
戸細
風雲の當
ともいう

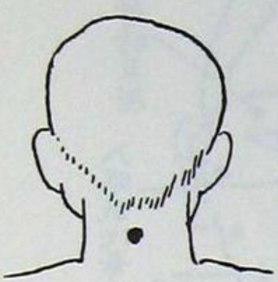


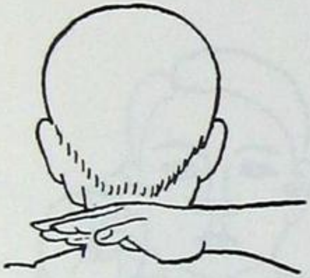






中頸







敵に後より組まれた場合後頭部を以つて顔面に当る

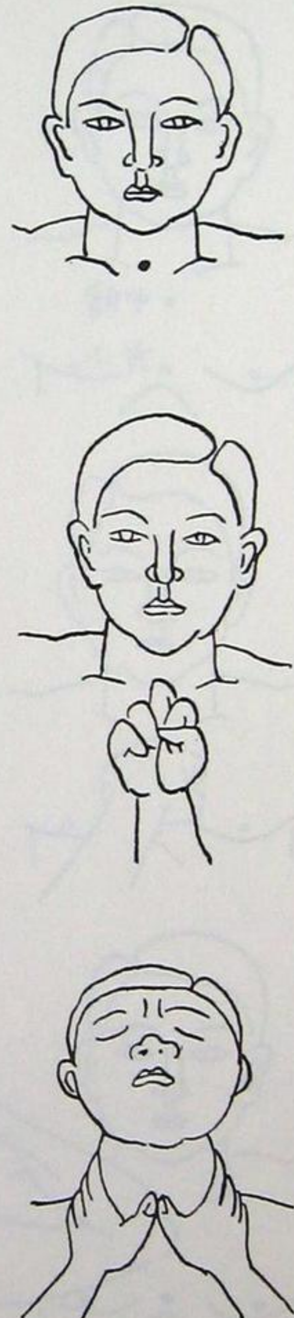


敵に前から組まれた場合前頭部を以て顔面に当る

松風　村雨



秘中



方 小　中 膻



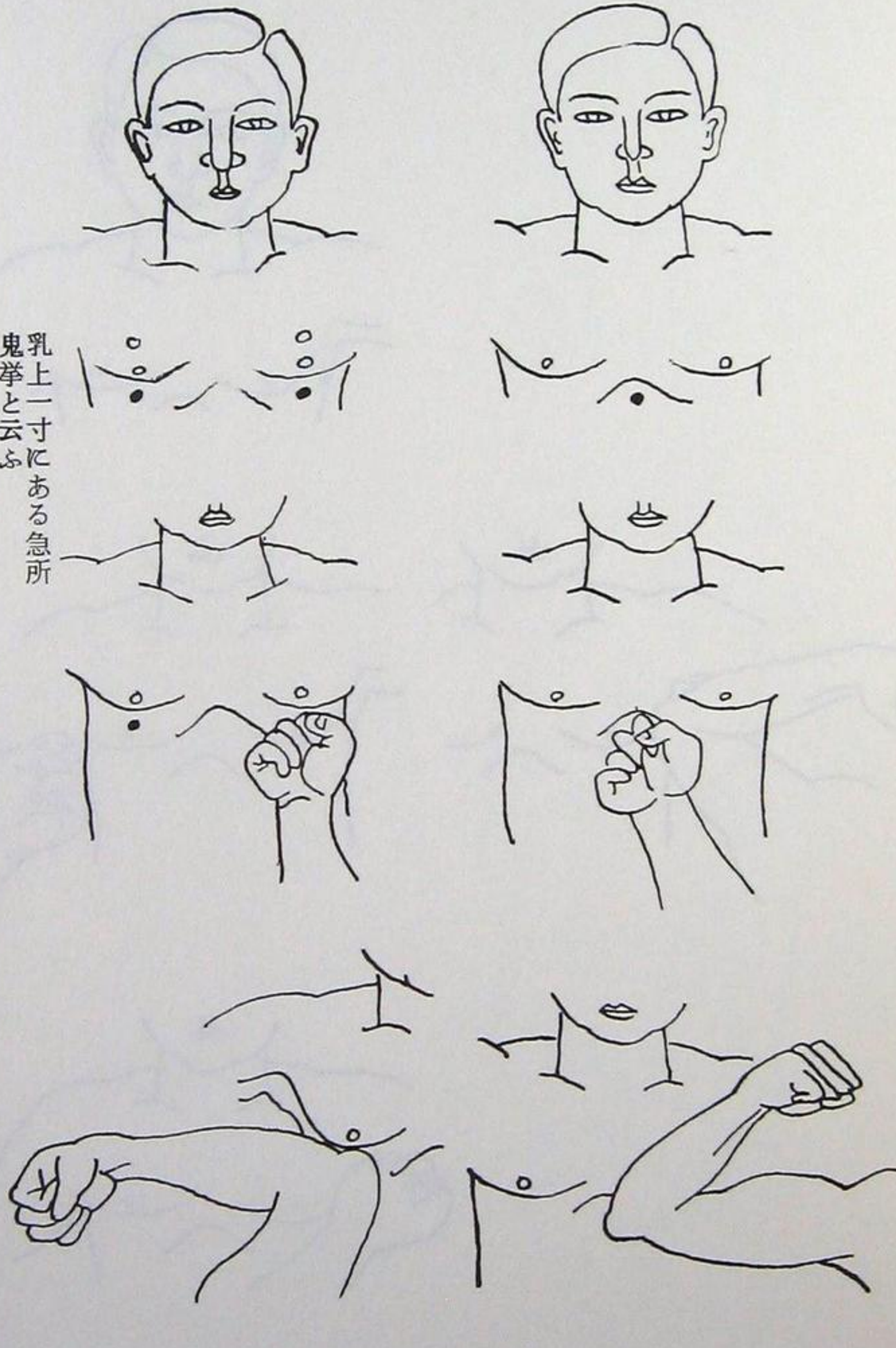




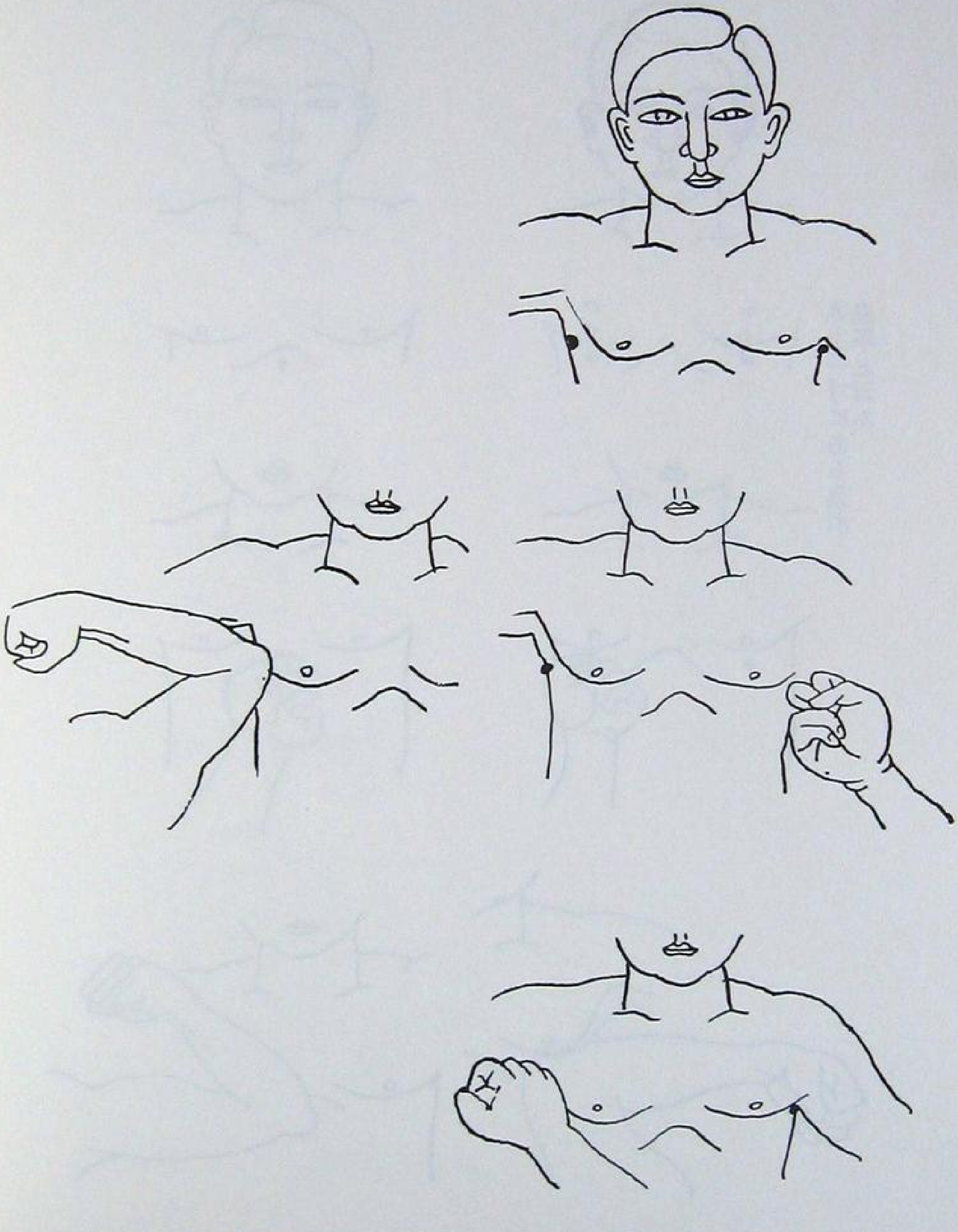


下雁　　　　月水

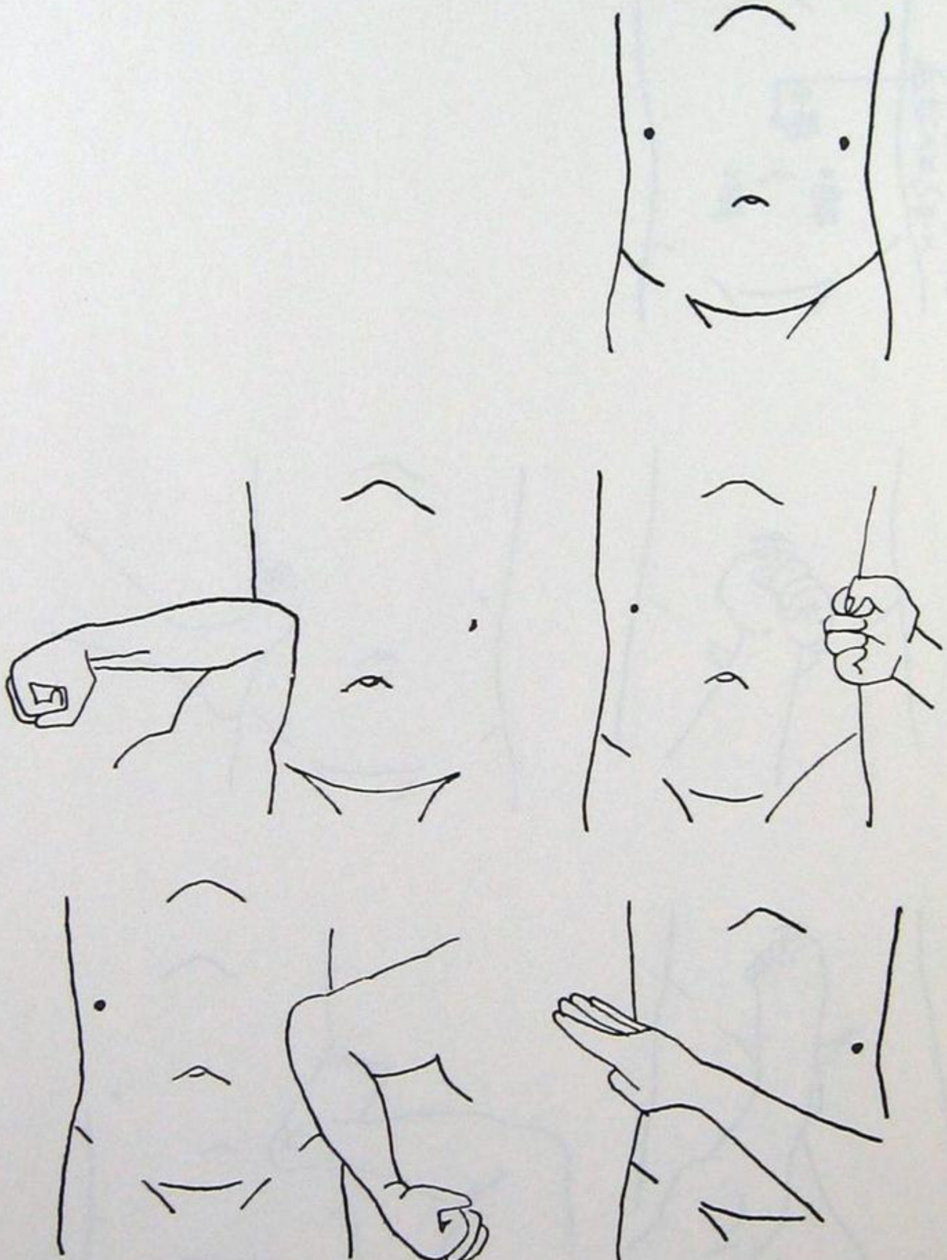
乳上一寸にある急所
鬼拳と云ふ

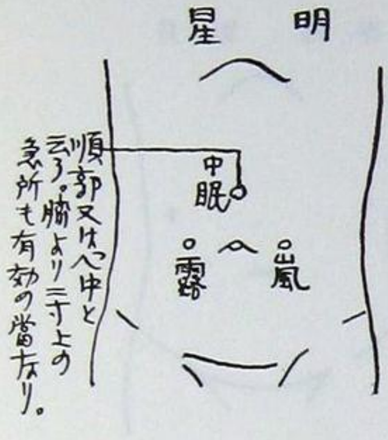


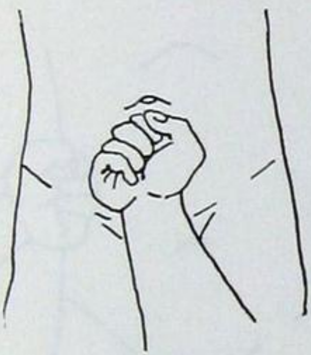
陰　脇

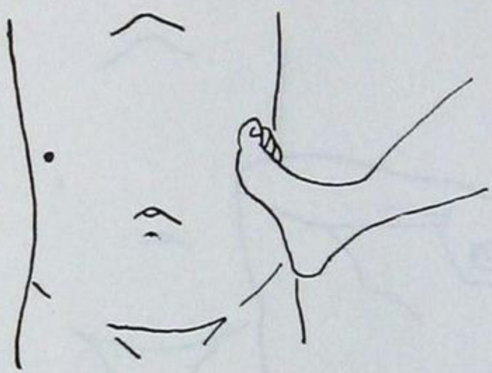


月影　稲妻




星
明
中眠
露
嵐
順部又はへ中と
云う。臍より三寸上の
急所も有効の當なり。

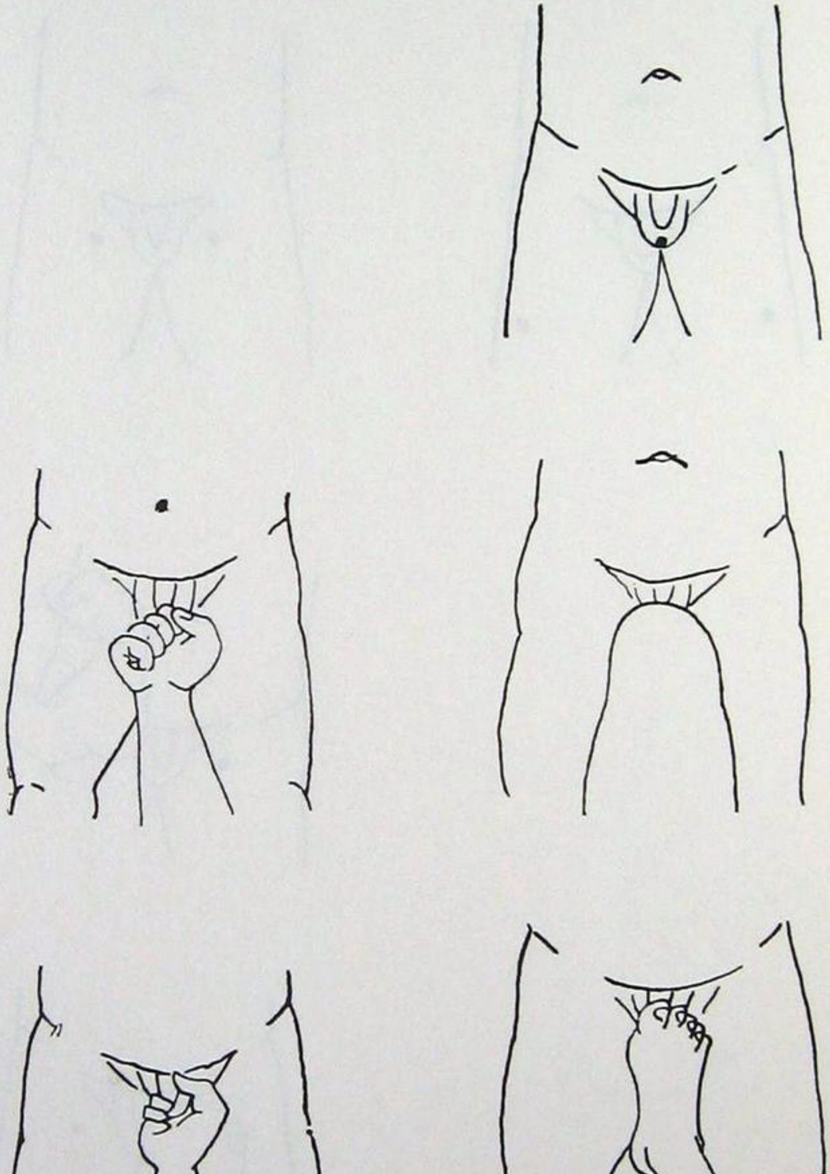




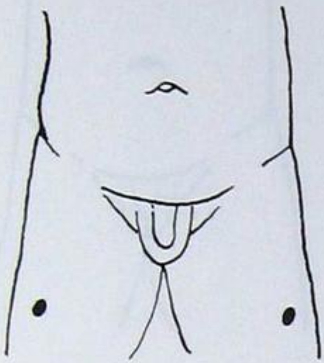




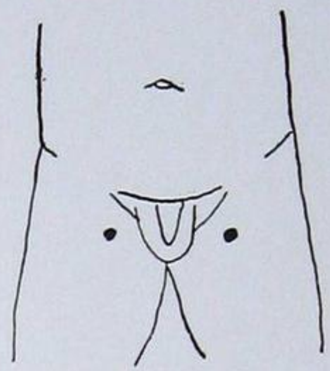
釣鐙

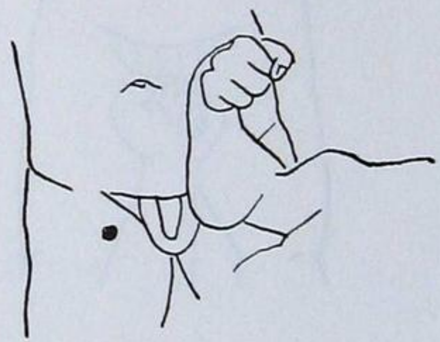


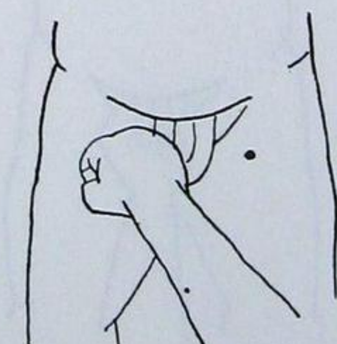
兎　伏



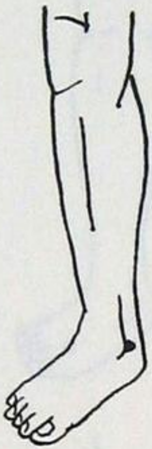
光　夜



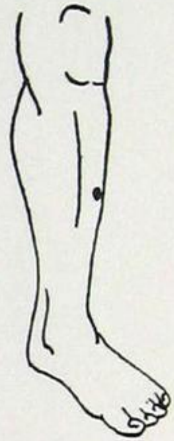


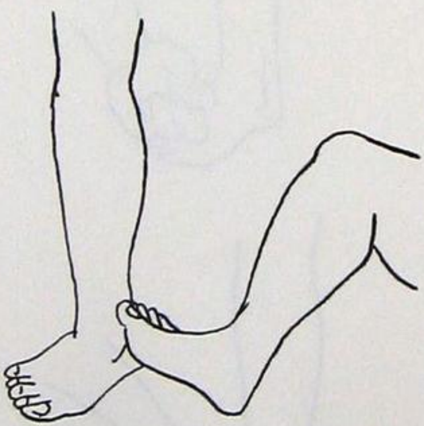


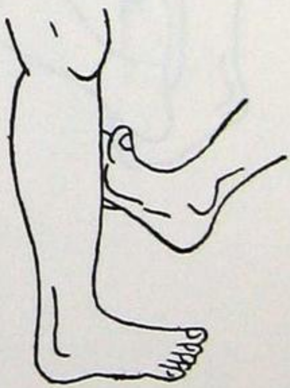
内黒節



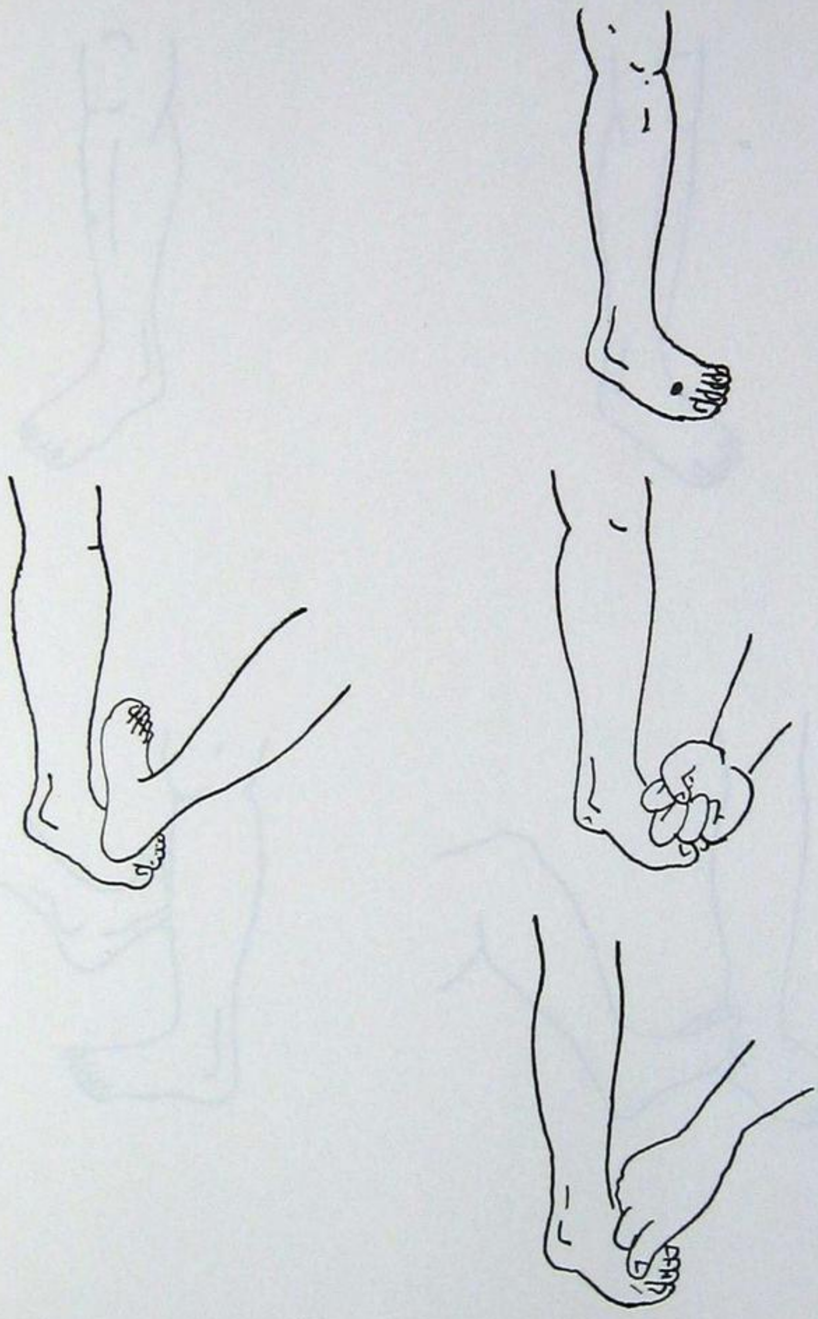
向骨



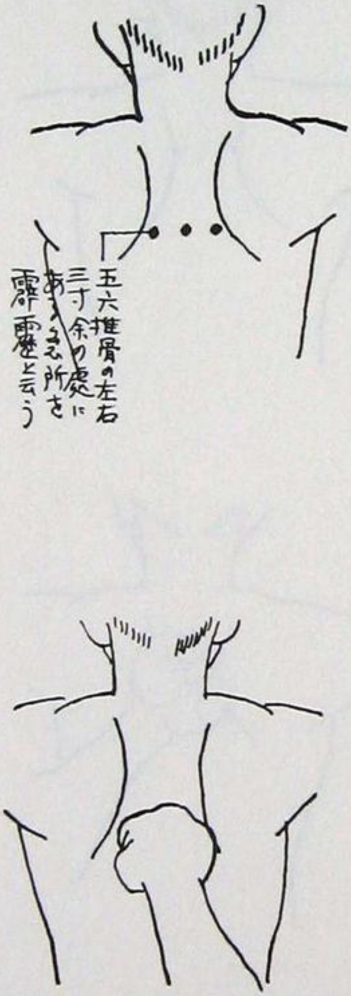




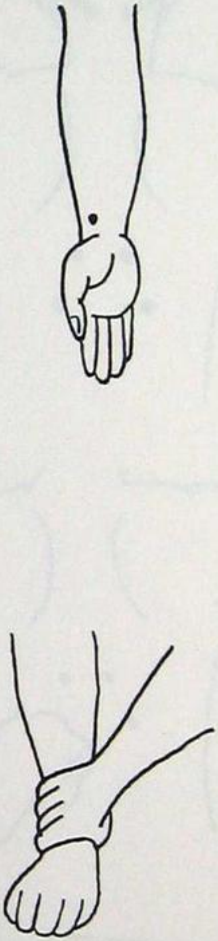
利　甲



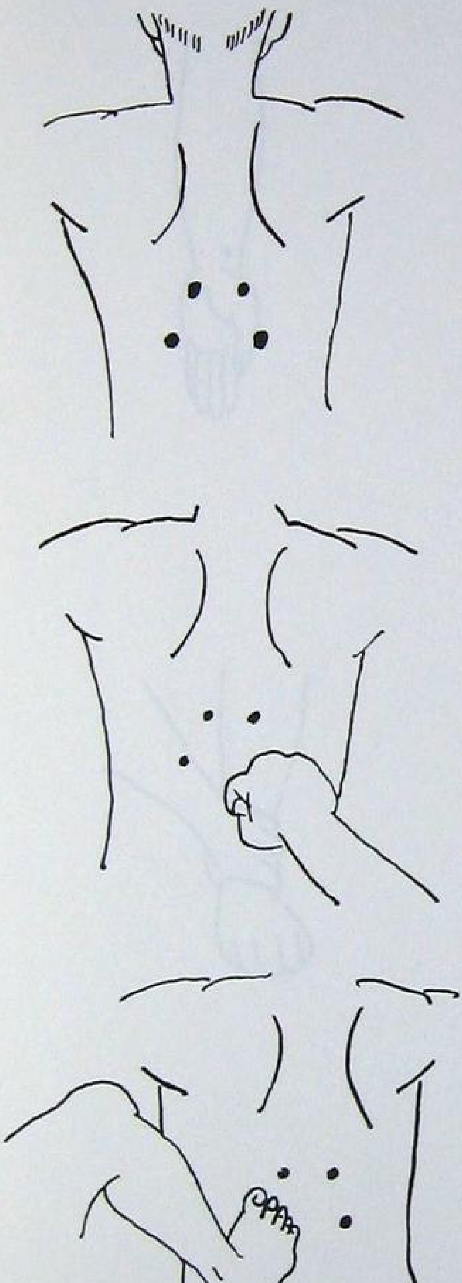
活殺



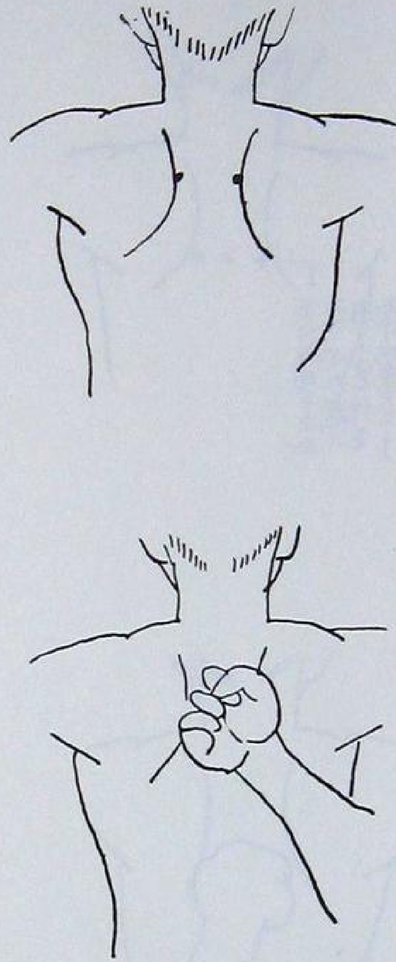
前尺沢



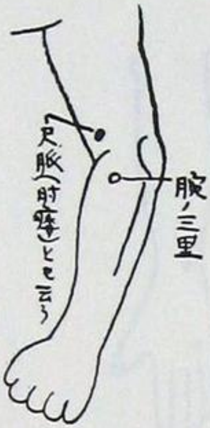
光　電



打　早

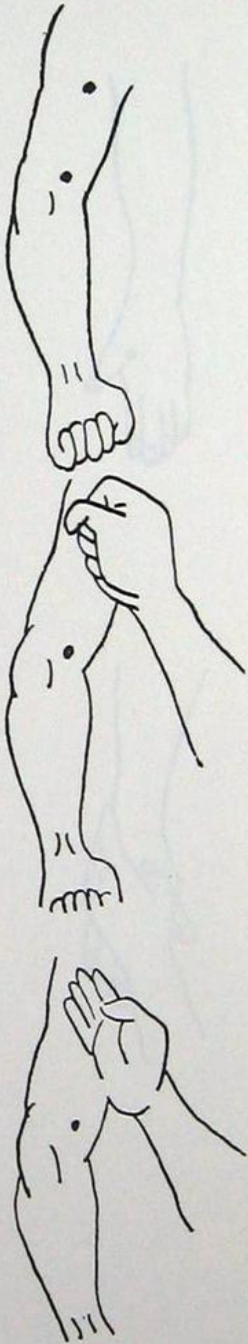


肘詰





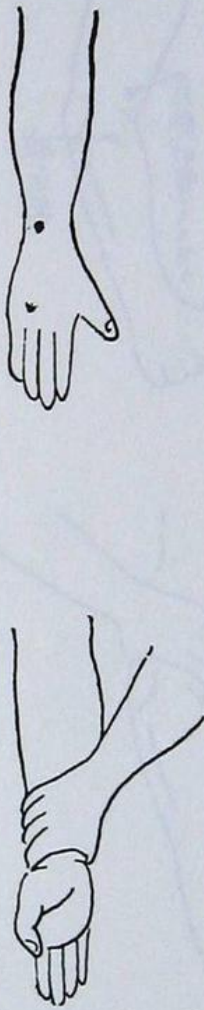
腕馴



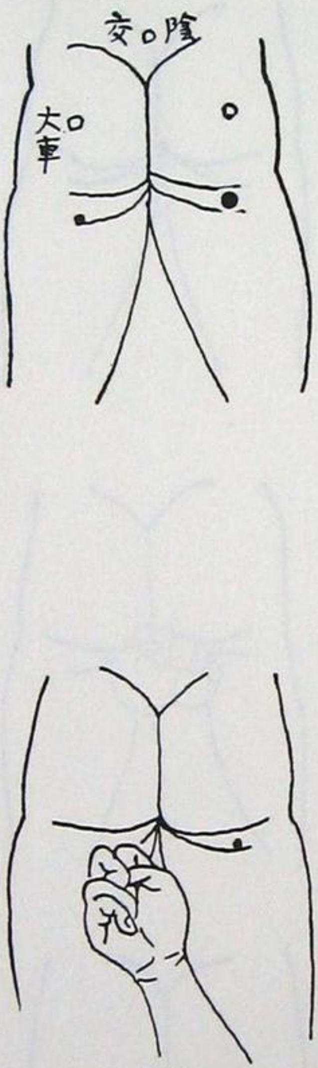
開握



後尺沢



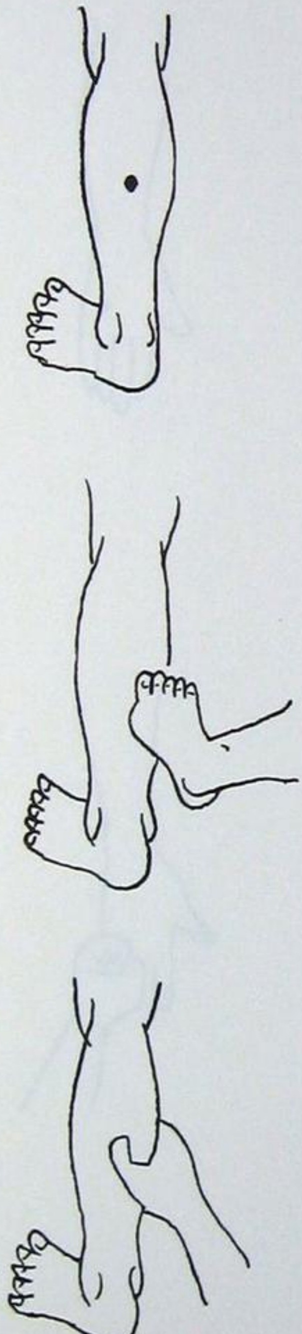
後稲妻



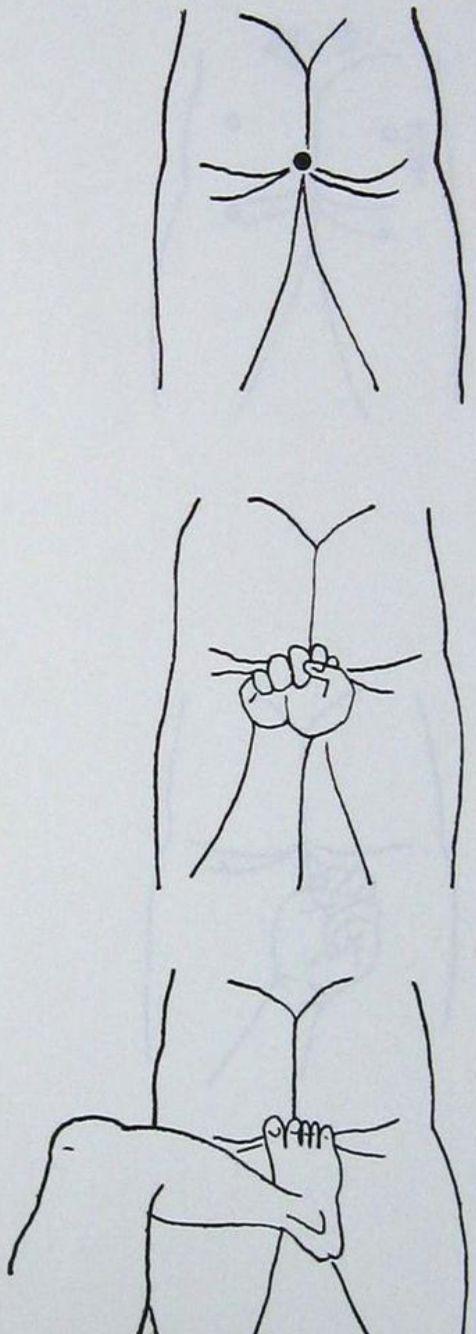
手甲



麻草



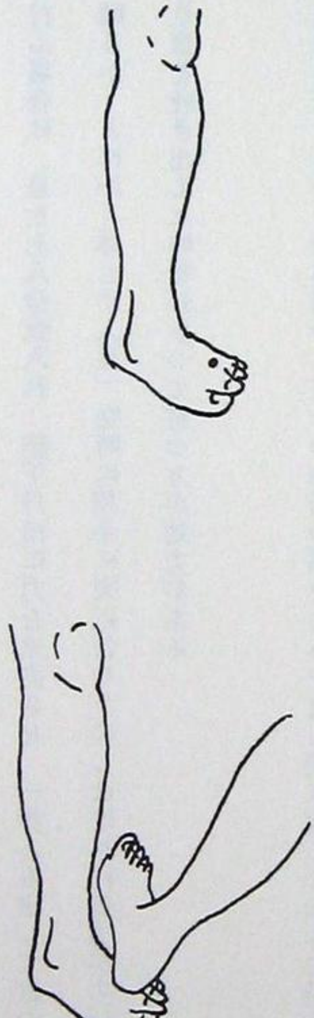
尾龟



外黒節



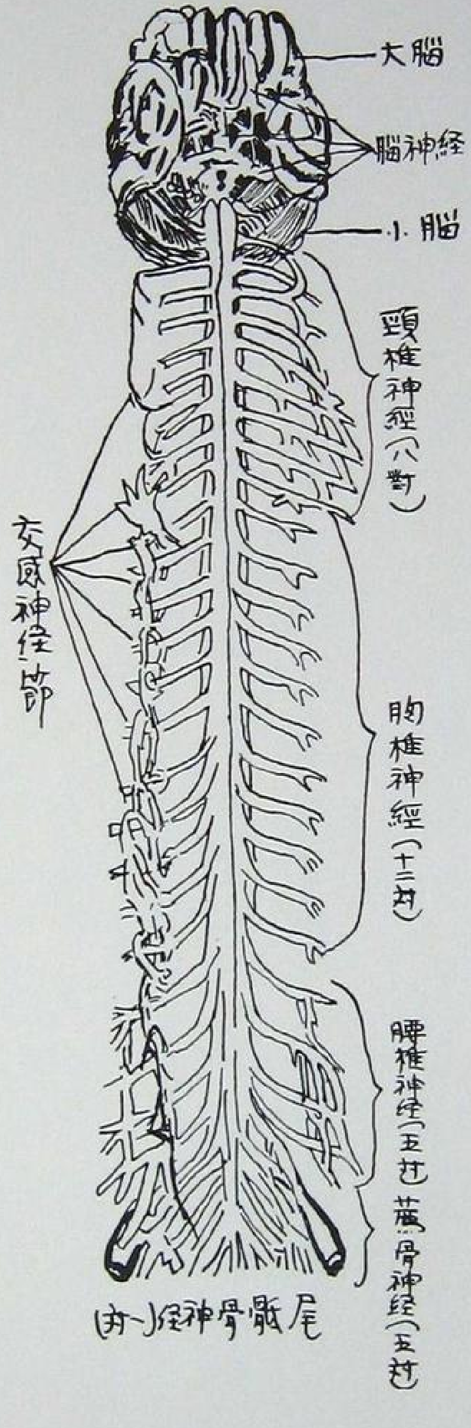
草隱

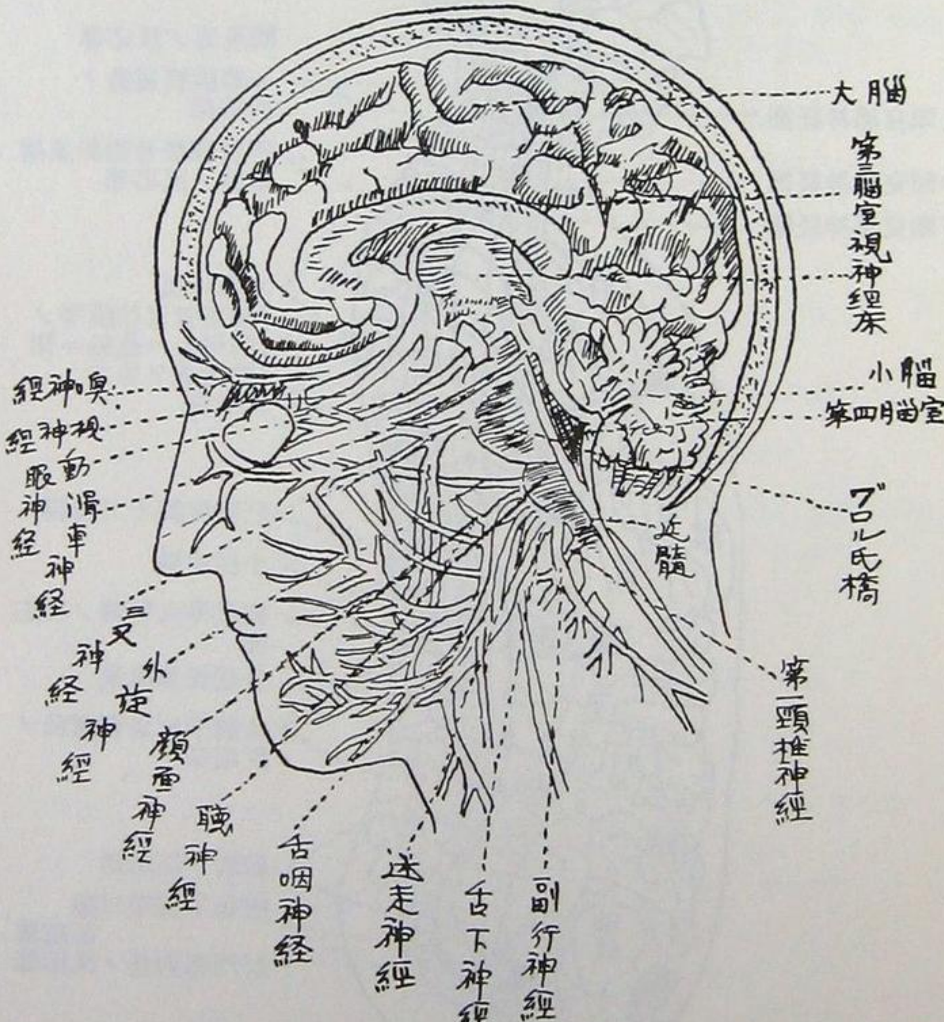


当身を行ふ場合は　息を七八分吸入れ　臍下丹田に力を充実させ　一歩ふみ出して打つか突くか　或はふみかけて蹴るか　とにかく体と手（足）全時に相手に突込むやうにしなければ効力が少い　又相手が息を吸つた時より息を吐き出した時をねらつて打つ方が効力がある

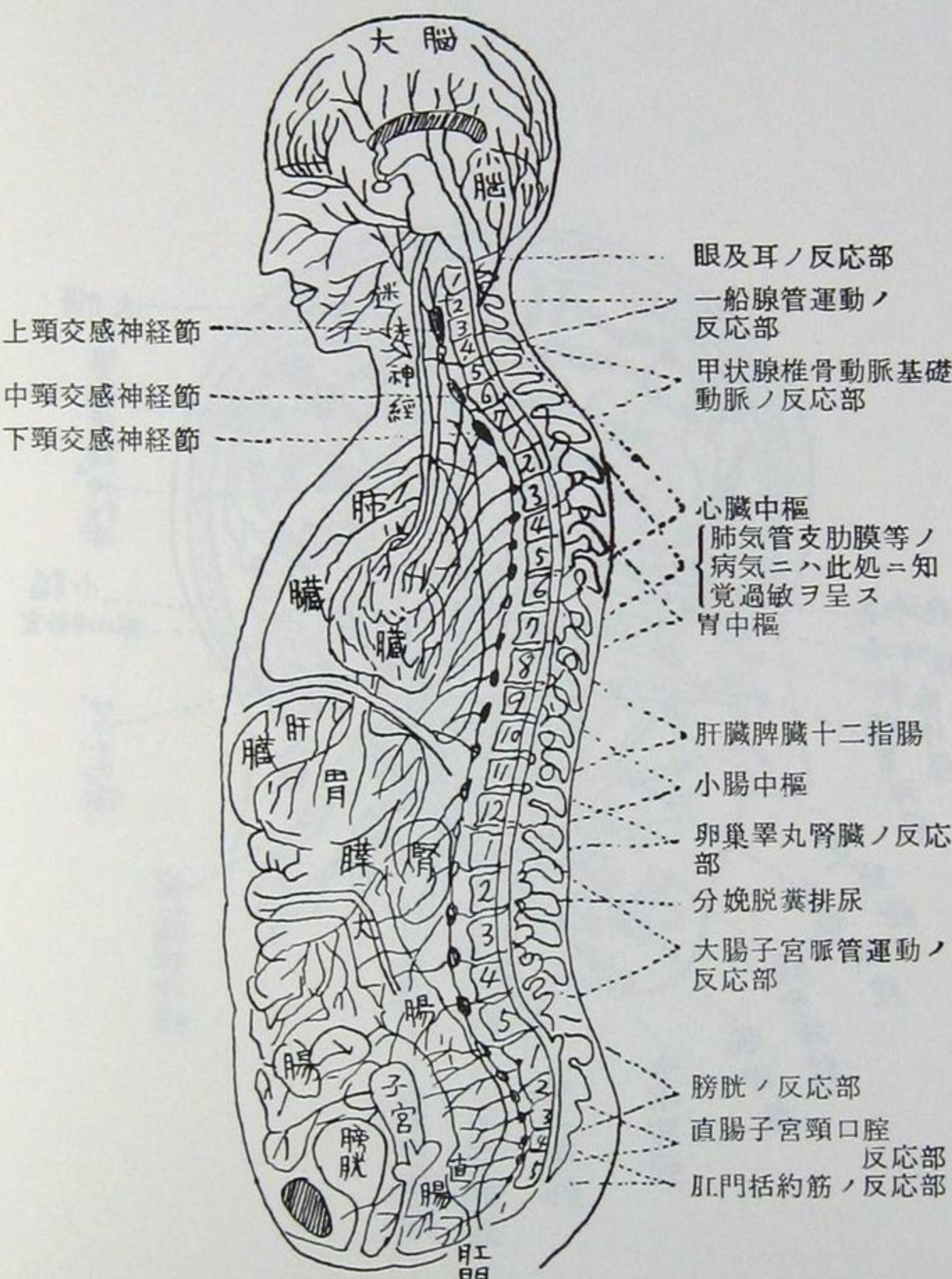
当身術極意口伝　当身を行ふ場合　只その急所の部分のみを打ち突き蹴ると云ふ心持ちで打ち突き蹴つたのでは功果は少い　頭を打つ時は地迄打ち破るつもり　蹴上る時は天迄蹴上るつもり　胸部腹部を突く時は脊を突き抜くつもり　脊を突く時は腹迄突き破るの心持ちで　打ち突き蹴つてこそ功果は大である

脳及脊髄神経根

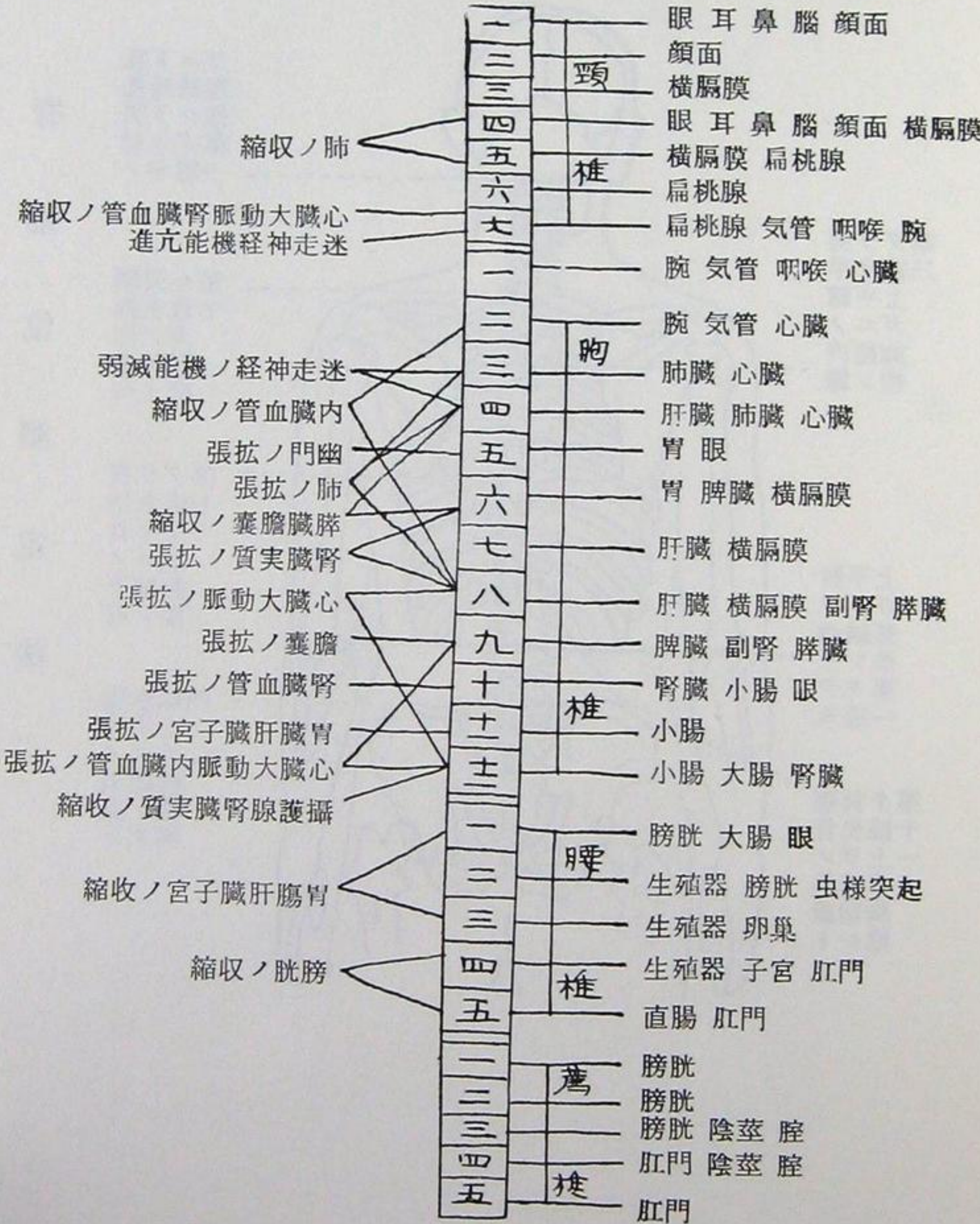



大腦
第三腦室
視神經床
小腦
第四腦室
ヴロル氏橋
延髓
第一頸椎神經
副行神經
舌下神經
迷走神經
舌咽神経
聽神經
顏面神經
外旋神經
三叉神経
滑車神経
動眼神経
視神經
臭神經

脊髄中枢神経分布図

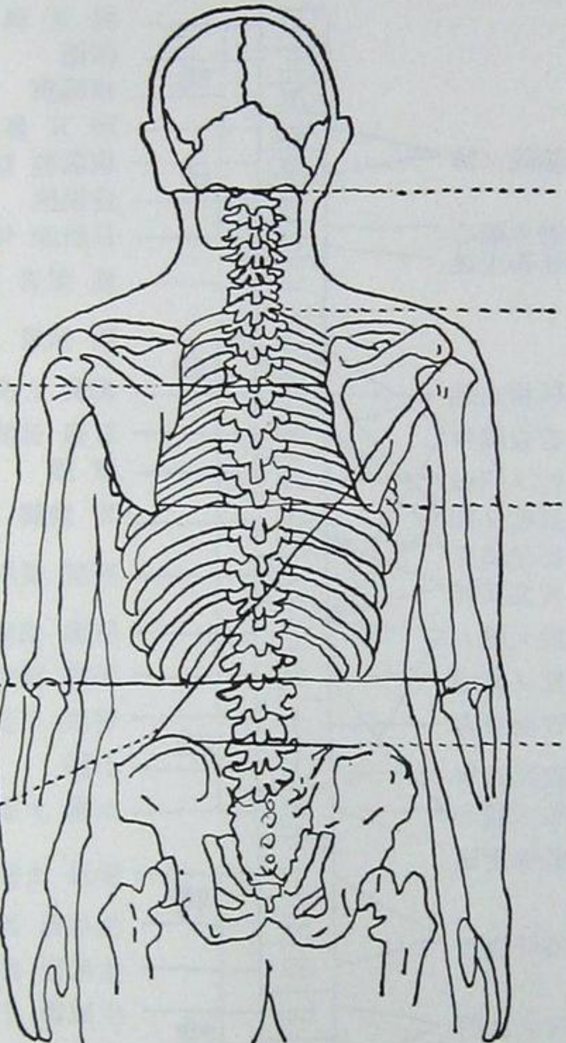

大脳
小脳
上頸交感神経節
中頸交感神経節
下頸交感神経節
迷走神経
肺臓
心臓
肝臓
胃
膵
腎
大腸
腸
子宮
膀胱
直腸
肛門
眼及耳ノ反応部
一船腺管運動ノ
反応部
甲状腺椎骨動脈基礎
動脈ノ反応部
心臓中樞
肺気管支肋膜等ノ
病気ニハ此処ニ知
覚過敏ヲ呈ス
胃中樞
肝臓脾臓十二指腸
小腸中樞
卵巣睾丸腎臓ノ反応
部
分娩脱糞排尿
大腸子宮脈管運動ノ
反応部
膀胱ノ反応部
直腸子宮頸口腔
反応部
肛門括約筋ノ反応部

脊髄中枢神経分布一覧

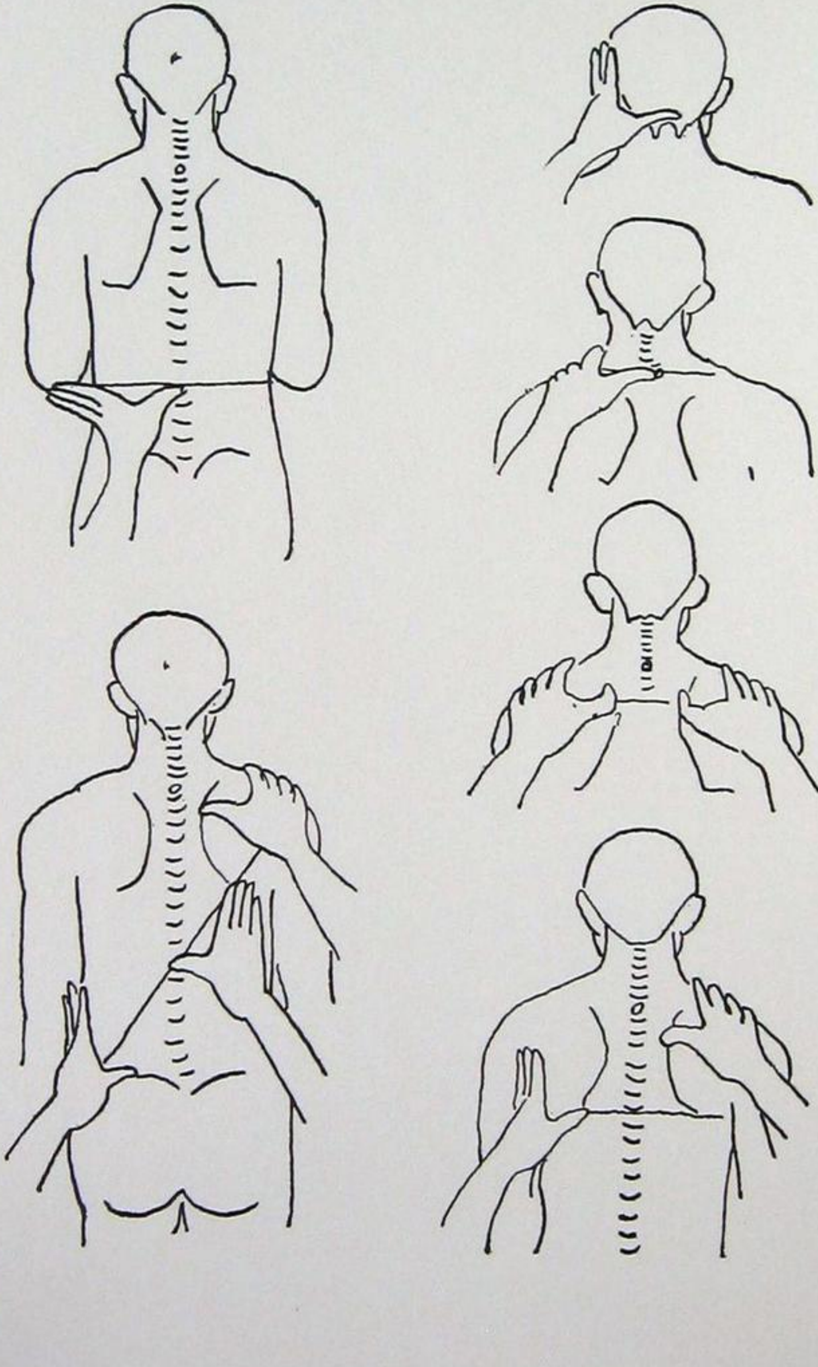


頸椎
一 二 三 四 五 六 七
眼 耳 鼻 脳 顔面
顔面
横膈膜
眼 耳 鼻 脳 顔面 横膈膜
横膈膜 扁桃腺
扁桃腺
扁桃腺 気管 咽喉 腕
肺ノ収縮
心臓大動脈腎臓血管ノ収縮
迷走神経機能亢進
胸椎
一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二
腕 気管 咽喉 心臓
腕 気管 心臓
肺臓 心臓
肝臓 肺臓 心臓
胃 眼
胃 脾臓 横膈膜
肝臓 横膈膜
肝臓 横膈膜 副腎 膵臓
脾臓 副腎 膵臓
腎臓 小腸 眼
小腸
小腸 大腸 腎臓
迷走神経ノ機能減弱
内臓血管ノ収縮
幽門ノ拡張
肺ノ拡張
膵臓膽嚢ノ収縮
腎臓実質ノ拡張
心臓大動脈ノ拡張
膽嚢ノ拡張
腎臓血管ノ拡張
胃臓肝臓子宮ノ拡張
心臓大動脈内臓血管ノ拡張
攝護腺腎臓実質ノ収縮
腰椎
一 二 三 四 五
膀胱 大腸 眼
生殖器 膀胱 虫様突起
生殖器 卵巣
生殖器 子宮 肛門
直腸 肛門
胃腸肝臓子宮ノ収縮
膀胱ノ収縮
薦椎
一 二 三 四 五
膀胱
膀胱
膀胱 陰茎 膣
肛門 陰茎 膣
肛門

脊椎位測定法


乳様突起ノ下端ヲ水平ニ結ンダ線ガ頸推第一
頸推中最モ突出シテイル骨ガ頸推第七
肩甲骨下端ヲ水平ニ結ンダ線上ガ胸推第七
腸骨ノ頂点ヲ水平ニ結ンダ線上ガ腰推第四
肩甲棘ノ内線ヲ水平ニ結ンダ線上ガ胸推第三
肘ヲ曲ゲテ水平ニ結ンダ線上ガ腰推第一
腸骨ノ外線ト肩先ヲ連結シタ線上ガ胸推第十一

脊椎位測定法



活　法

死相判別

一　水月に温気あるもの
二　眼鼻口耳臍肛門に当てたる刀鏡漆器の曇るもの
三　眼に赤線あるもの
四　口唇に血色爪色の変らざるもの
五　口唇の上下に針を刺して出血するもの
六　爪を圧へて放ち血色の戻るもの（水死の場合）
七　左乳房下に盃に水を入れのせたるものに小漣のたつもの
八　眼球に光沢あるもの
九　眼玉に術者の姿写るもの
十　眼玉の黒玉開かざるもの
十一　歯の喰ひ締りたるもの
十二　肛門の開かざるもの
十三　爪床に針を刺し眼瞼攣縮するもの
十四　出鼻の色変らざるもの

右は活法を施して効あるものと知るべし

死者に活法を施さんとする時は、先づその死相をよく
監別してからかゝらねばならない。
それには死者を仰向けにして第一に目、鼻、口、耳、
肛門（これを八穴と云ふ）等を能く改めてから、術者
は死者の左側上に左膝をつき右膝を立てゝ位置し、左
の手にて死者の両手を押へ右肩より右手を入れて抱へ
静かに起してから施すべきである



脊活

右の膝頭脊推を第五六節の辺に当て　左足を後方に引き、両手を死者の肩よりかけて両脇下に深く差入れ、指先に力を入れて死者の体を引き上げる様な気持ちで、後に引くこと二三回にして蘇生す

これは脊推より肋骨運動を促がすことによつて蘇生するのである



脊活（誘活）

術者片方の膝頭を、死者の脊推五六節の辺に当て両掌を以てよく死者の両脇より乳下辺まで摩擦してから、指先を死者の両脇下に深く差し入れ死者の体をグーッと後ろ上方に引上る様にすること二三回で蘇生す



脊　活（誘　活）

死者の上体を起し、かるい握固の小指球部か又は掌の下方にて脊椎第六節の辺を按摩の肩を叩く程度の力で軽く二三回打つと蘇生す



襟　活

（流派によるとこれを腹活と云つてゐる）

死者を仰向に寝かし　術者は其右側に右膝を付いて座し　右腕を以て死者の頸と肩を抱へる様にして其上体を起し倒れない様に能く抑へ　右手を一図の如くにして臍下明星の両脇辺に当て　エイッと其指先で上に押上げると仝時に左手で死者の上体を前に俯向かせる様にすること二三回で蘇生する

これは大小腸　肝臓　及び脾臓横隔膜の刺撃によつて蘇生するのである

第一図



肺活（一名裏活）

（この活法は脊活襟活を施して効なきに用ふ）

死者の顔を右上方に向けて俯向けに寝かせ術者は死者の両膝の辺に片膝ついて跨り死者の脊推第九節十節の左右を両掌を以て下より上へ突き込む様に押し下げては離すやうにすること三四回にして蘇生する

これは肺臓及び胃の伸縮により脊髄大動脈に通じて呼吸運動を促がすことによつて蘇生するのである



総活

総活は肺活と表裏の差がある丈にして其功力及び方法も殆んど仝じものである

死者を仰向けに寝かし其膝の辺に片膝付いて跨がり両掌を以て死者の腹部を肺活の時と仝じ様に押し上げること三四回で蘇生する

これは横隔膜より肺肝に通ずる呼吸発動を促がすことによるのである



脳活

脳活は高い処から墜ちて気を失つたり日光の直射を受けて卒倒した者等に用ふる法である

先づ死者の左側に座し左手で額を抑へ右手指先を後頸部（第一図・点の処）に当てゝ構へ息を吸ひ込み下腹に力を入れエイッと右手先を・点の処から脳中樞に向けて突き込む様に押し上げると仝時に左手で頭をやゝ後方に反らしそれを受ける様にすること二三回にして蘇生す



睾活（第一法）

睾活は陰嚢を打つか蹴られるか、又は物に当つて、睾丸が腹内に飛びこんで気絶した時に行ふ方法である

死者の両足を前方に上体を倒れぬ様よく抑へ、蹠骨部で死者の腰椎四五節の邊より薦骨の邊をコツコツと五六回蹴ると睾丸が元に復す、その時適宜他の活法を施す

この法で効なき時は、次の第二第三の方法を併用す



睾　活　（第二法）

死者の両脇下より手を入れて抱きかかえその臀部が地より四五寸離れる位迄持ち上げては落すこれを数回繰り返し行ふと睾丸が元に復すその時適宜他の活方を施すか次の方法を施す



陰嚢活法（第三法）

死者を仰向けに寝かし　術者は死者の膝の辺に右膝をついて爪立て　左足は立膝をして成る可く死者の身体にふれぬ様跨り　両手先を死者の首の後で組合せ両肘を膻中の両脇に押し当てる様にして構へ　下腹に力を入れてエイッと死者の首を持ち上げると同時に　両肘を当てる様にすると蘇生する



ト傳流極意活法

本法はト伝流極意の活法で　誘活法と総活法とを仝時に用ひた方法である

右足を立て左足を引いて膝をついて爪立て右足の膝頭を死者の脊椎五六節の辺に当てその爪先を死者の肛門の下に敷き両手先を死者の臍下の処にて組合す　そして息を吸ひ込み腹に力をこめ　エイッと両手を引くと仝時に膝頭を死者の脊椎五六節の辺に当てる様にすること二三回にして蘇生する



淺山一傳流活法

先づ死者を左手にて倒れぬ様にさゝへ　右手の五指を揃へて水月の処へ当てる　次に右足の小指の方を明星の下の処へ押し当て　左手にて活所を打つ　此の三つの動作を仝時に気合を入れて行う



人工呼吸法

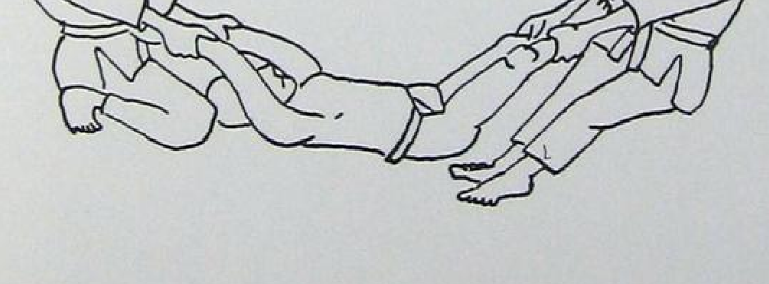
人工呼吸法（第一法）

仮死者を蘇生せしむるには前記の諸活法を用ふる丈で充分ではあるが、尚人工呼吸法も心得ていて適宜これを応用するがよい

人工呼吸法にも数種あるが先づ二人で行ふ方法から述る

死者を仰向きに寢かし一人は死者の両手を持ち一人は死者の両足を持つて二人仝時に呼吸を合せて死者の手足を伸縮すること一分間に十四五回の割で数回続行する





人工呼吸法（第二法）

一人は死者の頭の方へ回つて両手を持ち　一人は死者の膝の辺に両膝をついて爪立てゝ跨がり　両掌を死者の肋骨の下方に当てゝ構へ　二人で呼吸を合せて一人が両手を上方に引くと一人は両掌で死者の腹部を胸の方へ押上げる様にしては元の構へにもどり又行つては元にかへるといふ動作を死者の息づく迄続行する





ホルワード氏人工呼吸法

術者死者の股の辺に跨がり　両手の掌を肋骨の下方に当て　上体を屈げてその重みを加へ徐ろに上方に向つて圧し進めては（息を押し出させる運動）両手を離し体を立て直し又体を屈しては圧し進め立て直すと云ふ動作を一分間一四五回の割で死者が息を吹き返すまで続行する



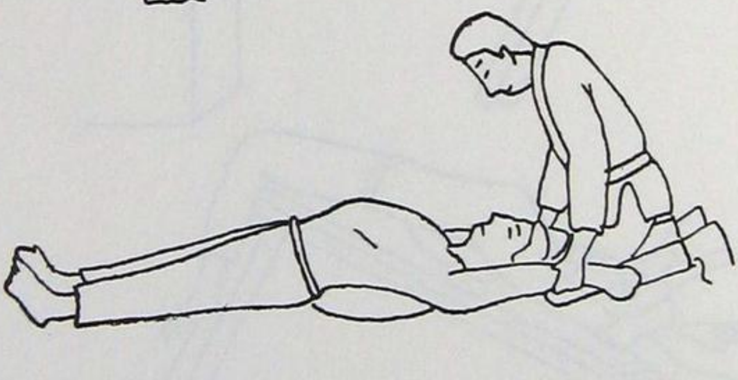


ジルヴエステル氏人工呼吸法

術者死者の頭の方に座り死者の両手を持ち「イ、ナ」と両側に充分開く様引上げ（息を吸ひ込ます運動）次に「ニイー」と引上げた両手を死者の胸の上に下し乍ら死者の上膊で肋を強く圧す（息を押出す運動）この動作を一分間十五回位の割で死者の息を吹き返す迄続行す

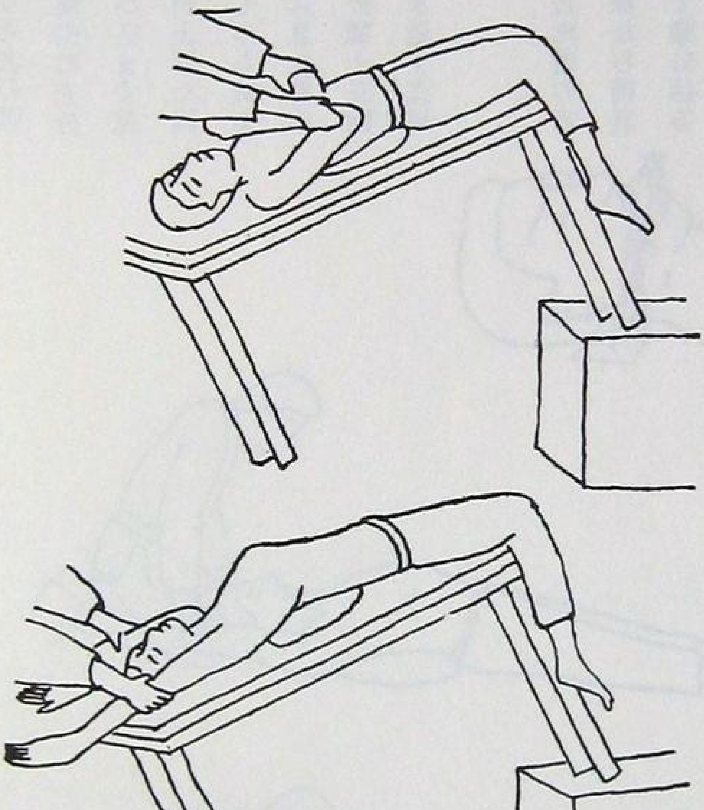
人工呼吸法を行ふ場合死者の舌が喉頭を塞いでゐる様なら術者は舌を引出して布片で頤に括るか箸で図の様にして居いてから施すがよい







ジルヴエ ステル氏人工呼吸法



マルシヤルーハル氏人工呼吸法

これは小児に適する方法である先づ
死者を俯向けに寝せ枕を胸部に当て
死者の右側前膊を死者の前額に当て
頭部を支へる様にしてをく　そして
左側の上肢と腰部を摑んで急に
死者を右下側臥に変へる（吸気）
次に再び俯臥の位置に戻し乍ら
手掌で肩胛骨間部を圧す（呼気）
これを一分間十回から十五回行
ふと蘇生す
この法は正反対の左側を下にし
て行つてもよい





シエーフアー氏人工呼吸法

仮死者の腹部に枕をして俯向に寝かせ額に当るところにも衣類か死者の上肢を枕に置く
これは死者が呼吸が出来る様にする為である
そして術者は仮死者の上に跨り胸郭の下部に両手掌を当てゝ圧迫しては離し圧迫しては離す様にする



ラボルド氏人工呼吸法

仮死者の舌を布でつかみ　強く口から引出しては戻し　この動作を一分間十五回乃至二十回位の割で行ふと喉頭の反射刺戟によつて呼吸を開始する様になる



縊死者又は絞殺者を救ふ場合の心得

縊死者或は絞殺者を発見した場合　先づオ一にそれが正死か仮死かを見分けねばならぬ　呼吸や脈搏は止り全身が冷たく死色を呈してゐても必ずしもそれが正死者といへぬ場合がある　しかし大体に於いて

一　頭　胸　腹　等に大きな傷があり　それが死の原因となつてゐるもの

一　死後数時間を経て　身体各部に青赤色の斑点を生じたるもの

一　身体が強直してしまつたもの　（但し水死の場合は例外）

一　身休が浮腫み異臭を発するやうになつたもの

一　口や鼻から液体の流出するやうになつたもの

等は正死と見て間違ひない

正死と判別がついた場合は家族のものでない限り絶対に手を触れぬ方がよい　検死前勝手に処置すると往々法律上の問題を生ずるから一切の処置は警察の指揮を待つ可きである

死体にさはつて見て未だ脇の下や鳩尾の辺に少しでも温みのある場合は十中の八九蘇生の見込みがあるからその場合は一刻も猶予せずその処置をとるがよい

縊死者を救ふには先づ綱より死者を下さねばならぬが綱は無暗に切つてはならぬ　若し無暗に切つて死体を落す様なことをするとその為めに蘇生の見込あるものも不結果に終らすことがあるから注意すべきである

二人で下ろす場合

一人は死者を抱きかゝえ　一人は台の上に乗つて片手で死者の上体を抑へ片手に極く切れる刃物を持つて静に綱を切り死者をしづかに下ろす

一人で下ろす場合

死者の下に台を置き　両足をふみたゝせる様にし術者は台に片足をかけ片手で死者が倒れぬ様によく上体を抑へ片手に極く切れる刃物を持つて静かに綱を切り払ひ死者の体を倒さぬ様しづかに抱へ下して寝かす





縊死者を蘇生せしむる法

縊死者を静かに抱き下したら仰向きに寝かせ一人は死者の頭髪を握り真直ぐに稍や強目に引張つて居り他の一人は腹を上方に撫上げ一人は管で両耳を吹くと息を吹き返す呼吸を始めたら煙草の煙を鼻孔に吹き込んでやるか肉桂皮を濃く煎じて盃に一杯のませる



極意拳法 當身殺活法明解
藤田西湖著作集四—一
平成五年九月二十五日　印刷・発行
著　者　藤田西湖
発行者　西澤楯雄
発行所　名著刊行会
東京都千代田区神田神保町二—二〇
ISBN4-8390-0280-0